

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十年九月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通巻九七六号



日川協加盟

No. 976

特集 ペットものがたり

九月号

第14回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 20年10月5日(日) 午前10時～11時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3階 生駒の間
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成19年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成20年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「薫風さんさん」 楽原道夫氏
兼題 「奏でる」 (大阪) 鴨谷瑠美子 選
「天狗」 (兵庫) 北野哲男 選
「従う」 (神奈川) 小野句多留 選
「プラス」 (島根) 三島淞丘 選
「ぎりぎり」 (青森) 相馬銀波 選
「憧れ」(事前投句・9月5日締切) 河内天笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午(午後4時半終了予定)

会 費 2,000円 当日いただきます。
(記念品:改訂増補『橘高薫風川柳句集』全句索引・他呈)

《懇親宴》

と き 同日 午後5時～7時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3階 葛城の間
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

- ◇事前投句および懇親宴・宿泊のお申込は本誌同封のハガキに明記の上、9月5日(金)までに本社事務所宛お願いします。
- ◇懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の払込用紙でお願い致します。
- ◇記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

主催 川柳塔社

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎06-6779-3490

百年杉

河内 天笑

夏雲を遊ばせている杉の杜 天笑

百年杉伐採の様子を見て頂くという建築業者の招きで去る七月の第四日曜日に奈良原川上村の伐採現場へ行つた。一行の平均年齢は三十五歳から四〇歳。われわれ夫婦はとび抜けた高齢者。堺を出て一時間半程で吉野川沿いに山間の川上村に到着、山主の社長さんが見学者一行を出迎えてくれる。お茶をいただいたあと、秋田・木曾・吉野の日本三大美林の話にはじまり、植林された杉山のみどりの濃淡でその杉の年齢がおおよそ判断出来る話。また森は水を貯えるダムであること。そして、間伐が良質の杉をつくり森を立派に育てる事など改めて実感させられる。

最近何故爆発的に杉花粉が増えたかについても触れられ、戦後の復興事業として行われたスギの植林は植林後四〇年で成木になり、その後五〇年間花粉をとばし続けるが戦後大規模に植林された杉が成木した今、花粉を猛烈にとばし続けている為だという。更に間伐に携わるべき若い労働者が山よりも町へ移った結果間伐が進まず、杉は細り、

木は自分たちの生命の危機を感じて生殖本能が活発化し、よりたくさん花粉を飛ばす結果を招いているのだと社長熱弁がつづく。材木置場や木工工場を移動しながら約一時間説明いただいたあと本日のメインイベントの伐採場へ。

樹から樹に渡した太いロープ伝いに登ること約一五〇米。道路が真下に見える程きつい傾斜の伐採現場だ。直径七、八十センチ程の杉に体を預け足元をしっかり確かめて杉の大木の伐採見物と相成る。直径一メートル、背丈約四〇メートル程の杉のほどにロープをかけ倒す方向に二人がロープの両端を握って待つ。二等辺三角形の真ん中の木の根元で方角を確認しながらチェーンソーを掛ける。杉の木はゆっくりと物の見事に他の樹間を縫ってどっしーんと地面に到達する。とこんな具合です。

すがすがしい山の気をもらい、多くのことを学んだ一日であった。

情念を燃やしつづけてきた巨木(斎藤大雄氏を悼む) 天笑

ひみつです美女と仲よくなれる壺

御座候食べても妻は太らない

留守の間に妻蜂の巣をやつつける

世の中で妻はいちばん文句たれ

〃
〃
〃
〃



座右の句

立話長うて犬も坐り換え

私の句

のりしろの幅を太くして生きる

(薫風)

横山捷也

川柳塔 九月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋〔倉吉〕

■巻頭言 百年杉……………	河内天笑……………	(1)
漢字に手をさしのべて……………	都倉求芽……………	(2)
川柳塔(同人吟)……………	河内天笑選……………	(4)
温故知新……………	……………	(45)
川柳塔の川柳讃歌(45)……………	木津川 計……………	(46)
麻生路郎句抄……………	……………	(47)
自選集……………	……………	(48)
水煙抄……………	小島蘭幸選……………	(52)
■特集 ペットものがたり……………	……………	(71)

水野 黒兎・穴吹 尚士・鴨谷瑠美子・田中 みね
 西出 楓楽・松本 文子・三宅 満子・亀岡 哲子
 太田扶美代・清川 玲子・古久保和子・森田 明子

漢字に手をさしのべて

都倉求芽

俺、嘘、噂、嬉、観、濡、叩、撫、朋、
 こんな字はみなさん日常、また作句上にな
 げなく使っておられると思いますが、実はこ
 れみんな常用漢字ではないのです。

昭和二十一年十一月発足した当用漢字一八
 五〇字(うち教育漢字八八一字)から、何度
 か手直しされてきた常用漢字表が、今年も文
 化審議会小委員会によって第三次案を七月に
 提出、決定答申は平成二十二年にされます。
 しかし、五月の第一次案、二百二十字(人体
 部称、植物、動物、地名の多数が編入)の中
 から冒頭の字が今回も除外されました。

新聞でも本記事やコラムでは忠実に守られ
 ているが小説、エッセー、また広告など、ま
 して一般雑誌では殆どフリーパス、読む側と
 してもなんの抵抗もなく読み下しています。
 そんな字が何故常用として認められないので
 しょうか。委員会の言い分は、熟語としては
 使用頻度が少ない。単独語なら仮名でも意味
 が通用する」とあります。

そうでしょうか。漢字というものは表意文
 字、あるいは表音文字として高く評価されて
 いるものです。文芸の世界なら常識の範囲で

愛染帖……………新家完司選……………(78)

誹風柳多留一篇研究 38……………高瀬霜石・木本朱夏共選……………(82)

檸檬抄「穴」……………高瀬霜石・木本朱夏共選……………(84)

一路集
「短 い」……………両川洋々選……………(86)
「目」……………高杉千步選……………(86)

「メニユー」……………上地登美代選……………(87)
初歩教室「字」……………三宅保州……………(88)

秀句鑑賞「同人吟」……………中居善信……………(90)
「水煙抄」……………早川遡行……………(92)

■句集紹介『山びこの詩』前たもつ著……………木本朱夏……………(93)

八月本社句会……………各地柳壇(佳句地十選/小谷美ツ千)……………(94)

柳界展望……………柳界展望……………(95)

九月各地句会案内……………九月各地句会案内……………(116)

■編集後記(ひとこと/早川清生)……………希久子・尚士……………(118)

座右の句……………座右の句……………(智 子)

私の句……………私の句……………(智 子)

峠越え落した面の二つ三つ……………峠越え落した面の二つ三つ……………山田 葉 子

活躍しています。何故これほど制限しなくては
いけないのでしょうか。因みに本誌七月号
から何ページか拾ってみました。

⑤だとは承知のうえで握手する
いわあ

好き嫌いなく健やかに老いの⑥
一風

頰骨の高さ妥協をしない顔
啓子

針穴を抜けて⑦が旅に出る
あすなろ

ロツカーでギャルが⑧妖婦に早変わり
一花

連休を家ですごしているも⑨
句多留

またひとり昭和を遠くする⑩
遡行

他人のような暮らしに⑪
遡行

いい人の⑫は声を⑬
好

一走り便箋⑭封筒百均で
柳右子

□は今回編入 ○は除外

小学校から英語を習得する、それも時代の
流れとしてはいいでしょうけれど、自国の文
化を疎かにせず、両立させてこそお互いの良
さが理解できるはずです。元はといえば漢の
国から来た外来語ですがこれだけ国語として
消化してきた国民だから、新しい外来語も、
同時に自国語も大いに研鑽して世界に通用す
る漢字、日本語を広めるためまず足元から教
育の大事さが痛感されます。

(7月16日追加発表で「俺」が暫定案と
して編入になりました)



河内天笑選

大阪市 谷口 義

姉さんが改札口で待っている

旅愁とは赤字路線で見る夕陽

旅先で暑中御見舞申し上げ

一族に画家は一人も出ていない

烏賊の絵は烏賊だとすぐに分かります

モノリザは決して打ち解けていない

和歌山市 古久保 和子

漬物の石も我が家の顔になる

ていねいに西瓜の種を取るオトコ

二枚目のメモにうつつすら悪巧み

風鈴が教えてくれる風の道

足の爪切るのに呼吸整える

のほほんと差出人のない手紙

鳥取県 石谷 美恵子

潮どきとみたか財布を任される

この恋もいまが潮どきかも知れぬ

鈴虫の雄よお前は本望か

太刀打ちのできぬジョークが切り返す

運不運もう比べまい愚痴のまい

お金にはいつでも苛められています

大洲市 中居 善信

台風の目のなかに居る無力感

曖昧な言葉を選ぶ目の虚ろ

辻褄を合わす何処かにあるほつれ

死刑囚の母は祈っているだろう

殻破る外の空気を吸うために

共犯者やがて誰かが口を割る

神戸市 田中 章子

喫煙のカフェーに集う少数派

菜園のトマトからすとシエアをする

断面図メトロの下にあるメトロ

もてなしの心いたたく一杯目

厭な目にあつた日の土黙してる

ふんどしとスピードの差は大きすぎ

吹田市 穴吹尚士

この国の未来はやはり信じたい
良心がもう擦り切れている日本
国民が邪険になつてきた格差
誠実を演じ続けてきた疲れ
もう誰も見ていないのに振るタクト
自分史に粉飾がある闇がある

京都市 高島啓子

水彩で描くと揺れだす秋ざくら
日常を描きこんでいく細密画
騙し絵の中で降りたりのほったり
寝室に置く撫で肩の風景画
まっとうに生きて余生の絵のおぼろ
襖絵の中でしばらく眠ります

橿原市 居谷真理子

夜明け前もの書く音のまだ続く
平凡な暮らしを飾るオノマトペ
花ケーキ母を泣かせに登る坂
セールの計算づくの国訛り
泣ける場所持つてるらしい雲隠れ
飲み干そう君の言葉はいい匂い

吹田市 山本希久子

お地蔵様のほてり夕立待つている
雨雲が去って会えそうな予感
三日前の日記を書いている机

コンピニのおかず言い訳そえて出す
てのひらにペットの命遊ばせる
風船の軽さ私の名の軽さ

神戸市 両川無限

おふくろの味がメニューから消えた
針千本涼しい顔で吞んでいる
無意識に反応してる銭の音
生きてるか指で突ついて確かめる
譲れない本音が串に刺してある
堂々と逆らつたから悔いはない

西宮市 菊池トミエ

紫陽花の藍にゆだねるもの多く
取立てて話題ない日よ冷奴
大まかな時刻で足りる老いの日日
くたびれて緑の雨とねんごろに
普段着に替えて呼吸が軽くなる
百円で買った金魚がたくましい

東広島市 福島万年

薯を掘るポテトサラダの好きな子と
いつの間にか妻のリズムになつている
石段を見上げて二人手を合やす
ゴキブリを打つてたいて妻元氣
金本がかわいい憎いカープファン
ご馳走を食べて終つたG8

堺市村上玄也

失態は昔話として明かす

満月が出たがあいにく酒が切れ

少数の意見無視する民主主義

ライバルに知られたくない医者通い

究極のお洒落は笑顔だと思ふ

諦めた頃に出てくる探し物

大阪府澤田和重

腹よじる笑い暫くしていない

初対面酒が出るまで打ち解けず

他人の損など聞いても面白い

強気だな仏頂面が揺るがない

側にいることも介護や寝息きく

内助の功なんとでっかい愛だろう

藤井寺市太田扶美代

閉じ込めるほどの悲しみでもないか

悔しさは涙の涸れるまでとする

八月のあの日うつすらほんやりと

苦手から逃げ出す癖を持っている

単線の駅で休んでいたトンボ

ここが好き貧乏神が出て行かぬ

西宮市片山忠

物分かり良すぎ反って嫌われる

仕事から開放された遊び下手

弱いから阪神ファンだったのに

田舎にも薄情者は居てまっせ

悪いのは全部わたしという詭弁

二人ではトイレ取り合うこともない

豊中市水野黒兔

肩書が外れてからの屋台酒

駅弁で特産品を知る旅路

打ち水で地球を救う温暖化

階段が多くて威厳増すお寺

バス停に廃校の名がなお残る

ぜんぜんを肯定形に酒を飲む

鳥取市倉益一瑤

生涯を場所取りゲームして終り

カラフルな生きざまもあるモンロー忌

まんまるい眼鏡に油断してしまい

わたくしの椅子がときどき消えている

へその位置元に戻して床に就き

ハングリーを知らぬ若さに骨がない

尼崎市軸丸勝巳

落書きの罪の深さを知らぬ筆

じわじわと上がる卵よお前もか

原油高イカの命が二日延び

後期高齢まだ成長の続く瓜

呆け防止クイズ番組外せない

今月も長生きの税計の知らせ

さいたま市 八田 敏

武蔵野市 亀井 円女

新しい団地で老友ふえてくる

老友は気持通じて皆くどい

カタログに操られてる花作り

是非欲しく買った品物すぐに邪魔

サミットは無事でどうなる温暖化

さいたま市 星野 育子

手ぶらでも行けば喜ぶ友がいる

平凡がいいと分かった大事件

頑張っているのに言えば頑張れと

相手次第で物差しのびたり縮んだり

花時計恋の行方を思案する

東京都 清原 悦子

粗茶ですと出されて飲んだ深い味

ほとぼりが冷めた頃には秋になり

泥んこで遊ぶ子供の絵が消える

慣れぬ下駄履いて温泉旅気分

リラックスしながら脳を切り替える

東京都 岸野 あやめ

彬の碑大阪城に根を下ろす

大違い船場吉兆くだおれ

言訳がうますぎるのが怪しいね

バス停にメールの母とゲームの子

ままごとの道具が好きな認知症

鬼でも蛇でも笑顔はきつと仏さま

長生きをほめられるほど複雑だ

やっぱりイチロー野球の神は健在だ

食べてねて笑えるわたしまだ持つわ

笑い皺なら人の三倍いとおしや

横浜市 菊地 政勝

医療費を七割引きで生かされる

買い溜めを後悔させる期限切れ

疑問符がとれぬ女房のエステ代

捨てるのがもつたいたなくて場所塞ぐ

枕にはちと堅過ぎる広辞苑

横浜市 小野 句多留

自転車のモラルが浮上原油高

雨季なんの熟女が群れる花詣で

柳橋三味の音らしき昼下り

無我夢中誰でもいいと言う凶器

別室に呼ばれて医師が改まり

富山市 島 ひかる

白神の母なる森で蘇る

秋田駒小岳の疲れ乳頭湯

方言の自己紹介で名を知られ

何食べていてもおいしいなと思

また逢えることを信じて手を握る

可児市 板山 まみ子

贅沢を戒めている原油高

死ぬまでは病気になるてなれぬ国

目の中に入れた孫とも距離をおき

口出しはしないが金は出してやる

里帰り少しは遠慮しなさいよ

可児市 鶴留 百合

群れて飛ぶ蛍の里はライト消し

開通の直後の事故にもう閉鎖

夕立のあとの散歩のさわやかさ

早番の出勤欠伸かみ殺し

ファッションも我慢ガマンのロングヘア

静岡県 菌田 獏 杏

労わりの言葉を入れて夏便り

苦しみを逃げると運もまた逃げる

空港に重機が唸り視察団

鯨にもかしこみ申す地鎮祭

長寿国めでたい訳が見付からず

愛知県 早川 遯 行

追い越され負けず嫌いなスニーカー

借景の城も自慢の一戸建

救急車一度も乗ったことがない

吠えられた犬を決して忘れない

階段を上り詰めると浄土なり

犬山市 関本 かつ子

過去形の話を嫌う顔の艶

深々と社員のせいにするお詫び

ポーナスは禁句派遣の暑い夏

アルバムを練れば家族が溢れ出し

殺し合う宗教麻薬より悪い

犬山市 吉田 幸子

早口と略語呑み込めない私

居心地が良いか前線長居して

一匹の蚊に手こずった苦笑い

外食へ疑い深い盛り合わせ

焦点が合わぬ難儀な針の穴

京都市 榊本 宏子

絵に描けば美しすぎる高齢者

アイラブユー賞味期限が過ぎました

西方へ旅路を急ぐ友増える

京の街辻ごとおわす地蔵尊

さば寿しに兄弟集うまつりの夜

京都市 三宅 満子

物入りか京の托鉢よう来はる

いつからか西瓜丸ごと切つてない

夕立ちに息吹きかえす千枚田

踊らされまた安売りの無駄を買う

万葉の森吹き抜ける青い風

京都市 坪井孝一

十本の指の主張を聞いてやる
逆らわず運命線に沿ってゆく
あの人のB面知った無二の友
強情な赤鉛筆に困ってる
一言のごめん言えない二人仲

亀岡市 井上森生

シエルターを買う核用と地震用
天罰は死語天災は無くならぬ
からっぽの頭ストレス寄りつかぬ
気構えはいつも矍鑠たる笑顔
顔つきが免疫力を強くする

長岡京市 山田葉子

近所の留守角のおばさん知っている
10年のパスポート手に羽が生え
うんちくを披露のグルメ止まらない
思いとどまる通り魔もいただろう
サイコロの示した運に乗ってゆく

八幡市 結城君子

鏡よ鏡右頬だけに出来た皺
定年の息子が作るきゅうりほめ
彩あせて香り残してバジル枯れ
コノハズクのように引越し出来たなら
今大事明日のことは言わぬこと

大阪市 鶴田遠野

晩酌の時間は守る妻の留守
夏休み帰省の子らにまた盗られ
原油高名を変え生活攻めてくる
丸い背になった男の妥協癖
煩惱を点す二人の法善寺

大阪市 古今堂蕉子

ハイビスカスまだまだ咲くと言ってくれ
姉よりも姉に見られるこれが癪
一日一争二人の娯楽かもしれぬ
愛してるなんて言葉の頼りなさ
夕食は簡単レシピから作る

大阪市 榎本日の出

夏ばてを知らずに過ごす肥満体
久し振り丸ごと買ったのは西瓜
有名人名刺なんかは要りません
無い知恵をしぼって手抜考える
平和ですベトナム社会も高齢化

大阪市 榎本舞夢

雨宿り束の間だけのツーショット
同窓会過ぎた歩幅が皺に出る
何歳になってもロマン持ちつづけ
伝えたい一心筆で書き残す
離婚せずまだ暮してゐる内は吉

大阪市 熊代 菜月

数ばかり増える葉を持ってあまし
褒めた後ポツポツ出るぞお説教

腹の底見せて仲良き嫁姑

口先の世辞などいらぬ友と旅

暑さなど吹きとぶギャルの夏祭り

大阪市 平嶋 美智子

玉の輿チャンスがあれば乗るつもり

何時からかルーズになってごみと居る

好きな事して生きられるこれも運

占いで言われた年に孫が病み

猛暑でも暦は残暑言うている

大阪市 津守 なぎさ

すれ違う匂いで解る愛煙家

健康を願って作るシソジュース

遅い足とまる車に頭下げ

バイキング和室は避けるバスツアー

健康は気力体力向う意気

大阪市 松尾 柳右子

留守番の暇にあかせて爪を切る

お茶わんを洗い自由な刻を持つ

会話なく三時のお茶の老夫婦

久し振り映画鑑賞こうふんし

予定表ピツシリ月日が早く立ち

大阪市 津村 志華子

大きくてメタボのような森の蟻

自分より大きな糧を運ぶアリ

白蟻の群は暴力団だらう

冬仕度アリも戸惑う温暖化

蟻んこの腰のくびれが妬ましい

大阪市 神夏磯 典子

人間の限界競う万国旗

アイデアが湧いたところへ電話ベル

さくらんぼこの可愛さへ戻りたい

豪雨にも季節を告げて花は咲く

ナツメロと安定剤で今日も幕

大阪市 板東 倫子

神曰く人は必ず嘘を吐く

タイガース破竹の虎の面構え

奔放に生きたキュートなおばあちゃん

贅沢が至福であると思わない

この年になってオバマに一目惚れ

大阪市 小糸 昭子

不景気は平成維新の陣痛だ

橋下さん良い物だけは残してね

瘡蓋で押さえつけてる深い傷

ありがとう新聞広告濡れてない

喉に穴開けて病人人生かされる

大阪市 小谷集一

じつくりと考え過ぎて乗り遅れ
年輪の一つ一つに無駄は無い
参ったと言えず憎まれ口たたく
感激と感謝で暮らす惚け防止
耐える技おぼえて聞き役に回る

大阪市 渡部さと美

団体より二人で来たいホテル狩
通るたび葉桜並木恩おもう
国産ねレモンほんまを答えなさい
酔わぬならなんぼ飲んでもいいのんよ
さるすべりこの灼熱を熔けもせず

大阪市 奥村五月

後期でも祖父は立派な知恵袋
米買えぬ時が良かった夫婦仲
蓄えは無いがふたりはまだ元氣
定年後ゴキブリ並に扱われ
美人ママ怒りあらわに河内弁

大阪市 福岡末吉

来し方の色香に惑う老いてなお
道半ば浮世の絆深く浸む
漫然と送った日々が惜しくなる
究極は銜いに過ぎぬ我が素振り
克己心所詮迷いを残すのみ

大阪市 近藤正

大阪城凜として立つ彬の碑
ガラバゴスヒト科が罪な外来種
約束は玉虫色にしています
難しいことは明日に残す癖
年寄りがつぎの政局左右する

大阪市 升成好

気にすればするほど私語が内緒めき
待たされて余計にうまい手打そば
これからは嫌いなことは知らんふり
カタカナの花の名前をまた忘れ
一呼吸置いて説教はじまった

大阪市 小泉ひさ乃

結果どうなるうともまず足運ぶ
携帯をすすめてメル友を作る
欠点も含め丸ごと好きになる
贅沢言えぬ再出発のパイプ椅子
容姿より器を選ぶ子を褒める

大阪市 岩崎玲子

憧れるだけで幸せ弾む頬
憧れは常に心を元氣づけ
憧れもサブリメントのひとつです
憧れは一方通行それでよし
憧れがあれば命はつづくもの

大阪市 井丸昌紀

晩酌は麦焼酎に決めている
誰とでも握手したがる分厚い手
老人を豊かにしたくない政府
東京に住むにはうどん辛すぎる
勝ち過ぎて逆に心配タイガース

大阪市 岩崎公誠

喋るなど言われたことはすぐ喋る
持ち唄は月の砂漠と赤とんぼ
暑い夏右脳のボタン故障する
胴まわりあと五センチで河馬サイズ
金色のラベルを貼った偽装肉

大阪市 池上清治

料理教室妻の手伝い指示が増え
高見盛呼ばれるだけで場を沸かし
時時のいじめに耐えて鍛えられ
いじめた子出るに知られぬクラス会
無礼講で喋った中身妻に洩れ

大阪市 伏見雅明

妻に気を許して皿を洗わされ
うさうさきと下した靴に足嘸まれ
たしなみをしばし忘れてバイキング
おだやかな笑みが見おろす一周忌
日頃から遺影これだと決めている

大阪市 森田明子

かたつむり急ぐ理由はないのです
昨日とは何も変わらぬ誕生日
ふらふらになるまで遊ぶ癖がある
呱呱の声あげて迷路の戸を開ける
良いことが続き疑い深くなる

大阪市 中村れんげ

胸をさす言葉の陰にある慈愛
軽い言葉も時に刃物になる怖さ
蝉時雨夏謳歌するシンフォニー
紺菊とほおずき活けて盆に入る
大阪暮色情けを守る宮の絵馬

大阪市 岡本久峰

こつそりと狐と狸手を握る
総理ならでつかいことをやり給え
人さらに口約束は通じない
梅雨空のような政治に気がめいる
政界に若き英雄踊り出よ

大阪市 川原章久

故郷は日本の虫の声で寝る
丑満時テレビ一人で消し忘れ
孫メールサックスのソロ二曲やり
幸のアメ何処を切っても福の顔
葉屋の紙風船はすぐ破れ

大阪市 大川 桃花

五時からの車中で化けて行く狐
しんみりと泣かせ舞台の幕が下り
ごまかそうとするから回りくどくなる
好き嫌い言っていられるまだ豊か
花束を豊かに見せるかすみ草

大阪市 川 端 一 歩

山動くこの一票にかけてみる
日本に黄金の波がまだあつた
大空をキャンバスにして僕の夢
わが家には吉祥天が一人いる
ど忘れと認知の境ゆらゆらと

池田市 栗 田 久 子

閉店のその差吉兆くいだおれ
本当の火種は煙さえたてぬ
本心を出さぬ別れの気配する
名月が見せる素顔の荘厳さ
らつきようへ遊び心で紫蘇を足す

和泉市 西 岡 洛 醉

肌の艶まだ有りまっせ妻元氣
縁側の満月賞でたのは昔
ケイタイを持たない八十路夢を追い
初夏の風今日はメロンの香り嗅ぐ
専業の主婦に感謝の日が続く

和泉市 横 山 捷 也

良い話予感スキップして帰る
良い人と言われ肩の荷重くなる
冗談で好きだと言ったツケがくる
たのしい日雨もリズムにのって降る
コップ酒さみしがりが良くしゃべる

泉佐野市 山 本 蛙 城

バーゲンに出たがるバーコードの頭
平和だなビエロ演じている限り
ペン胼胝のつぶやく戦果聴いてやる
六欲を煽る追い風向かい風
天引きの詐欺めく介護保険料

茨木市 藤 井 正 雄

切り札の予備を持つてる懐手
自販機のジュースが客をかませる
大正の歩幅しっかり祖母の足袋
拒否らしい前置きやたら長過ぎる
自己主張ちとでか過ぎるびわの種

大阪狭山市 矢 野 梓

ひと時を無心繁昌亭を出る
メモ帳に書いて安心して忘れ
適当に相槌打って中座する
車間距離取った会話がぎこちない
偽装のすべてを命令したトツプ

河内長野市 坂上淳司

胸中也透視できるか天眼鏡

地震予知鯨の髭に鈴をつけ

温暖化地球蕩けるやも知れず

こつてりと素性問われている鰻

こつてりと鰻が偽の厚化粧

河内長野市 井上喜醉

生きるのに診察券は宝物

助手席へ妻が座ると指図する

炎天で向日葵笑う夏の午後

阪神が好きで茶の間は縞模様

血圧をびっくりさせた親不孝

河内長野市 植村喜代

欲出して逝く時みんな丸裸

全裸になって逝くあちらはどんなところ

生きるとは色々あって草臥れる

ネットで調べてくれる便利な娘

やっと済んだ工事で座るところが出来

河内長野市 村上直樹

平凡に生きてメタボという驕り

後期高齢国に覚悟を迫られる

煮えかえる腹に我慢の大ジョッキ

首に縄財布に紐で泳がされ

恋心秘かに燃えて助走中

河内長野市 水谷正子

生かされるの表現似合う齢になる

平凡に生きた証だ財が無い

その年で元気な方と医者去なす

百歳のテレビに習う処世術

夏ばてに負けないようにルージュ濃く

河内長野市 山岡富美子

炎天下日傘でつくる小宇宙

シドニーの空の青さを知る日傘

何にでも染まる白には白の自負

試着室おんなが離陸するらしい

Ｌサイズ包容力も併せ持つ

岸和田市 雪本珠子

屋根裏のアルバム時を忘れさせ

頭ではなくて心で考える

花活けて苛立つ気持抑えてる

とびきりの笑顔に今日も癒される

一呼吸置くと和んだ腹の虫

岸和田市 米富淳風

憧れたのんびり昼寝いま自在

減量の初日に美味な菓子届き

あじさいの如く恋路も七色に

バイキング育ち盛りに戻ります

御詠歌にソプラノの声明るすぎ

海開き私の場合膝開き

岸和田市 堤 楯代

天井を見つめるまないたの鯉で

三食のあげ膳据膳にもあきた

リハビリに励んで今日も暮れて行き

なにもせぬ本当は辛いことですね

岸和田市 森 元 ふみよ

外交は未だ未熟な十二歳

賞味期限鼻と口とでたしかめる

この平和夢中で築き五〇年

押入れは不用雑品山築き

銀盤の世界の技に酔いしれて

岸和田市 土 橋 房 枝

見えずとも信じています聖霊を

こっそりとした善意にも花が咲き

ボランテニア汗も疲れもこち良い

羽毛布団毎夜翔んでる夢を見る

使い回しで大きくなった末娘

岸和田市 岩 佐 ダン吉

限界を破る汗ならたんとかく

少数派に与ししたたか生きている

消費税など上げたらしいですか

束になった敵なら恐いものはない

いい顔を三度試して家を出る

岸和田市 小島 笑 司

店のため太郎売られて行くわいな

グルメ食べ食糧難を論議する

サミットで九条批准しなさいよ

妻介護一日三十六時間

妻介護愛の絆で苦にならず

岸和田市 原 さよ子

またとない風情と旅の雨をほめ

顔の皺伸びそう高い化粧品

生命線信じて三年定期する

病名が増えて薬のかさも増え

間違であつてと願う腸検査

岸和田市 井 伊 東 吉

熟年は耐乏生活馴れており

古希過ぎてペアルックの面映ゆく

定年後調法しますループタイ

図書館は私の唯一避暑地です

ケータイという友達がいてくれる

交野市 森 本 弘 風

お役目は妻のお守りの小旅行

国東の神と仏へ雨の中

奥さんが皆窓側にいるツアー

由布院の駅の足湯が家族風呂

清正の像にピースの韓国語

交野市 山川 日出子

阿波踊りその源は蜂須賀公

祝日をこころ待ちする山と川

川の音と郭公の声山の寺

アフリカは蚊帳で眠る子増えている

初孫を待つております青畳

堺市 齋藤 さくら

にがうりのにがい分食べ元気なり

不安やがカード社会に背を押され

紙おむつ替えている間にしっこされ

サロンパス貼って子守りをしています

東京の人の多さに慣らされた

堺市 和田 つづや

妻の出す浅漬けに母燦とあり

義歯にして歯痛忘れてから遠い

つき進む過去の私を気にせずに

生き様になんの憂いもありません

西の旅後ろ指などもうなからう

堺市 源田 八千代

連れ立って繁昌亭の客となり

天満宮の団扇であおぐ暑気払い

迎え火が叔父叔母父母の霊招く

居心地が良いのか守宮へばりつく

三歳児ボール手前で友を待ち

堺市 西村 りつえ

笑いこらげてストレスが軽くなり

和やかな顔に似合わずばり言う

新品もメタボのゴムはすぐに伸び

脳細胞伸びる背丈に追いつかぬ

いざこざを尚かき回す軽い口

堺市 山本 半銭

豊作を約束してる青い苗

はやばやと踊り浴衣が盆を待つ

力ない笑顔母さん心配しィ

薔薇の棘不平抱いてる氷柱花

友達と言うてくれたを嬉しがり

堺市 矢倉 五月

強引なお誘い愛か我儘か

ブルーな日枝雀のビデオかけ続け

飲むからは酔わな酔わなと酔ってはる

心配をしてるのですと怒鳴られる

プレゼントあげるとママへだんご虫

堺市 加島 由一

暑い中お疲れ様と発泡酒

肩たたきされたと妻にいいにくい

団塊の世代が何かやりそうだ

飛び出そう爽竹桃は咲いている

やけ酒になりそうな友連れて出る

堺市石堂潤子

何も彼も許して顔の無い私

よく聴けば鴉の声に好し悪し

コマーシャル料も購うてる化粧品

雑穀と言う贅沢な飯を食べ

香水に勝るシャボンのかほり好き

堺市柿花和夫

花火師の意気も聞こえる遠花火

いつまでも助走が続くパラサイト

万骨も将も枯れゆく温暖化

国境を輕輕越えた救助犬

歩いてる姿は問わぬ万歩計

堺市奥時雄

温暖化地球が困る訳でない

ひそひそとでは埒あかぬ猫の恋

平安の土が顔出す古寺の堀

ライバルが笑みをこらえて慰める

文句言いながらも見てる大相撲

堺市河内月子

ビアグラス大きい方で飲んでます

一生涯蛇と仲よく出来ません

今蟬が脱皮してますお静かに

先先のことより今日の晩ごはん

うちの猫わたしの歳を越えました

堺市志田千代

情なやもみじマークと小型車と

万年も生きたか緑亀死んだ

秋あかね母の祥月御命日

ママチャリは行くなんだ坂こんな坂

煮返して我が家の賞味期限にし

四條畷市吉岡修

紫外線日傘くるくるカットする

大安も先勝の日も金消える

有名なお人らしいがわしや知らん

ぶんぶんと匂うよいくらとほけても

アイドルの見分けつくとはまだ若い

吹田市太田昭

屑籠に母の本音が捨ててある

値上がりの分アクセルを軽く踏む

相槌を打つ相棒がそばに居る

安っぽい義理の握手がだるくなり

変人の私に惚れた変わり者

吹田市木下敏子

天の川恋の流れの煌めいて

ありがとう両手あわせて今日を閉じ

賞味期限すぎた自分の味絞る

喜寿の坂ゆつくり落ちる砂時計

母に似て辛抱強い膝小僧

神様も鯰の機嫌判りかね

吹田市 野下之男

仁王様呆れ顔して見るこの世

過労死の言葉を知らぬ蟻の列

青空が慟哭呑んだ終戦日

菜の花に付き合っている昼の月

吹田市 須磨活恵

目に見えぬ財産子供への嫉

丸腰の気楽さ失くすものがない

抵抗の術なくほやく高齢者

ふるさととは優しレトロに包まれる

河童さえ溺れてしまう欲の川

吹田市 大谷篤子

銀髪を豊かに結って女なり

ゆったりと古書店めぐりゆうなぎる

通らない言い分だけどいい話

うろろうとバリアフリーに蹴躓く

ひと言に深い闇からひき返す

吹田市 瀬戸まさよ

海笑う測つてもめる境界線

選別の魚も暮らす同じ海

ちまちまと肉を食べますこの高価

国産の産地見届け尚不信

高齢者増えて整骨院も増え

ブーケより一輪の薔薇よろこばれ

高石市 浅野房子

高機能こなせぬままに放置され

叫んでも形勢不利に変わりなし

頼りたい薬一本もないこの世

薬飲む少し効いたが副作用

高槻市 西谷治三郎

白内障手術が終わり皺を見る

元陸軍後期迎えて杖をつく

献血車俺に声かけ顔を見る

栄転と左遷が駅で右左

犯罪が増えて法律また増える

高槻市 傍島克治

若人に負けるものかと老いの恋

励ましの握手にしては弱すぎる

放蕩も芸のこやしと言った過去

乱雑な居間に戻ればほっとする

人目など気にすりゃ野心崩れゆく

高槻市 峯村勲弘

花の種蒔き時迷う温暖化

遺伝子の組み替えバラも青くする

温暖化秋刀魚の愚痴も聴いてくれ

遠慮なくヘッドフォンから洩れる音

メタボリック絞り取りたい二段腹

高槻市 井上 照子

天災は人災地球の叫ぶ声

また事件家族の絆こわれてる

ゆずられた席でしみじみ老いを観る

曾孫のお宮詣りを祝う齡

短冊に書いた願いは欲深い

高槻市 生田 義一

日朝が話し合える日来るかしら

影法師仲良く八十路の坂を越え

お互いに耐えて来たねと老い二人

里の駅花一輪がお出迎え

庭の木で鳥の声聞く梅雨晴れ間

高槻市 執行 稲子

補聴器がちよつと欲しいなひとりごと

うわべだけ挨拶交わす天の邪鬼

ネット越し尻尾ぴんぴん餌ねだる

泳がせておいて特捜キャッチする

尻尾立て主役と威張るエビフライ

高槻市 指宿 千枝子

ぱつたりと出合つて頼む郵便車

初蝉が鳴いて七月十二日

よたよたと蝶が飛んでる暑さです

黒づくめ熱中症にご用心

てっぺんから食べてにつこりモンブラン

高槻市 乙倉 武史

携帯がないと不安な子に育ち

産地偽装中国うなぎにヤ罪はない

欲呆けが偽装剥がれた化けの皮

燃費高メタボよ歩け歩けです

酷使した報いは腰と膝に来る

高槻市 左右田 泰雄

目に眩しラインダンスのかぶりつき

不況風じわりと首を締めに来る

腹の虫なだめてじつと我慢の子

コーヒーが冷めても来ない初デート

妻の愚痴軽くさよかと受け流す

高槻市 佐甲 昭二

断わりの返事に重い切手貼る

人脈を上手に泳ぐ出世魚

難解で泳ぎ疲れた文字の海

ハンドドルが駄々こねている田舎道

エリートに育ち故郷に帰らぬ子

高槻市 富田 美義

叩かれて本音をあげる木魚たち

お見合いの数だけ踏絵ふまされる

子供部屋覗けばゴミと未来絵図

無理言わぬトイレに近い席で良い

反抗期返す言葉に棘がある

豊中市 山門タミ

朝五時よ脳の時計に起こされる
百号の窓に絵になる雲がゆく
朝顔が軒端のよしずクールビズ
梅漬けに亡母が背中であドバイス
七夕に幼い頃の亡母います

豊中市 江見見清

我慢もし許しもできる歳となる
まだようけ煩惱もありどないしよ
不作法をパッと叱れぬ自己嫌悪
蛭雪にまでさかのほるエコ論議
趣味ひとつ減らした後期高齢者

豊中市 藤井則彦

母さんのご飯に飢えるいじめっ子
上げ潮に乗ると引き際霞み出す
初対面歯が鳴るほどの一目惚れ
食通も使い回しに気がつかず
百歳を迷わず生きてきた魅力

豊中市 安藤寿美子

可愛げの無い婆さんでつつぽらう
夫婦旅次は一人で来てやるぞ
わかっているのに書けはせぬ字がふえる
CO2パンパン出す国いばつてる
ブティックで私はいつも無視される

豊中市 吉田あずき

サミットに目が離せない地球人
情報の海で溺れぬ自衛策
苦勞話あつて人生花添える
目も耳も口もまだまだ欲がある
底見えた袋へ夢をつめておく

豊中市 坂上高栄

ケンケンをして吹き風し棚田風
水見回わりさが飛び立つ青田風
風鈴矢車一ゆれ千の音
秋葉原降って湧いたる地獄絵図
北摂の山高からず青田風

富田林市 大橋鐘造

回復へ五臓六腑の機嫌とる
我を捨てて絡んだ胸の糸ほぐす
生きている捨てたい過去を抱きながら
ちらちらとさせたお札に目が眩む
やさしさと背中合わせのお節介

富田林市 稻川恵勇

白熊の身につまされる温暖化
慎ましく無口の頃もあった妻
身勝手を還暦むかえ詫びを入れ
妙齢へ傘さしかけてわなに落ち
茶の友のはずが親しくなり過ぎる

富田林市 片岡 智恵子

妥協した日から女をとり戻す

もうはまだ、まだはもうなり丸い月

過去の傷繕う母の返し針

昨日のこと聞かない妻が怖くなる

乳房まだ動けば夏の陽に映える

寝屋川市 籠島 恵子

太陽のタクトにひまわりが動く

目印は何にしようか帰り道

さざ波の内におさめてくれますか

夾竹桃語る言葉がふえてくる

パトカーが三台もゆく午前二時

寝屋川市 太田 とし子

スピーチがとつても長い五分間

古里を抱いて大阪好きな街

ほたる来いどつちや向いても高齢者

無理矢理にゴミに出された記念品

機嫌よい朝に朝顔ちと寝坊

寝屋川市 平松 かすみ

デンワでは元氣アピールする独居

地滑りの怖さ明日は我身かも

人間が怖い子殺し親殺し

娘の齢が恐い私を追いかける

一葉とお別れしますスーパード

寝屋川市 森 茜

鬼やんま威風堂々枯れている

一言の重さ軽さよ蛇足とは

葭簀して西日も愚痴も遠去ける

いい人と言われて忘れられていく

流れゆく雲よ寅さんゆくところ

寝屋川市 富山 ルイ子

老老介護痒いところを搔いてあげ

針箱が手許気がるに針を持つ

信頼の内緒未だに口に蓋

明るい夢明日に期待をして眠る

自家菜園家計大助かりの日日

羽曳野市 吉村 久仁雄

今もまだ箸が転ぶと笑う妻

人間の魅力の幅におバカキヤラ

肥後守もう人間を守れない

生き急ぐつもりはないが九時に寝る

真つ直ぐに生き真つ当に暮らせない

羽曳野市 永田 章司

お隣が小金出来たか塀を立て

同情が出来る立場に感謝する

政治家もしよせん今様三代目

大物の落ちる所は塀の外

礼服を着ると顔まで引き締る

羽曳野市 徳山みつこ

自給率あげるわが家の茄子胡瓜

平和だな胡瓜と話す朝一番

土用丑わが家只今審議中

騒音罪適用ですぞ名の連呼

水河脱ぎ地球安楽死を思う

羽曳野市 酒井一壺

好きなので癖はつきりと言っておく

搾り取る相談ばかりする会議

雑巾をしぼる敵を取る如く

魚屋の隣に住んで今日も蠅

撞れて付いた仕事にある地獄

羽曳野市 三好専平

土用にも鰻食べたくない怖さ

生きてゆくための保険が首を絞め

災害のたびに政治のボロが出る

医療費もパチスロ代も三十兆

マスコミのおもちゃにされる天皇家

羽曳野市 吉川寿美

大阪よいとこ地震風雨もよけていく

年金もれもしやわたしもだろろうかな

気がつけば独り踊っていたピエロ

レントゲンでみたわたくしの頭蓋骨

呑み込んだときは小さなクエスチョン

羽曳野市 安芸田 泰子

逃げ口上作品のように嘘が出る

天井へ着太りの海老どんと据え

上流の意識に浸る旅の宿

亡夫かも蛭に会えた旅の宿

血糖値旅のプランが逃げて行く

藤井寺市 鈴木 いさお

百歳を超えたら欲は出しません

味付けの秘けつをシェフは教えない

あの女は今も一人で居るらしい

この街に逢いたい女がひとり居る

住み馴れたここがこの世のバラダイス

藤井寺市 若松 雅枝

方向音痴カーナビ任せの寺参り

八十路でも怖い此の道痴漢出た

達筆でサインの主がわからない

猛暑日で買物やめて昼寝する

赤い服着ずに死んではつまらない

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

二十年この体重がキープ出来

跳ねていた靴だったのに捨てました

幽霊が出たら足元掬おうか

薬味にはこだわっているおそうめん

浴衣着て母に似ていることを知る

藤井寺市 高田 美代子

風鈴を十個吊るすとうるさから
賞罰無しこれで終れば只の人
欠点を全部並べて見てもらう
喉ボトケ揺すって落ちて来た本音
台風が逸れてリングが熟しきる

枚方市 二宮 山久

まだ仕事したいと叫ぶ病む右手
梅雨晴れ間値上げラッシュの夏ま近
不景気はどこ吹く風ぞタイガース
梅雨晴れ間洗濯物の花盛り
リハビリのお蔭右手は動き出し

枚方市 丹後屋 肇

アカゲラが虫啄ばんで得意顔
丁寧に疎水を掃いている柳
登り坂メタボが汗を噴き上げる
体操で始まる作業服の朝
アスファルト旧家の門を照り返す

枚方市 海老池 洋

百叩きよりも厳しい無視の刑
跡目なく荒れ田になった千枚田
自家菜園の胡瓜は僕似みな曲がり
医者よりも妻がうるさくいうメタボ
なにわ女丸出しにしてギャルみこし

枚方市 寺川 弘一

アドリブが上手な人が生き上手
余生楽しむ4Bと雑記帳
恥かかぬよう大きめな財布持つ
生き恥を楯の中に押し込まれ
ごみ袋大き過ぎても恥ずかしい

枚方市 伊達 郁夫

真つすぐに歩くと壁に突き当たる
小石投げあなたの波を確かめる
陽が昇るまでに昨日に蓋をする
落陽の中にすんと今日落す
温かい友を見つけて冬間近

枚方市 森本 節子

みどりのなか喘ぐケーブル妙見山
一庫ダム遠く下方に水湛え
稲光り今年の梅雨も上がるらし
夕食の仕度となればこの元気
土用丑真近鰻が騒騒しい

枚方市 安達 忠央

そこまでの例外世情許さない
ひらめいて世のゆがみ突く投書欄
嫁姑工夫を凝らしいじめあい
銀シャリを拝む時代がついそこに
気がつけば長寿いじめの国に住み

東大阪市 笠井欣子

瘦せ我慢はればだんだん脳冴える
老いて知る解らないこと多すぎる

頂いた外国土産日本製

屈託を流してくれる終い風呂

神様の答え待つてる無の時間

東大阪市 米田水昇

あじさいは雨に召されて消えていく

茜さすボール持つ子は家に散る

くだおれ太郎の笑みは悲しそう

丸とばつ三角もあるこの人生

貴船の鮎とんとん叩き骨を抜く

東大阪市 久米奈良子

折にふれ見舞う絵手紙薔薇匂う

往診へせめてパジャマを替えて待つ

ヘルパーへ言う言葉送り出す

ヘルパーに体預けて昼の風呂

落款を押して八十路の息を抜く

東大阪市 佐々木満作

根野菜三度三度のダイエツト

モラル無視偽装食品あたたたず

花鉢わたくし流の枝捌き

冷めた愛レモン一滴甦る

目立つこと好きな女のアイシャドー

東大阪市 北村賢子

鈍感で少しルーズが生き上手

子を律す教育現場泥まみれ

老老介護深い絆がなお辛い

怖いヨメハン一番好きと照れもせず

幼い記憶一つ一つが走馬灯

箕面市 広島巴子

太鼓腹狸に化けて打つ月夜

月面の凸凹兎かくれんぼ

今一度月と行水してみたい

子の寝顔やさしく包む月明り

十五夜は眩しすぎます一人身

守口市 井上桂作

世をすねて人を殺める卑怯者

地獄極楽行つて戻つた人知らず

悲しみの過去はこっそり胸のうち

人生に定年いらぬふと思う

割り切つて我が道今も進むだけ

八尾市 生嶋ますみ

青空に吸いとつてほしこの弱気

たくましく馬鈴薯芽ぶく野菜かこ

お日様がこんなに甘い夏野菜

頼る気のない憎らしい母になり

探し物のおかけきれいになった棚

八尾市 宮崎 シマ子

席を取る楽しい友を待つために

爺婆に土の仕事のある田舎

相々傘沢山濡れるのは男

老人は全身エゴで生きている

引力が同じ貴方と五十年

八尾市 吉村 一風

のら猫に夜だけ餌をねだられる

ぼんぼんと言うがほんとの古い友

掌を合わせ老いの命の深さ知る

飽食へうろつく恐い血糖値

忘れ上手と言うてほんとは困ってる

八尾市 村上 ミツ子

もったいないを使いまわして金儲け

卵まで値上げラッシュへ仲間入り

デンキ代値上げ節電迫られる

米だけはしばらく値上げないらしい

もう少し生きたい力ふりしほる

八尾市 高杉 千歩

深読みをしてはたじろぐ死生観

疑問符を並べ待つてるEメール

美辞麗句あの友情はなんだった

錯覚のまま過去になる通り雨

補聴器新調音声低くする

大阪府 林 力子

微かなる望み抱いてペンを持つ

気まぐれの母の便りを待つポスト

鈍行で視野和ませる雪月花

隠し芸明日の武器にとつておく

ケイタイに微かに匂う恋心

大阪府 野口 栄呼

失ってから知る若さまぶしいよ

米粉パン稲作増へ射す光

一等田売地看板高齢化

そこまでは歩き車は休ませる

薄塩で健康家族守る嫁

大阪府 桑田 ゆきの

着回しで育つ戦時の子沢山

短足は祖先がくれた宝物

舌鼓打ったうなぎが偽装とは

自己中で帽子脱げない石頭

耳よりな話十葉束に干す

大阪府 米澤 俣子

得策はあっさり妻に負けておく

五欲抱きつつ生きのびているいのち

まだ若いと嬉しいことを言うてくれ

この狭い地球で何故に小競り合い

母の教えに無駄というもの見つからず

大阪府 初山隆盛

いい汗を流しメタボとグッドバイ
五線譜のおとことおんな綾をなす
気晴らしの酒と妥協をくりかえす
晩鐘の余韻に眠り包みたい
どてら着て日本一の滝を愛で

神戸市 伊勢田 毅

物価高絡ませ妻が攻めてくる
古希過ぎの酒に自慢が多過ぎる
平和だが何故かざわざわ落着かぬ
年金の暮し一日一事です
都市砂漠深層水で息をつぐ

神戸市 山田 婦美子

飾らない野草の花も色も好き
歳月が思い出にする傷の跡
言い訳が面倒だから逃げている
偽装してまで食べてほしくない鱈
高齢者家族で笑うことがない

神戸市 山口 美穂

忘れたいことが時々目を覚ます
立ち上ろう後期高齢杖持つて
チャームポイントは笑顔欠点カバーする
あほやなあは愛し関西標準語
コーヒートの苦さひとりもいいもんだ

神戸市 山口 光久

情にもろい母の生き様継ぐ娘
闊達な妻で料理はお留守がち
煩惱に支えられてる燥いでる
ストレスをパワーにかえる酒二合
指切りを信じきってるモミジの手

相生市 中塚 礎石

ほめられて喉かゆくなり咳となる
風鈴へ熱い風ではかわいそう
引つ越して命預ける寺も変え
先生の子供の頃を知っている
乗務手帳ばくを殺した跡がある

芦屋市 黒田 能子

引き出しに無駄をいっぱい眠らせる
直角に暮してるからくたびれる
人は人自分のカラー守りぬく
紅白のまんじゅうを買うめでたい日
安全を忘れスピード競い合う

尼崎市 長浜 美籠

変りない日々感謝のラッキョ漬け
押し並べて女の意図は根が深い
見ると聞くには温度差がありすぎる
アドリブの人生だから味がある
かすみ草いかにも女らしく咲き

尼崎市 加川靖鬼

胡蝶蘭の鉢に植えられ落ち着かず
蟻の道チヨク引かれて右往左往

桜の下で泥鰌を掬う安来節

ラジエーターの役目を汗がしてくれる

ごさぶりの耳に悲鳴が突き刺さり

尼崎市 春城 武庫坊

コンチキチン京の街々うかれてる
貧しい政治に雨も斜に降ってくる

晩鐘の余韻に深く折りする

入道雲をじつと見詰めてやる気出る

また終戦日南支宝慶思出す

尼崎市 春城 年代

優しかったりきびしかったり娘を頼る

読み耽る気力がいつか萎えている

京の六月今年もみなぎき無事にたべ

茅の輪くぐったこともふたりの語り草

チヨコレート病夫にひとつ握らせる

伊丹市 山崎 君子

月もひとりわたしもひとり暑い夜

コウノトリ次々巢立つたくましく

留守まもる呆けてはならぬ深呼吸

ダンスパーティー今頃あの娘踊ってる

路地裏の話聞こえる終い風呂

川西市 米原雪子

やつと来た八十路の坂を滑るまい
真ん中はすくすく育ちほつとかれ

試験すみ夏休みだけ待つ子供

勝つ瞬間見たくて眠さ堪えてる

朝刊で逆転勝利囁み締める

川西市 西内朋月

千円になっても止めぬ愛煙家
生きていくうちに会えるか拉致家族

心配をさせないように空元氣

つまらない心配をして眠れない

成るように成らぬこの世が面白い

三田市 白井二英

描けぬのに結構批評だけはする

ユニセフに心の痛むこと学び

飲める水あるだけ日本いい所

何もないけど相性がある男女

価値感が似てるなんとかもっている

三田市 堀 正和

ナイターの無い日は茶の間まで平和

外野席座っておれぬトラファン

二枚目のイエローカード ドックから

美人だとすぐ握手するクセがある

チン三度ハイ出来ました晩ごはん

三田市 北野 哲男

職退いて耕す味がわかりかけ
本物の狐狸が来る畑
立ち呑みの二合で楷書から行書
だんだんと妻の意見に歩を合わす
また明日怠ける者と気張る者

三田市 久保田 千代

憂さ晴らししているような派手な声
合掌の指雑念はこぼれ落ち
脳外科の映像に目が静止する
打ち水に庭の草花生き返り
雨乞が天に届かぬせみしぐれ

三田市 上垣 キヨミ

あどけない瞳澱ませてはならぬ
専用車只今美人コンテスト
口元をしっかりと見て医師に問う
待ち合いで奇遇の人と盛り上がる
私の心に一つ不発弾

三田市 石原 歳子

家が好きとんぼがえりのひとり旅
しんまいのママの絶賛布おむつ
日焼け止め塗ってルンルン回り道
捨てようと思っていたがまた仕舞う
老化かも曜日間違えごみを出す

西宮市 井上 松煙

幽霊になりたくはないぼっくり死
えんまさんお裁きちよっと待つて欲し
高齢者肩身の狭いマーク付け
楽しみは共に笑える友にあり
減反をさせアメリカの米買わせ

西宮市 亀岡 哲子

坂の町もみじマークの多いこと
話題にもならず普通の百二歳
百歳の手相と我が手見比べる
家中の時計きままな時きざむ
腕組みの中で温暖化が進む

西宮市 秋元 てる

新駅はさくら夙川紅葉して
子等を待つ地均しすんだ畑の風
新しい風に馴染めぬ怒り肩
古里の樹に守られて兄眠る
目札の異人海辺の喫茶店

西宮市 山本 義子

旅先なら下手な踊りもご愛嬌
ローカルの駅むかし見た柿若葉
旅の宿すっきり様子変りはて
旅に出る十日が限度ですドラマ
旅先で意見の合わぬ両の足

西宮市 牧 渕 富喜子

あるもので済まず激しき雨の音
埒外の二人の命米洗う

水まきに合わせたように来る雀
まっさらな四時早朝を深呼吸吸
初鳴きの蟬梅雨明けを宣言す

西宮市 緒 方 美津子

母さんは賞味期限を舌で見る

夏休み孫に体力試される

黒幕がやおら証言台に立つ

いわぬが花そんな親切とても好き

夫退院空気もどつてまたけんか

西脇市 七反田 順子

頑固でも優しさあって許される

交叉点モザイク化した人模様

気兼ねなくビールが飲めるトラファン

口肥えて百選の水首つ丈

本音吐き仲間同士が弾みだす

奈良市 米 田 恭 昌

またひとつ昭和が消えたくいだおれ

年金不透明脱サラの丸木橋

孤老訪問生活の音聞えない

自家菜園こだわる粟のおもてなし

丹波篠山口マンを秘めた歴史館(篠山吟行)

奈良市 天 正 千 梢

一張羅その一人だけ浮いている
胡蝶蘭いくつも並ぶ開店日

ポーナスのくれる仕事にまだつけず
秒きざみ進む科学がこわくなり
しあわせの原点母ちゃん笑顔

生駒市 飛 永 ふりこ

モンブラン氷河を砕く温暖化

ケンカしてプラマイゼロの手を添える

にこにこことみんな輪にとけ盆踊り

欲一つ捨てたつもり火が消せず

名峰と梅おにぎりに生き返り

香芝市 大 内 朝 子

かき氷崩し昔をたぐり寄せ

慕うひといる幸せの紅を引く

どうしても子の足枷になりとない

人形に添い寝を頼む寂しい日

赤っ恥まだかいてます これでもか

橿原市 安 土 理 恵

線引きをされておろおろする後期

狼の気持でどんな 吠えてみる

中途半端キライとごまの白と黒

ジヨッキ並べて酔うも溶けるも泡まかせ

罪の味知ったくちびる強く嚙む

大和郡山市 坊農柳弘

しがらみをゆるりと解く地藏盆
束の間の逢瀬に白い雨が降る
狂わない時計が凡ミスを裁く
成せば成る骨折り損と言われても
気まぐれが過ぎて煮え湯を飲まされる

奈良県 渡辺富子

偽装続き怒りも白け夏に入る
少年の白が真夏をかけ抜ける
大地踏む足の裏からエネルギー
でっかい海持った男に惚れました
後期高齢まだ夢もある恋もする

和歌山市 宮本三喜夫

機長不足スカイマークがうろたえる
わからない自殺する人増えてます
採血器使い回しが怖いです
連作を嫌う野菜は拗ねてます
母遺す菊がひっそり庭で咲く

和歌山市 松尾和香

後期高齢達者で生きる楽天家
打たれても出る心根の温かさ
物価上昇旬の野菜に助けられ
懐かしい城に登ればハーモニカ
留守番に姑を頼りにする三十路

和歌山市 堀畑靖子

マネーゲームえらい火傷をしたそう
なあ偽装食品つぎは何かいな
お手あげと言う日くるのか物価高
優等生だったタマゴも値上げなり
温暖化ゆたかさ追った果てなのか

和歌山市 玉置当代

梅雨空に病氣自慢で明け暮れる
衣食住狂ってきまず温暖化
天国からお呼びくるまで善を積む
手に汗を握る兄貴のホームラン
霧の中成果あったかG8

和歌山市 田中みね

悔んでも悔みきれない貸し倒れ
宙に舞う諭吉を追って目が覚める
赤信号で渡るお方の伏し目勝ち
外見はいたって元氣空元氣
裏切りを同じ人から二三回

和歌山市 武本碧

雨の日は友と時間を温める
ひと言が荒れた心へ慈雨となる
おふくろの味コピイする嫁の知恵
ストレスもモップで流す楽天家
根こそぎの筈がこっそり芽を出した

和歌山市 喜田 准一

気にせずの下さいこれは僕のキャラ
まくし立てながら理屈を組み立てる
情報は同じで解釈が違う

四捨五入しないと次へ進めない
妥協点探り合つてる小競り合い

和歌山市 上地 登美代

呼び声でわかる夫の空模様

炎天に凜と雑草咲いている

ささやかな暮らし夕陽に包まれる

十指みな何の不義理もせず仲間

何かある予感ただよう寿司の折

和歌山市 木本 朱夏

よそさまの暮らし覗いて猫のウツ

昼寝から醒めると河馬になっていた

くしゃくしゃと泣く名画座の隅っこで

社会的弱者を庇う傘がない

深読みをしすぎて折れたベン先の

和歌山市 福本 英子

六感が程よく鈍り恙無し

地球掘る寄つて集つて度が過ぎる

真夏日の斎場で風邪ひいてくる

それなりに生きて夫の忌を重ね

四川にも手抜き見つかる震度七

海南省 三宅 保州

真相を知らぬ蛙が騒がしい
滝になるまでを見逃してはならぬ
いつ電池切れるかわからない命

菜園の胡瓜見事な変化球

下駄箱で小さくなつている下駄よ

海南省 堂上 泰女

自分しか見えない人の墜ちる穴

早苗からも根づきひと先ず安堵する

しつかりと母の顔して娘が帰る

ゆつたりと子に接してる娘を誉める

孫叱る娘私の過去の顔

鳥取市 下田 茂登子

香典のことで肉身揉め出した

この世とあの世繋ぐ電話が欲しくなり

学歴はたつぷりあつてあの言葉

先妻と暮らしたことは伏字なり

悪心も抱いて仏に手を合わす

鳥取市 山宮 愛恵

生きている証と言える時は良

無言の矢知つているのはわたしだけ

気のかかぬ素振薬にして過ごす

何もかも知つて素直に爪のびる

ネイルカラーピンクが好きとささやいた

鳥取市 中宇地 秀四

脇役の妻に後光がさしている
腕前はへボでも気持良い男
ご免ねとこの一言に癒やされる
嬉しさをかくして見ても顔に出る
現世で息子ぐらいいは信じよう

鳥取市 福島 庸二

自信作心ときめく結果待ち
雲つかむようなうわさに惑わされ
生活の見直し迫る温暖化
蟻り拭い消し去るアルコール
有頂天こんな時こそ気配りを

鳥取市 植田 一京

ばあちゃんの孫には甘い懐よ
若者に活気を貰う夏祭り
クラス会シングルばかり多くなり
さくら貝胸のポツケに入れたまま
幾つもの橋を度胸で渡り切り

鳥取市 中村 金祥

凧いだのに漁にも出れぬ原油高
今もお出されたものをみな食べる
中国産嫌っているが今日も買う
年金を無事を受取る幸がある
三面鏡髪の薄さを思い知る

鳥取市 福田 登美

梔子のまぶしく香る初夏の風
一夏の命と知らず蟬の声
北京五輪イベントの意気高くなる
争いは知らぬ存ぜぬ万国旗
温暖化原油価格も英知待つ

鳥取市 池原 天馬

敗戦の暑い一日村さわぐ
蔵の中父の軍帽掛けたまま
屋敷あと戦死の友がいた家だ
過疎となり兵士の墓も無縁なる
お願いだ家で葬式しておくれ

鳥取市 西川 和子

単刀直入核心から責める
蟻り今日の笑顔はぎこちない
面倒な事は笑って遣り過す
核家族親の介護も儘ならぬ
いい話だけを聞かせている介護

鳥取市 吉田 弘子

娘や孫に頼られている自負がある
美しい十代の孫そして古稀
老老介護見慣れ聞き慣れ長寿国
厄介な差別ことばに気をつかう
ありがとうの声欲しくて梨送る

鳥取市 田村 邦 昭

再びがあるかも知れぬ神だのみ
鬼太郎を読む老人の無邪気な眼
誕生日孫の電話が待遠し

OKは言えるがNOに躊躇する
失恋を断つ缺には切れがない

鳥取市 土 橋 はるお

青い実しか食わない鳥もいるようだ
くたくたの喪服を脱いで息をつく
浮気されよろこぶ者がいるもんか
ひたひたと妻に孝行するだけさ
鰯でも刺身にされりゃ鯛並じゃ

鳥取市 土 橋 睦 子

蒲焼の匂いに慣れた店の猫
裏山も獣が掘った穴ばかり
辛抱はもう限界とへそ曲げる
不器用な脚になったと湯につかる
横向けば喧嘩相手もいい寝息

鳥取市 岩 崎 みさ江

左見て右を見る間の物忘れ
本物のやさしさを今試される
恋をする月の地平に見る地球
マグマ抱く地球は若い星だろう
一日に三度も食事して生きる

鳥取市 春 木 圭一郎

過去未来それより今の風つかむ
時折りは等身大をはみ出そう
それぞれに取り柄いい味出している
大切で守るべきもの持つ強さ
決めつけてしまうと自分見失う

鳥取市 夏 目 一 粹

落ちそうなボタンを千切り助けたる
歩の身分忘れて金に酔っていた
煩惱にピンチを助けられて来た
よく喋る人にやる気を奪われる
これからは担ぎ過ぎてる荷を減らす

鳥取市 奥 谷 彩 子

山を降り夕陽に染まる赤とんぼ
雨やどり他人のやさしさを貰う
縦と横紡ぎ合わせて夫婦の譜
母の乳房愛ゆつくりと熟れてゆく
星座占い朝の振り出し決めている

鳥取市 永 原 昌 鼓

大福へ決心鈍るダイエツト
動物の縄張り犯す人のエゴ
万札が急ぎ出て行く物価高
おかしいぞメスが一本見当たらぬ
潮どきと腹の子どもがノックする

鳥取市 岸 本 孝 子

聞いてない言ったでしようと今日も揉め

政治家の財布に金がありすぎる

年金日ころにぼっと灯りつく

おんぶした孫が今では意見する

献立のヒント欲しくて食べ歩く

鳥取市 岸 本 宏 章

金で買うやすらぎ失せるのも早い

声出して読んで耳にも覚えさす

究極の水着魚も着たかろう

落とし物届け疑いかけられる

家族みなぴりぴりさせた父だった

鳥取市 福 西 茶 子

敬老会準備している人も客

休暇とり犬の看病三日する

食べて寝て五体動けば万歳だ

ストレッツ朝一番に四股を踏む

苗代の元を取りたい茄子キュウリ

鳥取市 有 沢 せつ子

ケータイで結ばれている赤い糸

ターミナルどちら向いてもメール中

手で千切り消しゴム上げた試験場

にんげんの所為で鰻が疑われ

タレントの恥を売ってる芸能社

鳥取市 平 尾 菜 美

涼しさの余り昼寝が習慣に

涼しげな花に五感を奪われる

意味のない喧嘩が跳ねてホツとする

逆らえば悲しや人の目に留まる

礎にして履歴を固めてる

鳥取市 横 田 春 名

墓地幹旋妻はしつかり乗っている

駐車場ポツンと砂利が敷いてある

咳ばらい潮どきもらい立ち上がる

暴言に眉をひそめて無反応

涼み台消えて人情薄くなり

鳥取市 宮 脇 道 子

病んでいる赤信号の地球です

通販が老いた私に目を付ける

親子でも怪しい空気流れてる

トイレにて自己反省が出来る時

五月雨は十日も降らず困る花

鳥取市 加 藤 茶 人

嫁さんにするにはちよつときれい過ぎ

宵越しの金がないから四苦八苦

殺すのに刃物はいらぬ物価高

官僚が悪代官に似る世相

男の魅力まじめだけでは少し欠け

鳥取市 武田 帆雀

喜んで泣くのは早い一点差
トラブルの火中に落ちる付け睫
かあちゃんと天秤担ぎ七十路坂
男の子も女の子も裸で水鉄砲
窓に足投げて昼寝のダンブカー

鳥取市 太田 幸枝

認知症脳にちよびりかびがはえ
熱しやすく冷めやすい友近よれぬ
迷い路杖の倒れた方に行く
子に尽くし夫に尽くし悔いは無い
細腕で子供四人を育て上げ

倉吉市 山中 康子

無茶くちな暑さにあえぐ温暖化
おとろえた五感にはつとそよ風が
物価高あらゆる知恵をかき集め
この辺で折れたら楽になれるのに
企てた悪にぶつからないように

倉吉市 野口 節子

あれからは嫁の傘下でつつがない
また生きるつもり欲を抱いている
金銭が絡むと脆い血の絆
競い合うことも出来ない一人っ子
ストレスに強い男で次男坊

倉吉市 山本 玲子

頷いてばかりで頼りない味方
飛び魚がジャンプしてます夏は来ぬ
ピアス無し手術痕なし健康体
プランターの胡瓜大概臍曲り
赤い服実年齢を当てられた

倉吉市 最上 和枝

生き物は子を守るため体張る
もしかして是がオレオレ詐欺かしら
大文字京の空焼き夏を呼ぶ
陽が笑い無罪の蒲団叩かれる
足腰にガタとても百まで生きられぬ

倉吉市 牧野 芳光

親戚の医者には行かぬようにする
吉方に日本海が横たわる
ジャンボくじ見事外れて安堵する
女房がバカと言うまで気付かない
鼻歌をうたって鬼を消していく

倉吉市 猪川 由美子

値上げラツシユ舌と財布が喧嘩する
死にたいなら独り勝手に死んでくれ
殺人や値上げやエコの紙面だな
菊のカーテン奥はゴタゴタお悩みだ
女子アナの辞める潮どき三十路らし

倉吉市 松本よしえ

陽炎の向こうにきつと何かある
時々雨も降らなきや困っちゃう
パソコンを叩きベンだこ消えちやった
背比べ背すじ伸ばして胸を張る
人を刺す誰でもいいと秋葉原

米子市 白根ふみ

わたくしが眠れば貝は美しく
ランドセルが挨拶してくれて生きかえる
講習会救急車までのことをする
突然死いいなと思う顔になる
フルートと津軽互いに気をつかう

米子市 光井玲子

平穏な日々には只感謝です
永遠なものだと思ふこの大地
適齢期の孫のことまで口出せぬ
好き嫌いなない老父ですありがとう
つまずいて時々ころぶ老いたなあー

米子市 中井ゆき

仏飯は雀と私半分こ
転ばぬようまずふみしめる一歩ずつ
うなぎやめテキにしようか丑の日は
いづれこの大地にடுத்துて花咲かす
日盛りは雀も一寸昼寝する

米子市 野坂なみ

笛太鼓のひびき神様本調子
遠い深海から鰻よくぞきてくれた
離島では子供も産めぬ空しさよ
草笛で紙芝居屋を呼びもどす
背伸びしても届かぬものが増えてゆく

米子市 青戸田鶴

さわやかな笑顔たやさぬ若い友
前向きのはずが足から萎えてくる
孫嫁ぎポツカリ胸に穴があき
クーラーの中で考えまともらぬ
草笛を吹いて公園散歩する

鳥取県 松川行男

少し飲む空梅雨らしく腹に浸む
長靴も豪雨の時に濡らすだけ
電柱が消えて散歩の犬困り
いざさらば禁酒が解ける退院だ
呼んでくれ宿泊会費個人持ち

鳥取県 佐伯やえ

自由は宝ひ孫の動作明日がある
逆わずゴミにならないよう生きる
年の差をこえて仲間がまたふえる
教育崩壊野心と金に汚れきる
汚れたことに使われ金が泣いている

鳥取県 竹信照彦

梅雨なのに山陰なのに雨降らぬ
太陽が昇らぬうちにひと仕事
プランターの底に野性が生きている
舞鶴へ戦後空白埋める旅
星を見る夜風涼しくなつて夏

鳥取県 細田裕花

幻になったガソリン安い日日
ハーモニカ郷愁の風吹いて来る
ぼんぼんとミットの音が冴えている
胸元へ反応試す速い球
突つ支い棒だつたと気付く姑いない

鳥取県 北村稔

ひき蛙住んでるわが家平和です
年とればだんだん親とそつくり
夕立が過ぎ涼風がこちよし
潮どきよ母さん父のそでを引く
雨ほしい夕立のこぬ空にらむ

鳥取県 盛田夢路

もう少し目線上げると青い空
叶うならし損なつてる恩返し
そのまま良いと仰るほとけさま
紋白蝶だれの化身かつきまとう
脳天にペンペン草が生えて来た

鳥取県 山下節子

手の平で覚えた温さ忘れない
頼み事今潮どきと切り出した
ノーマークされた悔しさバネにする
温暖化地球の四季を止めないで
許さんと言われる覚悟出来ている

松江市 三島淞丘

縋る娘へ老いの無力を悔いている
畑を打つ意地を軍手は知っている
美術展名画を胸に持ち帰る
幸せは五臓六腑の丸印
ライフプラン修正ペンが忙しい

松江市 小川注湖

新緑に女匂わせ先を行く
相合い傘肩寄せ合つて熱計る
規制緩和モラルも緩和してしま
泥水を浴びせて車尻を振る
雑草の意地本気かも知れませ

松江市 川本畔

さらさらと新聞めくる夫がいる
もう少し庭の緑に溺れよう
鈍音を立てて配達さんらしい
コトリ音郵便物の挨拶だ
とくとくと娘に電話論される

松江市 安食友子

子蛙も老婆じゃそつぱ然もあらん
またやった餅は差し歯の敵なのに
星一つパワーアップをしてる思慕
ファミリーのピエロになった生き残り
悔った曾孫相手の折り鶴よ

松江市 津川紫晃

肩のこり後ろに回る妻がいる
蹴飛ばした石が心にはねかえり
退屈という贅沢な刻を持つ
水ならばコップ一杯しか飲めず
告白の済んだ花から散って行く

松江市 松本知恵子

石山寺紫式部に逢えそうな
長編の源氏を書いた底力
夏越しの祓すつきり輪をくぐる
夏色にペランダ染めるミニトマト
梅雨明けを待たずもの言う入道雲

出雲市 石倉美佐子

移り気な花の最後は濃紫
雨に濡れひとしお愛が深くなる
人形の悲しさ添うことも出来ぬ
さよならも言わずに歳月は過ぎ
おえかきの時間鼻唄すぐに出る

出雲市 吉岡きみえ

ガタの来た古家なんばに査定する
ペン投げてみたがやっぱり落ちつかぬ
ただ今を大事にしたい古のれん
一陣の風がわたしを置いて去る
明日は明日今日とおんなじ風吹かぬ

出雲市 竹治ちかし

母さんの料理三つ星かも知れぬ
無駄貯めて私の糧にしています
積み上げた無駄に私の城がある
ひっそりとためらい傷は持ったまま
好きな人嫌いな人も居る故郷

出雲市 岸桂子

生きている証ワサビが鼻にくる
夕暮れにひたすら願う子の明日
飽食のカラスが山に帰らない
花鋏持てば安らぐ音がする
追憶もおぼろおぼろとなってくる

出雲市 伊藤玲子

髪切って握り鮭食べしばし留守
隣部屋ホテルと紛う話し声
短夜の語りつきせぬ十字星
手の出せぬ苛立ち娑婆は雨の窓
イケメンのドクター信じ組板に

出雲市 多久和 敬子
テーブルが二人の会話聞いている

まな板が私の帰り待っていた
聞き役に慣れて円満嫁姑

半額の惣菜の前人集り
古里の海に初恋眠ってる

出雲市 小豆澤 歌子

恋の灯を点してとんでいる蛍

群青の空に消されていったウツ

お陽さまをいっぱい吸ったシャツ畳む

ボンボン船私の港出ていった

ふるさとに帰ると減っている木立

出雲市 佐藤 治代

あと十年生きる予定を立ててみる

茄子を煮るおいしいと言う夫の義歯

闘争心無くし私で無いわたし

遊び癖少なくなった痛い腰

生きるのも至難の業と心得る

出雲市 森 茂美

新築のお宅へ燕コンニチワ

泥棒も自動ドアですハイどうぞ

ためらいつつやっとなつかれに来た曾孫

六道湖へ夕日を渡す松江橋

山里に霧の匂いが包む宿

心のカビはさらりと温泉で

栄養剤のんでポックリ考える

足湯してニュースもつかみりフレッシュ

良い方へ迷信信じほくそ笑む

お隣りの女気になる神の前

出雲市 小白金 房子

古い牛の出産急ぐ深夜の灯

マグサ切る鼻息荒い牛の声

雨傘を濡らして巡る花の寺

晚じまして自転車行き合う里の道

新築を祝う般若の面を買う

出雲市 持田 多輝子

ひたひたと祝盃受けるふしくれ手

御先祖の人柄民話の中で活き

初なりの果実家族の愛を盛る

日本中不安な老後見えかくれ

口車乗せられ炎の粉かぶる破目

雲南市 毛利 幸

七夕に十七文字の願をかけ

人生を黙々歩み花咲かす

雑草に謝まりながら抜いている

人生の木陰に隠れほつとする

ふらふらの遊び心があだになる

鳥根県 伊藤 寿美

去年より小さくなっていた港
温泉でオーバーホールする肋
来年も生きるつもり梅漬ける
新じゃがのみそ汁作る誕生日
時代劇にも居たニートホームレス

倉敷市 撰 喜子

おかしそ嬢天下が掃除する
クラス会陽気な友に見る孤独
太陽光集め我が家のエコライフ
エコライフ廃油石けん売れます
皆逃げて巡り巡った役が来る

美作市 福原悦子

花の下誘われ日課つい忘れ
古里の小川に捨てた恋だった
人生行路泣き笑いでまだ未完
煩惱を捨てて雨なら濡れましょう
空耳の怖い告知を聞き返す

美作市 大石 あすなろ

立ちくらししてから止まぬ怯え癖
廃校の銀杏の下で過去に会う
転んでも起きて上手に生きてます
不定愁訴やがては風が去るように
ときめきがまだある喜寿のコンパクト

真庭市 福嶋 智恵子

歳月が自覚ないまま過ぎてゆく
独り身の多忙言いつつ何もせず
原油高年金暮し辛い日々
一坪の余生楽しむナスキュウリ
遺跡の絵落書だったかも知れず

真庭市 国米 きくゑ

元気でネその一言で癒される
爽やかな風に誘われ試歩の足
一日の疲れ足湯に溶けていく
森林浴のち洗濯して貰う
今朝もまたお願いばかり灯り点け

竹原市 時広一路

茶の間だけ灯りがついていて独り
皺の顔だけで鏡よ濟まないね
惚け防止ハンドル軽く持っている
読めるから書けると決まっていな漢字
植えもせぬ方が綺麗な花を付け

竹原市 岩本 笑子

病院へ通う新しい靴はいて
八起き目の夫をだまって見ていよう
試金石だろうか三度目のガンよ
放射線私の乳房かわいそう
待合室同じ時間に同じ顔

竹原市 石原 淑子

夏が好き歌壇賑わすこぼれ種
名ばかり主婦金魚にチエツクされてます
通リゃんせ迷路のつづく人の道
父の忌や背後に父をふと感じ
草筆り草の無念を晴らす虫

宇部市 平田 実男

立つ鳥が跡を濁して天下る
自家用は無農薬だと言う農家
命より預金の減ってゆく早さ
訓練のように治まらない火の手
戦友の顔が浮かんでくる軍歌

美祿市 安平次 弘道

底抜けに明るい人が嘘を言い
あの世からこの世へ妥協など出来ぬ
一線を越えて一会の風に会い
ストレスが溜まりチャンスがまた逃がし
目標が決まり残り火燃え上がり

東かがわ市 伊勢 八重子

七夕の笹一ぱいに子等の夢
湯煙に至福の首が浮いている
ふり向けば数えきれない我慢坂
風習がじんわり嫁の座を縛る
山越してホッと安らぐ命の灯

東かがわ市 川崎 ひかり

町が市になって変らぬ暮し向き
火傷する覚悟はもたぬ火付け役
生きる知恵何も知らない養殖魚
夫より子にこずかいを多く出す
田舎でも起きた子殺し親殺し

東かがわ市 清川 玲子

幸せが逃げないように壺に封
喫煙所へ封じ込まれて吸うタバコ
家出した猫の噂も消えかかる
燕つばきの親の情愛いまさらに
一声に元氣もらって立ち直る

東かがわ市 原 賢

熱冷まシート貼って話の輪に溶ける
らしくしていれば躓くこともない
ストレスは紫煙に混ぜて吹き飛ばす
細くとも強い絆の嫁姑
強がりは何時でも妻の前でだけ

松山市 高橋 宏臣

指切りの指をしたたる後日譚
片道の切符で迷ってばかりいる
逆転をくって動ぜぬ無表情
ポケットが浅くて虹が詰め切れず
雑踏の背に引く波と寄せる波

松山市 古手川 光

彼処にも此処にも謎が明日香村

悔いの無い人生などと綺麗事

保釈金が無いので悪いことはせん

インタビュウのマイクも美女の方が好き

聖職の文字は教師の辞書に無い

松山市 宮尾 みのり

保護色にはばらく染まる生き上手

無器用な努力を嘆うキリギリス

年金があるからささやいてもくれる

かくし芸教育勅語そらんじる

チャレンジがすぐ足腰にひびく歳

西予市 黒田 茂代

ダイエツトさせたい鯉のいる津和野

その花が好きで名前も好きになる

逢うてみたし逢えるはずなし秋の雲

擦れ違つただけの淋しいめぐり逢い

お人柄でしょう何でも受け止める

高知県 小澤 幸泉

強がりの乱れた文字に老いを知る

親父には知らせぬ言葉多くなり

立ち読みを集めにぎわうマンガ堂

内孫はだんだん遠い職さがし

新築の何はともあれおめでとう

高知県 小川 てるみ

よく笑う鏡は歳を気にしない

嬉嬉として素手に素足の土いじり

花好きを知つてか苗が届く梅雨

極楽の境地にひたる菖蒲園

人間の欲に歯止めのない偽装

唐津市 樋口 輝夫

物故者が増えてつぶれたクラス会

ねんきんの生死のほどが分からない

一本のフィルムに孫を閉じ込める

ヨッコラショそれで動いている私

合格に爺がのほせて触れ歩き

唐津市 坂本 蜂朗

あれほれでよくぞ分かるよな一お前

児に還る老母を摩つている前期

猥談もさらりと後期高齢者

鏡台が点検をする今日の笑み

踊り場でそつと息継ぎしてる見栄

唐津市 井上 勝視

育つ児に爺は体力カネが要る

七十五日風止むまでの細い息

しきたりの由来つくづく思う齢

教育の力まざまざ事件事故

来し方のジグザグ航路泣き笑い

唐津市 山口 高明

解明をするのが怖い悩みごと

珍名と苗字蒐めて遊んでる

評判の名医の苗字数だつて

あの頃は優しかったと愚痴られる

アチチチと床屋がのせる蒸しタオル

唐津市 市丸 晴翠

延命は不要望むは尊厳死

亡き母の回忌重ねて二十七

五〇回忌済ませて父は神となる

偽装ない菜園に来る猪や鳥

花マルを日記に付けて伸ばす腰

熊本市 永田 俊子

カタカナ辞典愛用してます惚け防止

糸巻きにつくろいした日を巻いている

心の穢なくしてからの月おぼろ

それからはやさしい風に注意する

ポケットに老いの哀しみためている

熊本市 高野 宵草

老齢という病名に耐え忍ぶ

人情の輪の中に居て胸つまる

日常のリズムを崩す物忘れ

訴えを聞く医師探しハシゴする

植木鉢みんな大地に帰そうか

熊本県 岩切 康子

葉も蕾もみな食べられて虫憎い

付合えば友の友いて楽しい日

甘い物止められないと舌申す

前髪を染めて満足する鏡

歯はみんな健在だけど隙だらけ

シドニー 坂上 のり子

核と拉致が天秤に掛けられる

資源開発赤土掘って生きる国

お茶漬けに和む心は日本人

およばれへ赤いワインを抱いて行く

原因はあのお茶だった長い夜

砂川市 大橋 政良

通学の自転車ぶつかると凶器

よもぎ餅草の匂いがこころよい

修正液塗られ窒息してしまふ

脱線をして考える善後策

居酒屋で雨の止むまで飲んでる

黒石市 相馬 一花

占いを信じてしまふ脳の錯

縦揺れも横揺れもする少年期

ステッキを持って出かける自衛策

そろそろと目くばせをして輪を抜ける

ほろ酔いのうちは飲み代ける癖

十和田市 阿部 進

この線路古里の駅へ続きます
肩書きがとれて気ままな野良仕事
本当ににがした魚でかかった
何時までも心に浮かぶあの笑顔
母の味うまかった頃思い出す

平川市 小寺 花 峯

グルメ嗜好舌より先に見る値段
お隣の隣りとなぜか馬が合う
五捨六入の戦士が並ぶ僕の影
病気でない病気が襲う還暦で
三合の銚子に肩が癒される

弘前市 今 愁 女

検診の結果がん無しホッと笑む
血糖値上げぬ適度のウォーキング
わが家計引き算だけことが足り
物価高値段据え置き量が減り
原油高 安近短の旅社

弘前市 高橋 岳 水

一ランク落して迷路から抜ける
天秤にかけた情けは当てにせず
人生の当り外れは神の手に
胸元にストンと落ちる誘い球
本物のソバ粉で少し色黒で

弘前市 高瀬 霜 石

無駄話したあとなぜかホツとする
友だちが多くて困るのし袋
理科系が血液型を口にする
健康がいちばんですと言うお通夜
作文で金賞をとる離婚劇

弘前市 岡 本 花 匠

天変地異子年もころあらげぬ
ふところの鬼をなだめる処世術
花ごころ妻心得た花鋏
休耕田人待ち貌の草の丈
お盆前墓地で汗なす草取り女

弘前市 櫻 庭 順 風

新幹線地震の余波に遭うなんて
残念無念今日のたのしみばあになる
連絡を取らねばならぬでも乗車
新幹線遅くて鈍い名前負け
ケイタイを不携帯危惧した地震

弘前市 福 士 慕 情

お土産はりんど決めている手籠
サーブスエリア団体客がどつと降り
おばちゃんに男子トイレを乗っ取られ
山間の出迎え受ける湯の煙り
板さんと馴染になった釣り談議

第107回
大阪川柳の会

日時 10月2日(木) 17時開場 18時締切(席題なし)
会場 梅田駅前第2ビル5階 生涯学習センター
宿題 △回る・藤原正明△いよいよ・住田英比古
△むかむか・寺川弘一△生きる・磯野いさむ
会費 千円 欠席投句10月1日まで 本田智彦宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706
本田智彦宛

弘前市 須郷井蛙
メタボ税かけてやりたい肥りよう
猛獸に分類したい人がいる
有料化圧縮術を身に付ける
一円の安さを競うチラシ攻め
雑草も待ってましたと雨を吸う
弘前市 宮崎ヒサ子
わたしにも花にも水は欠かせない
さくらんぼ色づき初夏が届きます
話題満載楽しい友がやってくる
宵宮の花火に引かれ下駄を履く
珍らしく写真在中文がくる
弘前市 相馬銀波
外出の伴を欠かさぬ夏帽子
雨雲にぐち梅雨あけを待つ雨男
縄抜けが手を汚してる村雀
約束は無期限という手を握る
聴く耳を怒声がふさぐ反対派

温故知新

奮がついたわよと朝のひとつき
二人づつ二人づつ居る中之島
血が通うように人形首をあげ

武部 若菜

流産の話は猫のことでした
京女みるたのしみも京の旅
神経を抜けば地獄の面白さ

戸田 古方

帰化しても唄は二上がり三下がり
怒る時だけに父親使われる
若い気で居ても求人欄のそと

内藤草一郎

香煙ゆれてああ人生は終るのさ
子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち
寂しからずや七十にして節を枉げ

中島生々庵

— 合同句集「私達」 —
昭和三年発行 選者麻生路郎

川柳塔の

川柳讚歌

(45)

木津川 計

健康の秘訣聞かれる歳かなあ

福島 万年

自分はまだまだ若いと思つていても、人さんは正直です。「タフですねえ」と感心されてよろこぶのはおめでたい御仁でしかありません。健康の秘訣も同様で、三十や四十代に誰が聞きましょう。相当の齢なればこそですから、よるこんでいる場合ではありません。

「健康の秘訣は？」と問われ、かの吉田茂は「人を食つてから」と人を食つた答えて八十九歳で他界しました。万年さん、万年の天寿を全うするために、右の文言をぜひ。

お互いの顔じつと見る同い年

高島 啓子

わかるなあ、啓子さんの句が、というのも八人の『上方芸能』編集部に七十二歳の同い年が三人もいるのですから。内の一人が私ですが、定年後の友人を次つき迎え入れたら、いずれも同年だったという訳。

編集会議で顔を合わせますが、啓子さん、

われわれは「じつと」は見ません。姿を現わした途端、瞬時に相手を観察して、だいぶ弱りよつたなあ、さすればおれが一番長生きかと三人ともそう思うから世話はありません。

ほどほどに生きて死ぬのは難かしい

秋元 てる

生き過ぎるのも難儀やし、生き急ぐのも無念です。ほどほどに生き、ほどほどに死ぬて、るさん、いったいいくつが目途ですか。広辞苑はほどほどを「ちようどよい程度」と説明しますが、これがまたわからん。いくつの最期が「ちようどよい程度」なのでしょう。

大阪弁にも曖昧表現が多くありますが、その最たるものが「急えて急かん」です。急くのか急かんのかわからん。要するに、ほどほどで頼むですが、これがやっぱりわからん。

ほろくそに言うてまたねと寄る姉妹

亀岡 哲子

「ほろくそ」も曖昧な大阪弁のひとつです。大阪ことは辞典（牧村史陽編、講談社）は、「朝飯前。へっちゃら。屁のこつぱ。お茶の子さいさい」と説明しますが、広辞苑にはこの意味はありません。劣悪なものや、劣悪なものとして「ののしつて言うさま」で、この姉妹もそんなやりとりをしたのです。ですが、相手を「劣悪なものとして」ののしつてはいません。ほろくそでも姉妹に悪意はなく、ユ

ーモアがあります。許し合える悪口です。

似てるよね未練男と踏んだガム

安土 理恵

こんどは未練男が理恵さんにはろくそです。「後を追うな」と言い残して去つた「函館の女」を追つたアホな奴、「燃えたつて燃えたつて」「尽くしても尽くしても」へあ、人の妻、ともだえた馬鹿な男、「湯の町エレジー」の昔から「踏んだガム」みたいに執拗で情けない男はいたのです。さりながら、「踏んだガム」と詠まれてはご同輩、男の一分が立たぬではありませぬか。そこで理恵さんに一矢を。

「似てるなあ未練女と踏んだガム」

天引きの残り六十で割る暮し

市丸 晴翠

到来した格差社会です。中流九割は崩壊、富める者はますます富み、貧しき者はいよいよ貧しく、それも自「責任と指弾されては救われません。今年の三月一四日、朝日新聞は厚労省と財務省の次の試算結果を伝えました。六五歳以上の夫婦世帯の税や保険料、医療費の自己負担は〇一年度、約九六万円でした。の〇七年度には約一五五万円に。五九万円も負担増のしかかつてきたのです。わずかな年金を六十で割る経済大困下の老人です。（『上方芸能』誌発行人）

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

人生の雑音

一票が悲しき支配力を持ち (総選挙)
保険金あてにされてるのをなげき
財産がハッキリわかり養子逃げ
お互ひにきっちり坐る薄情さ
筆不精釣りにゆくひまありながら
月に吸はれ戸も締めないで出て行った
全壊と少し誇張もして寄越し
君止せよ風見舞にまで商売気
颱風のあんな力が欲しくなり
瓦の飛んだ話いつまで続くのか

鐘楼に鐘のないよな暮らしして
彼の一生雨雨雨のままだった
斜陽族仏壇までが小さくなり
正月も昔は紫雲たなびいた
追放解除もとの一徹者になり
お婆さんに限り死にたがり死にたがり
胸像も主張をまげぬ面ヲ構え
死んだそうなど簡単に片づける
仲直り口の軽さを封じられ
あんたと一緒なら喰べますと河豚料理
地震からやっぱし男頼りにし
老人の日に旗竿がまだ買えず
吸殻でそのけちくささけちくささ
いつからか死後の準備もしてなる

白選集

遠山可住

中原諷人

どうしました上下聞いて齢ですな
財布眼鏡ハンカチティッシュはいOK
女子組もビールとなれば引けとらぬ
五十年時効にならぬ妻の愚痴
それがいかん地獄の沙汰も金次第

都倉求芽

西出楓楽

あの時のあの湯の宿が震源地
ブラインド昼寝は車中と決めてある
風化した碑に彫りはまだ見事
犬だけは僕に尾を振る角の家
もう誰も来るなど閉めて丸裸

土橋 螢

仁部四郎

にんげんが好きだと海が呼んでいる
ガソリンが十円安い店へ行く
娘の分もじやが芋を植えていた
友だちが死んだと雨が降りだした
悪口を言うのと疲れるからやめた

天高くなり身の一つ残り籬
背の肩の守護霊さんを重んじる
不揃いを恥じてもない茄子ゴージャ
やれやれの苦界で送り火が焚ける
彼岸から誘うでもなく曼珠沙華
ひまわりの無様に枯れてゆく未練
心優しい人で水虫飼うてはる
ここだけの話が好きで惚けられぬ
そうめんでは太刀打ち出来ぬ夏の陣
どの角度で撮っても歳が出てしまう
大臣の嘘に媚薬の味がある
子の嘘を苦しまぎれのはずで聞く
上出来の嘘で老女がほめられる
あの嘘が咄嗟の機転であったとは
予習した嘘に男が溺れだす

波多野 五楽庵

難病よ妻の疲れを如何にせん
テープが回る果物屋の連呼
不器用な会話に裏がありそうだ
失ないしもの大きな虚脱感
婚礼も葬礼もある日曜日

林 瑞枝

焚火してじつくり秋と対話する
艶やかな廊下素足にあつたかい
古墳からまた一枚の絵が浮かぶ
いち枚の艶書を舞わすピアノ弾き
ひるがえすドレス遠野をひとり持つ

早川 清生

今日の運勢読んだは覇気のあつた頃
サミットは地球のいのちより自国
オイル資本討つべし木炭車にすべし
神の怒りの限界だろう日本人
手続きが面倒手出さぬものがふえ

前 たもつ

一度切り古稀と喜寿との句集なり
半世紀ぶりに友交暖める
お礼状一つにわが身振り返る
仲人に夫婦の絆見てもらう
拙さを詫びて恩師の墓参り

宮西 弥生

小笠原流にご無沙汰顔を出す
運命線このへんからが長くなる
向き合うた数だけ女皮を脱ぐ
愚を吐いたつけが足元暗くする
紫外線まだまだ女深帽子

森下 愛論

腹たててもろく崩れる自尊心
生活のゆとり安易にかくあぐら
タクシーの自動ドアに挟まれる
新聞を逆さに持つて詰将棋
風鈴が秋を呼んでる銀河澄む

八十田 洞庵

友からは秋の音符に誘われる
パロディに近い本物影ひそめ
残響は悲しいドラマで終りそう
解答は白紙でもよい合格す
中庸に生きた無欲の師を慕う

両川 洋々

九条は総理が粗大ゴミに出す
不眠症の風がひと晩中しゃべる
きのう今日愛の裂け目に酒を酌ぐ
移り気な花です妻によう似とる
星二つ不倫の星を産み落とす

平凡な日々です曲り角がない
言い負けたが悔いなし星の道帰る
貧乏性何かにつけて及び腰
回り道したが大矢つ張り無理は無理
卒寿です兎角気がつくのも遅い

阿 萬 萬 的
板 尾 岳 人

風の盆今年も母に逢えるかも
燃えつきた男が走る風の盆
菅笠を覗くと嫌う風の盆
風の盆やさしい花が散り急ぐ
情念の三味を聞いている風の盆

奥 田 みつ子

35℃子供にかえるかき氷
今置いた書類がまたも神隠し
年重ね誰にも物が言いやすし
腹立てる愚かさ我が身ふり返る
逆らわず面白がつて生きてみる
丹精に微笑みかけてくれる花
見る人の心揺さぶる沙羅の花
口出したばかり余計な用が増え
手応えは確か合否待つ余裕
先手取る意気込んで来る裏を突く

河 井 庸 佑

節水の宣伝カーがゆく残暑
片隅に菊活けてあり無人駅
台風銀座日本列島狙われる
休耕田コスモスの花真盛り
底辺に棲んでも米はコシヒカリ

木 村 あきら
小 島 蘭 幸

還暦の眼に元宋の赤やよし
元宋と小由女が響き合う森だ
夫婦とや元宋の赤小由女の白
満月を見るためだけにある椅子か
生涯現役ふるさとにある美術館

小 西 雄 々

漁火に生真面目な父背も痩せる
下積みの石で生い立ちには触れぬ
戦死より良かった暮し辛くても
千円になれば禁煙するつもり
金属疲労わたしも町も進みそう
一本の桐が家族の下駄になる
丹精を込めた証拠だ芋の出来
分け合った苗が近所で花をつけ
津軽みなねぶたの彩に染まる夏
草笛を吹くと瞳が澄んでくる

斉 藤 荔

塩満敏

羽曳野を蛍めだかの里にする
羽曳野を葡萄無花果の里にする
羽曳野を公正民主な市にしたい
ああ嬉し多喜二の本が売れている
有名になって来ました鶴彬

新家完司

散歩道ジャガイモひとつ落ちていた
自給率上げると蛙鳴いている
「後期高齢」より失礼な「廢鶏」
あの世までこころ広がる午後の墓地
夏草に覆われ出口分からない

川上大輪

熱中症かもお地藏さんが動かない
熱帯夜飾る言葉も見つからぬ
ご先祖はみな天国にいるやろか
あとだしをしたジャンケンで負けている
そうかそうかりセツトキーを忘れてた

玉置重人

おひらきを待つてる星影のワルツ
一大事診察券がまたふえた
大切な形見手垢のついた辞書
うっかり度だんだんふえた自己嫌悪
据え膳上げ膳外食のありがたさ

恒松町紅

鉢の木は枯れても草は緑色
老いの意地まだ捨てられぬ筆の先
明日へまだ余力残して老いの腕
病院で自分の杖と見比べる
後期高齢豊かな老後嚇かさ

津守柳伸

シソジュース今年も飲んでいる至福
ノクターン独りぼっちのテイルーム
五座遠く太郎も消えたミナミの灯
露天風呂蛇に占拠をされた宿
赤飯で別れの朝を締めくくる

お知らせ

このたびの主幹・理事長選任投票の結果、
次のおとり、再選されました。
主幹 河内天笑
理事長 西出楓楽
正式決定は同人総会の承認後となります。

川柳塔社

お願い

エッセイ、各地句会便り、ひとこと原稿、
並びに柳界展望の情報等、事務所へお送り
下さい。掲載については編集部に一任とさ
せていただきます。



小島蘭幸選

日立市 加藤 権悟

初なりのトマトの味はゴチソーだ
朝取ったキュウリ緑の味がする
初めてのトマト作りを褒められる
安心の自給自足は難しい

吹田市 二宮 栄子

豊饒の大地に台風などくるな
ふるさとの過疎を労るそばの花
田の神が休耕田を見て黙り
鎌となら大地にいのちある限り
農政を語る減反とのいくさ
農を継ぐ大地に偏差値など無縁
晩学の峠あしたも忙しい

田辺市 大峠 可動

炎天下くらくらくらと槍ぶすま
不即不離知能指数が足りなくて
大都会夢を求める靴ばかり
轟々と鳴るは熊野の水しぶき
慟哭と空即是色とあの世まで
木の実落つ新旧自由の身になつて

府中市 藤岡 ヒデコ

花畑間借りしてます瓜トマト
花に水ついでにトマトきゅうりにも

古里にすいか冷やした井戸がある
病室に四人四色のドラマあり
児等が来て製氷皿が忙しい
肩の荷を降ろして趣味の風と会う
ぜいたくは言うまい娘等がそばに居て
母の愛汲めども涸れる事はない

美作市 小林 妻子

福祉バスで集める総合検診
年金を削る施策か機嫌とる
青田風狭間はごまに梅ラッキョ
草刈機うなる山百合怯えてる
送迎バス黄な鞆が五、六人

高知市 松尾 憲子

独りが好きでも独りでは生きられぬ

あの頃はみんな太陽だったヨネ

大正の母よりもうエネルギー

嫌なものは嫌とハッキリ言えばいい

墨をする香りに心静められ

今治市 渡邊 伊津志

手や足に表情がある心の絵

小さいけど心が見える尊い絵

デテールをつないで作る若い感

体操をすると心が滲み出る

詠むよりも読めと恩師の顔浮かぶ

鳥取市 近藤 秋星

天の川織姫様は不老です

梅雨はまだ明けぬに早い夏バテだ

老いと死へ向って今日も歩いてる

三途の川に橋が架かってから死のう

長寿即幸福だとは限らない

吹田市 早泉 早人

おおかたは仲良くなれる愛煙家

反論はしないでおこう雨あがる

あたらしい自分になって梅雨抜ける

かっかする僕を諫める妻のトス

リベンジはひと眠りしてからのこと

寝屋川市 森田 麗

英語も交じり一時帰国の孫とハグ(孫一時帰国 3句)

時差ボケが好きなの和食も寄せつけぬ

ピアノ弾く孫のビデオについて正座

行き止り犬と迷路に入り込む

ジーパンの破れも揃え若夫婦

大阪市 尾崎 ゆめ

黒ビール似合う男を恋人に

ていねいにアクを掬ってお出しする

鶴になる時の姿は見せません

ワンカップから始まった恋の道

君とぼく夜行遠距離乗り続け

豊中市 荒巻 夢

ブルーな日ぶるるんと葛の菓子

衣替えいつも季節に追い越され

うちのタマ魚はやっぱり切り身だね

登りつめ崩れゆくのかこの社会

太陽を吸った簾の佻び住まい

和歌山市 田中 すす

お地藏さまと過ごす時間が長くなる

水槽にたんと泳いでいる命

好きなように生きよと自立させた道

人間に知恵あり神は手を貸さず

敗北宣言すっきりとして立ち直る

和歌山県 森 下 よりこ

もみじマークの車行き交う農繁期

今が仕合せ独りの自由満喫す

時々は子等と食事に弾む居間

息子の代理まだまだやれる母である

一步引く癖は生涯変わらない

和歌山県 福 井 菜 摘

凜としてあなたジョークに欠けている

白線を越えたあたりにある野心

実直に生きて無冠の力瘤

川の字で育った子等は親思い

幸せは小鉢に取ったほどがよい

横浜市 川 島 良 子

決心がつかぬお水をもう一杯

イケメンの影も形も消えていた

一字ずつ確かめながら打つメール

ひとりっ子独り遊びが上手です

使い捨てボクも時代の波に乗る

福岡県 林 さだき

本棚の本を心配する老後

あいまいに笑って甘く身を守り

一日の始まりによむスポーツ紙

狡いなあこんなどころでネズミ捕り

阿波市 三 浦 千 津 子

内緒だと言われた耳が熱を持つ

脳回路子供ニュースで通りよし

肩書きが本音を言わぬ人とする

スランプへ程よいヒント夫から

雲南市 福 間 博 利

無我の境降りてしまった無人駅

幼児は青い地球を抱いてねる

八十路坂なぜか登りの坂ばかり

病院で長生きしすぎと思つたり

雲南市 渡 部 好 榮

励まされその気になった玉の汗

のこのこと出て来た狸の見た夢は

風呂敷がまだまだ似合う田舎道

七十年同じ雲には会えません

雲南市 菅 田 かつ子

励ましてくれる無口な蝸牛

トンネルの中は無口で通るとこ

留守番もまた良し茶漬さらさらと

背を丸くしてあんちゃんは九十歳

府中市 馬 場 利 子

手の届く秋の高さへ舞うとんぼ

平凡で政治も金も粹の外

髪染めて母の笑いが若返える

一つずつ命つないで来る誕生日

府中市 岩本雅代

歌姫のバラ一本を胸に抱き
他人の世話して我が財布置き忘れ
お人好し高級品を買わされる
悔やまない誰か喜ぶ者が居る

鳥取市 津村律子

景気をつけて土用うなぎの串を買う
温暖化山陰の梅雨らしさ無い
柳友は駄洒落に悪をまじえない
うさ晴す何より缶をポンとあけ

鳥取市 松岡照美

ツバメの巣ちゃっかり雀ねらつてる
電話の向こうそっくりな声を聞く
やすらぎの言葉私の潤滑油
新鮮な風吹いてくるクールビズ

米子市 小塩智加恵

書く事が好きでパソコンメール無し
千鉢の花菖蒲庭茶席あり
日除けにと植えたゴーヤに実が下がる
三病と付き合う義姉も亡母を越す

松江市 松浦登志子

ホルモンの分泌ふやす黄を着る
お揃いのシャツとシューズで一万歩
団塊のジュニア晩婚ラッシュです
生る時は毎日山のような瓜

鳥取県 岩崎和子

ペンを持ち字を書く私幸せな
手術室医師助手みんな神の手よ
悪玉を除去され私新生人
風呂上がりが汗引くまでと句に浸る

三木市 広瀬房江

リフォームへ燕お宿が作れない
ダイエット決意した日に来る銘菓
ほんの少し醤油を落すかくし味
血圧を計らない日のよい調子

神戸市 木村忠義

小さな幸をたくさん見つけ生きてゆく
晩酌が許され自分取り戻す
行き詰まり思考角度を変えてみる
悪いこと続きいいことそろそろか

和歌山市 坂部かずみ

日常に戻り不平も取り戻す
青空に転がしてみるトンボ玉
通勤の流れの中でひとり旅
整然と通勤電車夏の朝

和歌山市 土屋起世子

土用うなぎ疑い出すと切りがない
まっすぐに生きて頑固になった父
子の家族来ると愉しい盆の唄
ネジ一本退屈せずに日が暮れる

岩出市 村中悦男

けつまずく段差に気付き世を渡る
虫歯治療義歯ひとつない痛さかな
わが妻の季節料理を分かちたい
五十余年老いて夫婦の味がする

海口市 小谷小雪

ため息を転がしている青大豆
お日様に育つびかびか茄子の彩
ミニトマト素直な虫を遊ばせる
ぶるりんこ切り口がいい冷奴

紀の川市 宇野幹子

睨まれて笑い返せる人になる
しなやかに嘘脱ぎ捨てる今年竹
臍の緒をきった時から負けている
原石のまままで終ったデスマスク

紀の川市 吉村幸

同じテレビ見てる夫婦で良く笑い
詰めすぎた欲の葛籠を整理中
よく噛めば粗食も力満ちてくる
重荷にはなれぬ健診欠かさない

紀の川市 木村徑子

果てしない夢追いかけている花野
マスコミの投げる波紋が連鎖する
美しい老いを夢みているのです
カレーも僕も煮こめばきつと美味くなる

泉野市 稲葉洋

タフガイが母を語って噓せている
夏姿メタボでございますと腹
徴兵だ後期だなどと歳の枷
六文じゃ逝かれず医者も診てくれず

泉大津市 助川和美

今朝何食べた思い出さぬが元気で
無言でも亭主と三時ティータム
父さんの額の汗にありがとう
好きな酒止めて長生きしたくない

加西市 金川宣子

朝練と言っては彼と話し込み
元彼に会いたくなくてダイエツト
針の穴覗くと青い空が見え
だまされた振りして過ごし四十年

加東市 岩本美緒子

まだ描ける何にも勝る奢りです
アトリエの窓のそよ風一等席
いつまでの花まる印誕生日
描いてたなーそれだけ残す画帖数

宝塚市 丸山孔一

出合い系加害者だけが悪いのか
子等都市へ都市に私の墓を買う
古稀語学二十日鼠の輪の如く
志ん生を聴いてあの日の我思う

尼崎市 藤岡りこ

雨しきり鳥の鳴き声さえ消えて
新緑が花に劣らぬ嵐山

豊かさに慣れて給食食べ残し
豊かですひとと比べることはせず

吹田市 中村 十八娘

病室のどの窓からも遠花火
入院の子にも祭着夜なべする

熱帯夜水中花だけ生きて居る
ラムネ飲む昭和の音がカラコロリ

八尾市 赤木 妙子

小鳥と虫とみんなで食べるミニ菜園
あれは天女か泰山木の花の彩

監視カメラに見られ守られ町を行く
横文字が溢れて迷う町のウツ

八尾市 中島 春江

くだおれと吉兆おかみ見くらべて
肝心のこと言い兼ねている八十路

たわいなきことに笑う娘カンピール
旧友よりのでんわ暑さを忘れさせ

八尾市 前田 紀雄

原油高遠出を止めて散歩する
勝ち捲る強い阪神見たくない

丑の日はアナゴで我慢しときます
サミットのそもそもを問う地球危機

藤井寺市 吉田 喜代子

特別便気掛かりなのか夢に亡夫
夢の中亡夫は若くて遅しい

物価高ばあちゃんの知恵光り出す
不信増し今年ほうなぎ買いません

枚方市 小林 わこ

絵日記にいつも朝顔咲いていた
絵葉書に愛の言葉をそつと添え

あなたの絵に重ねたかった私の絵
ダイズニールランド夢を拾いに夢食べに

藤井寺市 津田 シルク

幼子の笑みに心が溶けてくる
とまったと思えば刺している蚊

子の人生入園時から狭き門
日替りで痛いところあり老い二人

堺市 大久保 ノン子

音たてて私を過ぎていく時間
天国も地獄もあつてこの世です

遺伝子のタクトのままに生きている
大声で笑っているが目がきつい

堺市 羽田野 洋介

無い方がよかつた妻の書いた地図
ブランドはなくても時刻正確に

まあだまだ感動できる花暦
昔のこと語れば舌も滑らかに

豊中市 谷川 勇 治

イチゴ水初恋溶かしつくります
ドロップをカリカリ噛んで午後ひとり
明日嫁ぐ娘が風呂で歌ってる
食料不足休耕田のある日本

大阪市 安藤 なつこ

遊んでる訳じゃないです寺のハト
遊びたい日はないですかアリアさんも
デートなら許そう雨の遊園地
現代の人生修行ダイエツト

大阪府 若月 祐 作

炭坑節フォークダンスの元祖とは
朝帰りしても仕事に行く若さ
海女さんは古稀を過ぎてまだまだもぐる
後期高齢しほり取られて茶でも飲む

大阪市 吉田 富 美

夾竹桃炎ゆる生命の証とも
今は夢藍染ふとん重かった
朝市の露にぬれてる野菜かご
ひたすらに今日を生き抜く花美容

大阪市 原田 すみ子

初生りがうれしカメラに絵手紙に
好きな絵に搦め捕られて動けない
旅の空普段のわたし消しておく
男のロマン台所では語れない

大阪市 平井 露 芳

何もせんに風呂掃除ぐらいやつてんか
医師曰く夫婦共々動きなさい
タイガースたまには負けんとおもろない
洞爺湖へ旅行気分で来たブツシュ

大阪市 尾崎 黄 紅

君が代を笑顔で唱うそれもよし
約束の相手も忘れておりました
消印有効いつもポストにせかされる
竹光で斬られた傷のあとがいま

大阪市 山本 加お里

雑草にパワー貰って生きている
ゆつたりと犬の散歩に癒される
短冊に今が旬だと書いてみる
丁寧な挨拶したが人違い

大阪市 萩原 大 朔

釣人に一戸残った峡の宿
消えてくれ怒りが顔に出る前に
浜に来て送り返せぬゴミの山
粹人が丸く納めた内輪もめ

奈良市 辻内 げんえい

カフェテラス着物娘が脚を組む
使いまわし耳を疑うことばかり
ファッションに男のロマン匂わせる
読めるけど書けない漢字増えていく

奈良市 矢野良一

反面教師逝き処世術見失う

公園の白いブランコ恋の使者

誰もいない早朝の海独り占め

家庭菜園西瓜唐黍茄子胡瓜

京都市 藤井文代

熱き心なくし今では喧嘩なし

鈍感の広い心に癒される

歌うのも聞くのも疲れ中座する

団塊の行く先々に招き猫

岐阜市 平野あずま

本屋の子にうまれたかったマンガ好き

ケイタイは無いがテレカは持っている

真直ぐの道でも迷う葦である

スローライフの時計も同じ二十四時

横浜市 長島亜希子

律儀にもわずかの利子に税がつき

自分の物見に行き孫の物を買う

嫁姑杖つきあつてお買物

安全はただでは得られないと知る

藤沢市 加藤スズコ

八月八日八十八の誕生日

リハビリの百歩に挑むうれしい日

アンパンマンがパパになるから面白い

四川の空に揚げた日の丸救援隊

昭島市 野口忠

古里に河童仲間が集う盆

怪しげな顔でないからな怖い

道を聞くだけで駆け出す通学路

休み癖ついて二学期また遅刻

栃木県 岡野すみれ

のらりくらり生き永らえては困る国

ブーメラン戻らない日がきつと来る

発火する手前で止めてくれた親

父母逝つてこの世に怖いものはない

青森県 松山芳生

気がつけばだあれもない着地点

ふるさとの祭りファッション連れて来る

せせらぎの音ふるさとが寂しくて

人間の条件深呼吸ばかりする

札幌市 小沢淳

パソコンよ情報流し過ぎないか

高望みしては踏み台外しそう

お宝の山に埋もれたゴミ屋敷

日本今どげんかせんと沈みそう

シドニー 三谷たん吉

常識化してる汚職のおそろしさ

国際線ハエが一匹思案顔

明日におびえ未来を語るサミット

惚けぐあい確認し合うクラス会

唐津市 吉富節子

終りなき句の道老いの尻叩く
横道にそれて人間太くなり

唐津市 北村松風

王手飛車嵌める手孫は良く読んだ

人情も湯も溢れでる湯治宿
温泉でじっくり磨く座り胼胝

唐津市 岩崎 實

この度は医者薬がよくきいた
歯の治療すんでも調子もどらない

大洲市 花岡順子

小一の写真に僕の顔がある

身に付いたマナー衣装を選ばない

したたかになり明るさが消えていく
デジタル化良い事ばかり言うテレビ

高知県 いの静草

慰めは母に曾孫を見せたこと

妻にもね自分の時間差し上げる
通うのはレジの笑顔のいいお店

宇部市 高山清子

父の日と気づいた時は陽は西に
風向きで切り札を出すタイミング

八十路坂支える彼の手が温い

レシビには北の産地の自給力

尾道市 木曾一徳

アフリカのトウモロコシのイノセント
日本食長寿を誇る米文化

出雲市 川島和歌子

マイベース世間の噂聞き流す

シャトルバス大手スーパードラッグ店日
晩年の母に似て来た丸い背

松江市 山根邦代

朝の陽を浴びてひと日が弾み出す
生きている爪はきれいに伸びてくる

年重ねそれなりで良い影法師
松江市 相見柳歩

幸せを比べて逃げていっちゃった

ひとりひとり仲間を集め虹になる
百までは生きる再び生まれ来る

安来市 原 煩惱児

認知症の妻に確かな親友のこと

孫を待つ予定を日々に練っている
梅雨空を突き破らんか広葉杉

境港市 中井虎尾

働いてつかれて老えば国見捨て
恐い国今に取るかも空気税

日本食もてなすほどの材がなし(サミット)

境港市 遠藤 那珂子

雨が降る靴も心もずぶぬれに
美しい心でしてはるポランティア
再びの期待を胸に歩み出す

米子市 吉田 陽子

飲みたくて飲んでいるからうまい酒
政策に温いメニューが欠けている
大望はこの世をうまく消えること

米子市 見山 温子

夫婦喧嘩チャイムが鳴って小休止
一字一字書いては脳にネジをまく
食糧危機再び来ると予感する

米子市 猪森 スミエ

新緑の空気一パイ肺に入れ
身についた躰自然のなりゆきに
スタートの夢がふくらむ春四月

倉吉市 酒井 美美子

おみくじが凶と出たってケセラセラ
久し振り夢で貴女に逢えました
合格だ明るい希望湧いてくる

倉吉市 藤井 美津恵

温暖化昔の暮らし今一度
朝風に向って歩く日の出前
転倒を防ぐ体操間に合わず

倉吉市 前田 喜美子

いつの日か矢印いらぬお浄土へ
愛らしい豚の尻尾にある思い
口げんか背を向け合って今日も雨

鳥取市 大前 安子

跳ねている友と一緒の趣味の淵
涼風に亡母の浴衣へ手を通す
八月は熱く燃え出す慈悲心火

鳥取県 橋谷 静江

良い事をした日の飯は超うまい
友達の検査入院寂しすぎ
好きな花咲き誇ってる留守の庭

鳥取市 谷岡 清子

用心棒犬に任せて大の字に
かわい犬呼べばまっすぐ走りくる
仏壇の夫に毎日下手な経

鳥取県 田口 清帆

今日の事考えながら歯をみがく
値上げラッシュ財布のかげはいつなおる
希望とは見上げるもんかなるほどな

鳥取県 大塚 美代子

お化け屋敷悲鳴にのびるろくろ首
冗舌の中には半分うそがあり
一郎も太郎も消えた山 田んぼ

鳥取県 飯野 菖子

逝く日までこの手この足止められぬ

孫達も育った楽屋いまは空

愛の歌うたいつづけて逝く日まで

鳥取県 岡村 孝明

古い二人戦中唄び麦ごはん

農閑期積んどく本に活貰う

効能はもう出る頃と湯治宿

鳥取市 山口 千代子

老いの良さ上下の隔てなく丸い

長生きは良いが認知にならぬよう

非常時に備え入歯をはめて寝る

鳥取県 岡本 幸枝

華やかさないがひかれる山桜

海の幸山野の幸に富む我が家

年の功読む確率も良くなった

鳥取県 斉尾 くにこ

ロボットにできぬ笑顔を咲かせよう

髪を切るただそれだけにいる勇氣

化学反応できなくなった妥協癖

鳥取市 山岡 紀子

雨垂れを聞いてのんびりティータイム

一坪の畑も雨をまっている

三年前の気になる人に会えぬまま

池田市 多田 契子

港ではロマンス抱いて立つてます

太陽のすねてる時は私ウツ

古希を過ぎ時の流れが気にならず

雲南市 武島 ちよえ

お喋りと笑い食欲出る薬

爆音が真上で昼寝の邪魔をする

一日が事なく暮れてありがと

香南市 近森 功

協道もいいではないか長い坂

紅葉マークいずれ枯葉となって散り

共白髪お前も齢をとったなあ

香南市 桑名 孝雄

楮山の句が増えてきた仲間達

悪童にもあつた序列の中で生き

柳友と酒友で書こう四コマ目

明石市 梶谷 和郎

美しい地球に寄生する人科

冷めてみりや喧嘩の種が見つからぬ

今さらの発見妻の手にホクロ

三木市 山口 久子

ゆかた着ておまつりマンボおどる孫

暑中見舞ならいはじめの絵ハガキで

今日もまた暑い暑い冷ヤッコ

兵庫県 永井 かほる

そのうちに値上ラッシュも慣らされる
欲張った趣味もそろそろ選ばねば
三歳がお世辞使って空気読む
尼崎市 小池 幸子

2リットルお茶が私を支えてる
月一のゲームに我を忘れさせ
買物に友にはついて行きつらい

神戸市 武田 恵美子

バスガイド頭の中に地図がある
悪友の別れ話へ同意する
SOS妻が炎を噴いている

紀の川市 北山 絹子

可愛い孫なめまわしてもまだたらぬ
老夫婦相合傘でたのしそう
大いびき早くねた方が勝ちという

西宮市 石野 照代

欲ひとつ捨ててスリムになる
点検をしますまだまだ火になれる
ひまわりが好きで捨てない夢がある

紀の川市 辻内 次根

長電話はなし上手に聞き上手
青色の朝顔一輪孤独なり
控えめに生きて時には光る人

西宮市 藤本 直

ストレスは溜めずポイポイ捨てていく
老母同居弱音一切吐けません
ストレッチ自分をほめてシール貼る

和歌山市 根田 よしこ

年金に合せて食も細くなり
この人生仮縫いのまま終りそう
帰らない男屋台で群れている

尼崎市 河津 正治

プレッシャー背に全開をするパワー
病んでからひとり居の城揺らぎ出す
植山へまだまだそっぽ向く気力

和歌山市 堀 富美子

山並の変らぬままの過疎に棲む
はやる心見透している砂時計
婚約指輪何故か気になる薬指

尼崎市 桑原 東園

職離れ晴耕雨読五年経ち
尾瀬の山五年がかりで踏破する
目標はあと二十年父越える

大阪市 江島谷 勝弘

気障っぽく帽子を脱いでご挨拶
客を待つ数字バズルが決まらない
駅名を元気に告げる縄電車

大阪府 西藤 次男坊

そして朝雨が楽しく降っている

そして朝見ないテレビを点けてみる

そして朝このまま此処で暮らしたい

大阪府 神野 千恵子

意地っ張り一つになって担ぐ山車

薬などつつかい棒にして今日も

物言えぬ国から言わぬ国となり

大阪府 坂 裕之

歳なりに出来ることあるお手伝い

孫と行くラジオ体操夏休み

惜しまれて太郎と女将にこやかに

大阪府 橋村 容子

母として単身赴任気にかかり

痩せたいがソーメンばかり食べられぬ

ポランティア公園掃除で一汗を

大阪府 畑中 節子

時鳥うぐいす朝ののど自慢

山辺川蛍乱舞のルミナリエ

真の闇これが我が世とヒメボタル

大阪府 澤田 定子

虫つかぬ衣服すべて中国製

吉相と言われ気長く福を待つ

綺麗好き一緒に暮らす窮屈さ

大阪府 小栢 こずえ

通る度ガソリン価格チエックする

もう少し美人だったら似合う服

老いてなおお洒落がしたい新品きんぴらが好き

大阪府 太田 としお

資源だと思えば平気ゴミの山

吸いませんタスポなくても平気です

平気平気そばにはいつも妻がいる

大阪府 吉川 弘泰

こおろぎの鳴くのを待つよ月明り

ドリンクの力を借りて秋ゴルフ

寂しいよ秋の夜長のひとり酒

大阪府 田浦 實

雨に濡れ涙隠した時もある

井戸端のおしゃべりが生む助け合い

さわやかに朝の散歩が常備薬

大阪府 高木 道子

甲斐のない化粧帽子でカバーする

茨道いつか薔薇色夢に見て

閉店の旗威勢よく風に乗る

大阪府 吉内 タカ子

九条の価値を噛み噛み一人旅

走馬灯亡兄祥月に逢にくる

この暑さ汗に流そう灰汁も抜け

大阪市 西川 冷子

三田市 阪本 藤朗

認知症悪態だけは忘れない
収穫に追われ嬉しい悲鳴あげ
生きている百足を運ぶ蟻二匹

大阪市 寺井 弘子

竹トンボ飛ばし夢見た少年期
半額の魔術にかかると人の列
夏よ来い今年の水着買ったから

堺市 萩野 像山

死に際の粋な言葉がまだ湧かぬ
人前で躓き笑うほかはない
五月雨に濡れて紫陽花なまめかし

堺市 近藤 治子

お喋りの輪の中にいて孤独なの
他愛ない孫の喋りに癒される
里帰り喋り続けて姉妹

茨木市 島田 誠一

同情のかけらが刺さり踏み出せず
背伸びして無理やり開く五輪劇
まだ帰宅せぬ娘に茶の間さわがしい

三田市 辻 開子

あの上のと友の名前が出ないまま
ゆうゆうと優先座席鏡開け
プランター夏の野菜も暑さ知る

二度三度妻が着替える旅衣
老人会食べ放題の旅は避け
エコの二字重く受け止め手に団扇

三田市 福田 好文

足かせが取れて歩幅が広くなる
故郷へ着いた途端に訛り出す
先細の靴に小指が妥協する

羽曳野市 福田 悦子

ふるさとの太鼓の音が残る耳
ふるさとの自慢が並ぶ道の駅
暑中見舞メールの方がいいように

羽曳野市 仲谷 真一

世界新水着が決めてしまうとは
エコな人ケチな人とはちがいます
暑かった夏と言え日待っている

羽曳野市 森下 一知

ひとり旅地図をはみ出す好奇心
戻らないプラスチックの竹とんぼ
身ぎれいに洗い直した再生紙

羽曳野市 宇都宮 ちづる

チルドレン党に人生左右され
六人の大人を和ます孫一人
気がつくど姑の仕草に似てきてる

羽曳野市 松本静子

蛍舞う古里恋したずねよう

この夏も猛暑日つづくのやろうか

この地球を皆で守ろう温暖化

高槻市 笠原乃りこ

この鼻の低さも神の思し召し

知ったかぶりより愛されるおバカキャラ

祇園祭はしゃいで京の夏がこせ

高槻市 安田忠子

雨もよし苦むす庭にひとり立ち

良い話飛んできたのは雨上がり

赤とんぼまた六月に見る不思議

高槻市 片山かずお

ベテランと煽てられてるご老体

初恋が蛍火になり空に舞う

メール打つ指がサンバを奏でてる

生駒市 小西稔

野に山にデート楽しむ笑い声

梅雨晴れに小鳥もデート楽しそう

遍路道同行二人良いデート

八尾市 松葉君江

筋通す母の答えに迷いなし

叱られる事が子供の宝です

無駄骨もつもり積って血や肉に

八尾市 田邊浩三

肩書が付いた名刺の深呼吸

わが家にも少子化がきた孫一人

死ぬまでに裁判官になれそうだ

八尾市 西川義明

血の滲む苦勞語らぬプロの顔

若い日の血潮が騒ぐ愛一途

学校や社会じゃないよ嫉だよ

八尾市 笹倉ひろし

朗らかな酒で仲間がすぐできる

アユ遡上ガソリン上がる夏日かな

リバウンド腹のゴム跡深くなる

八尾市 寺川はじめ

裏庭を掘る夢を見る原油高

振り向けばまっすぐだったはずの道

偽りの去年の文字がまだ生きる

八尾市 脇俊子

来し方を反復しだす歳になる

眠れない悩みの元が老化とは

信頼の鎖ひとつが外れかけ

枚方市 二宮紫鳳

から梅雨に不快指数がヒートする

湯上りのうなじに香る夏衣

幸せと思う心に幸が来る

枚方市 小川 良吉

童謡も演歌も雨が深み出す

カラオケで懐メロばかり歳がばれ

温暖化にほんの四季があやしいな

枚方市 坂本 ミヨノ

貴男と私愛本当か嘘なのか

陽の下でひまわり咲かぬ反抗か

対茶碗壊れゆつくり時代去る

豊中市 松尾 美智代

条件をゆるめて見えてきたあかり

条件はひとつやさしい人がいい

うかうかと還暦の山越えました

豊中市 藤沢 長一

老夫婦どちらかが消すトイレの灯

追い越され赤信号でまた横に

散歩道毎日逢うと声かかる

豊中市 源田 啓生

父という我が存在の日がありき

今日もまたお辞儀人形並びよる

夏帽子少女の汗が清しいな

河内長野市 針生 和代

細い脛齧りつくして子は離れ

半額に迷いに入る試着室

医者の一言元気を出せる安定剤

河内長野市 内海 綾乃

ストレスを解消しよう笑いましょ

一度でいいホテルの乱舞見てみたい

国産は手に入らぬよ土用品

河内長野市 木太久 正一

波瀾万丈ひとそれぞれの努力見る

地藏当番終えて地域の人になり

大阪の色に染まって半まだら

河内長野市 黒岩 靖博

病身の私あなたを介護する

覚悟決め自分の代で幕を引く

大特価いつも幟が立ち並ぶ

河内長野市 宮守 正博

椅子蹴つただそれだけで後がない

油断すなその内くるぞ妻のテロ

離れてもついてきたのは影法師

寝屋川市 小嶋 みさと

検査終えやつと一歩が踏み出せる

締切日土俵あるこそ物になる

脳トレに読み書き語る老春だ

寝屋川市 岡本 勲

栄転のチャンス逃がした無札講

生きる意欲天引きされた高齢者

解く道を見失ったか拉致問題

藤井寺市 増井 ヨシ枝

吹田市 藏田 光子

公園の時計は五時のまま夕日

友達と一夜語らう旅の宿

一本道自慢話が向うから

姉妹で気楽な旅の時刻表

百合一輪ハンサムタマの化身かも

誘われてすこしとまどうピカソ展

藤井寺市 俣野 登志子

富田林市 古田 千華

海はもう見るためのもの浜育ち

老いふたりしみじみ過去や先のこと

七夕に孫の幸せ託します

蓮の葉で味わう酒は花の寺
切株にいのち煌めく炎天下
お豆腐があれば喜ぶ酒豪です

門真市 矢阪 英雄

泉佐野市 備後 三代子

川が吠え山野の乱れいましめる

先人の伝えた土に種を蒔く

天を突く杉の頂鳥家族

塩加減忘れたわたしどないしよう
人の世の落差烈しい暮らし向き
雨の夜をひとりですこすロゼワイン

箕面市 寺井 柳童

藤井寺市 伊藤 アヤ子

似ているが微妙にちがう県民性

写真帖いつも真ん中母の顔

半分こさつと手が出る次男坊

人の手は思う所に届かない
年金の見直し出来た特別便
機械より早いな母のみじん切り

篠山市 谷田 多美子

奈良市 岩本 浩二

カーナビにない道をゆく息子にあわす

夏の陽が沈む彼方へ老友も逝く

友の訃報其の時団子食べていた

遺言書尽くしてくれた礼も書く
骨抜かれへなへなへなと半世紀
大ジョッキ駄目ならメタボのままでもいい

岸和田市 中岡 香代

奈良市 尾畑 なを江

常識のない秀才の知恵袋

湧き水も飲まずボトルの水を飲み

大さじの一杯だけにワインあけ

笑ったら一日寿命延びそうで
軽々と頷いたのが苦の始め
雑草が根性だよとつぶやいた

奈良市 田中賢治

当て馬でタバコ千円アドバルン
ダイエツトソフトクリームご褒美に

唄仲間テープの唄が見舞状

奈良市 阿部茶々

空海の型にはまらぬ書に引かれ
思い込め時も刻んで刺す刺繍
軽々と孫に背負われ誇らしい

京都市 清水英旺

窓開け放ちまどろむ風の中に居り

また一人悲し同期の桜逝く

野菜売りの姥ののどかな朝の声

加東市 黒崎美紗子

くじ運のなさ四等が三回も

枇杷の実が豊作合図する鳥

一晚で胡瓜見事にぶらさがる

加東市 安達厚

もう予定ないけど生きてゆくつもり

夏の畑朝夕だけの老夫です

線香立て今日の予定を告げておく

山鹿市 阿部ミツ子

テレビ見て涙こぼるる風情有り

腰痛めテレビで見てる花菖蒲

田植すみ大合唱の蛙かな

橋本市 石田隆彦

鉛筆の代りにナイフ持つ魔の手

一獲の後にはきつと深い淵

原油高旅は机上で黄昏れる

静岡市 渡辺芳子

ひざ痛むひきずる足にカラス鳴く

こんなにも猫の可愛さ知る八十路

DVD世界遺産の旅に出る

取手市 葛西清

朝顔の元気を貰う月曜日

言い訳が上手な時のある夫

夫の加齢わがままと比例する

横浜市 巖田かず枝

しあわせか犬に時々聞いてみる

しあわせだ同じ物差し持っている

座ることまず考へる歳になり

横浜市 金森徳三

梅雨寒を想定内の置炬燵

お醤油とソースの色を替えて欲し

生きてますオリンピックが見られます

東京都 井上つよし

まず反対対案はまだ見つからず

颯爽とプールへ実は歩くだけ

血も汗も惜しんで国は守れない

堺まつり協賛 秋の誌上川柳大会

投句料 1000円

投句締切り 10月10日 (消印有効)

用紙 所定用紙又は便箋2句ずつ(4枚)
(無記名・番号で整理)

題と選者 各題2句

「ひみつ」	山本希久子 鈴木公弘	共選
「運」	鴨谷瑠美子 北野哲男	共選
「宝」	西出楓楽 三宅保州	共選
「いのち」	奥田みつ子 河内天笑	共選

投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会
Tel fax 072-278-4706

年金で天引きと言う手を覚え
卵もう産まないとり餌をやる
医療費が本当に返って来る通知
肉よりも魚を好むのも歳か
ライバルに薬一本を貸すゆとり
暖衣飽食もう野性には戻れない
この人生やり直したい事ばかり
良い年の占い信じ生きてみる
今の世は愛がどこかにかくれんぼ
花が咲く地球の不思議花香る

(先月分)

静岡市

渡

辺

芳

子

札幌市

三

浦

強

一

佐渡市

高

野

不

二

「美と川柳V」観月の夕べ

と き 9月15日(祝・月)

と ころ 兵庫県立美術館

(電話078-262-0901)

宿 題 「恋」 中井 昭子 選
「音」 古川 奮水 選
「踊る」 森中恵美子 選
「月」 村上 氷筆 選

席題なし 各題2句 欠席投句拝辞

受付開始 13時30分 美術館1階

(句箋と美術館入場券をお渡し致します)

投句締切 15時 句会 15時30分~17時

月見の宴 17時30分(館内レストラン)

会 費 4000円 美術館観覧料・句会費
月見の宴(シルバー割引適用のため生年月日お知らせください)

申 込 先 中井 昭子

〒651-1123 神戸市北区ひよどり
台2-2-62 (TEL078-743-6072)

主 催 兵庫県川柳協会

せんにゅうぐるーぶ GOKEN 第七回 誌上川柳大会 作品募集

◎ 題・選者 (何組でも可)

「交」

門田 澄江(松 山) 第2回大会優秀者
国方 艶子(高 松) 第2回大会優秀者
高橋 宏臣(松 山) 前回大会優秀者
木本 朱夏(和歌山) 川 柳 塔

「雑詠」

渡部光一郎(松 山) 歌誌「遊子」
堀本 吟(生 駒) 俳誌「豊」
樋口由紀子(姫 路) 第2回大会優秀者
前田 一石(玉 野) 川 柳 玉 野

◎ 締切り・発表 9月20日 11月発表誌送付

◎ 投句料 1000円

投句先 〒791-0212 東温市田窪1976-17
野口三代子方 川柳大会係宛

◎ 問合わせ 原田否可立 TEL089-932-3765

ペットものがたり

(順不同)

猫、名前は

まだある



水野黒兎

川柳人はペット自慢の句やペットが愛らしいなどという句は決して詠まない。当り前のことは詠まないのである。エッセイでも同じことであろう。というわけで、自慢は書かずひたすら飼猫の名前の話である。

飼い始めて今年で十年目、キジ柄のメス。漱石の猫は「名前がまだ無い」のであるが、我が家の猫の名前は一応「にゃんこ」である。一応というのは他にも名前をいっぱい持っているからである。近所の本田さんは勝手に「みーちゃん」と呼んでくれる。にゃんこは飼主には聞かせたことのない甘い声でにゃい

んと応える。

「にゃんこ」とはまた何の風情もない名前であるが、これは我が家伝統の名探検法なのだ。娘が小学生の頃に飼っていた小鳥は「とりビツビ」であったし、息子のモルモットは「モルモちゃん」であった。即物的なのである。

猫の分際で飼主を突然に噛んだりするからにゃんこは「ギバちゃん」とも呼ばれる。出処の不明な猫なのでどら猫をもじって「アレクサンドラ」とも呼ぶ。フンといった顔で仕方なさそうにちよつとだけ尾をふって応じる。いつもは猫らしく孤独を愛するののに、時々妙になつて人にべたべたするので、そんな時には「べたちゃん」と呼ばれるのである。

紫陽花の時期に我が家に来たので、あじさいと冬のソナタのヒロイン「ユジナ」を合体させた「あじな」とも呼んでみるがあまり聞

心を示さない。

将来病院に連れていく時に、患者名が水野にゃんこでは恰好が悪いのではないかと妻は心配するが、「さゆり」とか「スザンヌ」とかの柄でもないから、当分にゃんこを主体に、折々に適当な名前と呼ばれる暮しを続けることであろう。

オトーサンと

あたし



穴吹尚士

あたし、自分で言うのも何だけど美人の猫で、キューちゃんと呼ばれています。一九九九年の暮れの寒い日に、家の玄関のポーチで悲しそうに啼いていたのだそうです。

両手で掬うように拾われて、ミルクをお腹一杯に飲んで、毛布を入れた紙箱でクワクワ寝たそうです。

もうすでにジュン兵衛という十歳に近いおばさまが居たので、外出から帰って来たオカサに反対されたのですが、オトーサンが押し切って家の子にしたのだそうです。

九九年に来たのでキューちゃんになりました。この辺のことはもう少し大きくなってか

ら、オトーサンに聞きました。

だからあたしはオトーサン子で、もう九歳になるのですが、今もオトーサンと一緒に寝ます。冬はお布団にもぐりこみますし、春は掛け布団の裾、初夏になるとオトーサンの横にタオルケットを敷いてもらって伸び伸び寝ています。一日に一度はオトーサンの腕枕で横になり両手で胸を揉み揉みます。あたしが母親を覚えていないのでその代わりだろうとオトーサンは言って、胸を貸してくれました。あたしはお転婆で家の庭から他所に出かけて行って、怪我をして何度もお医者さんで手当てを受けたら、入院して手術をされたりしてきました。

一昨年の夏に、私は口内炎がひどくなって水も飲めなくなり、お医者さんで猫エイズに感染していると診断されました。それから毎月一回、口内炎を抑える注射をしに通っています。

私に優しい良いオトーサンですが、昨年の一月から浮気をはじめました。寒い朝の庭で白い赤ちゃんがピーピー啼いていて、家に入りたいオトーサンは「この仔が死ぬまでずっと生きていて面倒をみる自信がありますか」と、オカーサンに反対されて野良に返し、ご飯を上げるだけにしたのです。どこかの物置

に住んでいるようで、私と同じように避妊手術してもらい、毎朝毎晩ご飯を食べに来ます。イチヤイチヤしていると私は妬けるのですが、今のところ見て見ぬふりをしています。ジュン兵衛は数年前に亡くなり、生前に爪を研いでいた庭の木の下に葬られました。あたしも死んだらこの木の下に埋めて貰おうと思っっています。

今オトーサンは、パソコンで私のあれこれを書いていきます。私はそれを横で寝そべって薄目で眺めています。そして、こんな日がつつと続いてくれるようにと願っています。

愛犬

バロンの回顧



鴨谷 瑠美子

十五年も前のことですが、生まれて四十日目到我が家に来たときは、縫いぐるみのような感触のゴールデンリトリバーの雄でした。名前はバロン。マニュアル通りに育てていました。ドッグフードと肉の缶詰とカルシウムの粉を混ぜて一日一回の食事。みるみる体重は38Kg、じゃれてくると倒されそうになる位。その頃の句

肉付が虎そっくりな犬を飼い

衣がえの季節には丹念にブラッシングをします。綿毛でクッションが出来るほどの量です。特に胸の飾り毛はふさふさとしてボールを追うて走ると毛が靡いていました。散歩は力が強いので大変でした。散歩から帰ると昔少年がしたように蛇口から水を飲みました。蛇口から直接飲みたい犬である

夏の間はシャワーでシャンプー、大喜びで気持よい顔をしていました。

一応のしつけは出来ていたし、「待て」「伏せ」「お手」は得意でした。お手のおかわりを何度もさせると時には

他所見してお手する犬は妻に似る
こんな句も出来ました。

庭に放していたので好きなように暮らしていたのですが、たまに吠えることもあって何を言っているのか、犬の言葉が解るパウリングガルを買って来て聞いたりもしましたが、遊んでほしい遊んでほしいと甘えていたのです。

放し飼いの犬には犬の庭の良さ

十五年間楽しい思い出いっぱい残して眠るようになつてしまいました。獣医さんは大型犬の十五年のデータはないけれど、人間の年齢で数えると百歳くらいだとおっしゃいました。八月十六日がバロンの命日です。淋しさがやつとつうすらいだところですよ。

イケメン

ロツキー



田中みね

「未来も学校でいろいろ有るらしいけど頑張っているんで、せめて大好きな犬を買ってやりたいと思ってるの」と娘からの電話。室内犬と聞き旦那は余りいい顔をしなかつたが、反対できず「飼うからには責任を持つてだいじにしてあげなさいよ」と話す。

やがて娘一家の一員となつた「ロツキー」。種類は「ボメラニアン」いっちよう前に血統書付きとか。これと言って芸はしないけどどこからか「それってみねさん貴女に似ているんじゃないの」というお声があったような……。当たっているだけに返答のしようがない。間もなくして我が家に顔合せにやつて来た。まん丸い目。ひと言でいってまるで縫い包み。動物好きと判るのか私の腕の中で安心したように目を細くして甘える。

娘いわく「泰志君が仕事へ、子供達が学校へ行く後姿を窓から身を乗り出すようにして、どうしてボクを残して行くの、ねえ何故

なぜ?と訴えるように淋しい声を上げて啼くという。あとは特別動物好きでない私と二人つきり。食事の催促の時だけ足下へ纏い付く。他は只の同居人やで。それともう一つ聞いて、今朝洗面所で歯を磨いていたら、ジーパンを履いていたので泰志君と思つたのか尻尾を振りふりしていたのに、私と目が合った途端しつぽを振るのを止めたのよ、これってどう思う?」これには思わず笑つてしまつた。

何とか言いながら娘も結構かわいがつていゝるんだわとどこか安心した。電話の向こうで首輪の鈴の音が、遠くなつたり近くなつたり、ロツキーの可愛い仕種が目につかぶ。今ごろは娘婿や孫達が帰り、全身を毬のように弾ませて喜んでいるであらうイケメンの、ロツキーのことを想像しながら一筆認めました。

シロ



西出楓楽

「蛇」

長すぎる ジュール・ルナール

『博物誌』にある世界で一番短いやつとされている詩である。無駄な言葉を極限まで省き、

蛇を実在の確に表現していると思う。その蛇が私は気味悪くて大つ嫌いなのである。好きと言う人はそう多くはないと思うけど、嫌いな上になぜか怖い。

それがこともあらうに、八十センチもある白蛇が五月初めにわが家へやつてきた。五年生の孫が親にねだり、インターネットで注文して取り寄せたとの事。おおかたテレビでも見て興味を持ったのだろう。

私の拒否反応をよそに、白蛇はシロと名付けられ息子一家のリビングの隅で飼われ始めた。ちなみにわが家は階下と二階の二世帯住宅だから、私は息子宅に行きさえしなければシロに会わなくて暮らせるので、その点は助かっている。

で、その飼育方法だが、透明のプラスチック容器に入れて普段はストレスがかからないようにそつとしておく。餌は五日に一度、小さな鼠の冷凍を湯煎で人肌にし、あたかも生きてるようにひくひくと動かす。するとびつくりするほど大きな口をあけ、パクツと食いつき丸呑みにする。――ただし、何分私は一度も見たことはないし見る気は更々にないので、あくまでも聞いた話である。

「可愛い顔してるから見に来てよ」
と皆は勧めてはくれるが、この歳になつて

体に染み付いた蛇嫌いは抜けそうもない。

「白蛇は神様のお使いやから大切に飼いなさいよ」

などと今では仕方なく理解のあるふりをしていいる。広辞苑によると白蛇は「家に福祿をもたらす」とある。ま、いいか。会うつもりはないけど、シロちゃん元気であうんと長生きしてね。

どこまでが首かと蛇も思案する 薫風

夕 日



松本文子

タローにジロー、小太郎、テツ、フジ……過去に飼っていた愛犬の名をあげれば切りがない。血統書付きの甲斐犬、紀州犬、シベリアンハスキー等々、三十匹以上。夫は我が子より可愛がっていた。

時代は代わってそれらの犬たちも、天国で夫と遊んでいることだろう。

孫たちも犬を欲しがったが、娘が大の犬嫌い。それで兎を飼うことにした。緑側で小さな檻の中に、砂、水飲み、餌、すべて市販されているものを用意する。

兎といえば白く長い耳、赤いお目目と思っていたら、びつくり。茶色の耳は大きくだらりと垂れ、二本足で立ち上がりジロリと私を見る。洋服を着せれば絵本のピーター・ラビットに似ているだろう。

兎はおとなしいと思っていたのに、自分で扉を開けて時々脱走する。何やら私のズボンを引っ張るものがある。何だろうと見ると兎だ。「コラーツ」と追いかけるが脱兎のごとし。(やはり兎だ。)

おまけに五十センチくらい飛び上がり、急転回する。捕まえようとする私の指をガブリ。何たる兎か！お前の先祖は何だ！私も蠅たたきで応戦する。無事、小屋に追い込んだ時はどちらも疲れ果ててフーフー。

ペットはやはり犬がいい。夕焼けの湖岸を犬と散歩は楽しかった。夕日といえば出雲で見える夏至の夕日は、北半球で一番美しい夕日である。遠くは和歌山の日ノ御崎から一直線に出雲大社の真上を通り、日御碕神社(日沈宮)に没する。

我が師、故尼緑之助先生の句碑「灯台の夕日神話を抱きよせる」の側で、朱夏さんがその美しい夕日を見たい、と言ったことがある。彼女と何回か足を運び、ホテルで待機したのが折悪しく梅雨季。北半球で一番美しい夕日

は、遂に彼女にその姿を見せなかった。

六道湖に沈む夕日を見ながら、私の人生を慰めてくれた愛犬たちや、川柳にかかわる絆を懐かしく思い出している。

命拾いした猫



三宅満子

我家にはベルシャの牡猫がいます。名前はセワシ、皆んなはセーちゃんと呼んでいます。彼は阪神大震災のあった一月十七日の朝、妊娠中の母猫が危険を察知したのか、飼主の家から出て逃げまわり行方不明になりました。

飼主が方々探し、貼り紙をして二十日後にようやく汚れてボロボロの猫を見つけ出し、二月五日に帝王切開で出産しました。三匹が無事で残念ながら二匹は死産でした。助かった小さな三つの命、是非一匹もらって可愛がって欲しいと言われて育てることにしました。生後一ヶ月半、手のひらに乗るくらいの子猫が神戸から我が家に来ました。

ページでふわふわの縫いぐるみみたい。我家は息子二人が常々、犬・猫・亀などペットを何か飼ってる家でしたからすぐに慣れて

くれ、特に二男は私の入院中など大学生でしたので東京まで連れて行き、面倒を見ていました。男の子は思春期には親と対話がなくなりませんが、猫が潤滑油になつて会話が有り、随分助けられました。

あれから十四年、すっかり我家の主となつてのびのび暮らしています。やんちゃですが病氣もせず元気です。この子の温もりがいっぱい幸せと癒しをくれます。いつまでも長生きして皆んなの傍にいて欲しい。阪神大震災と共に育つた猫、忘れられない思い出です。

震災を越えて・

私はミー



亀岡 哲子

私はママを探してヨチヨチと道路へ出て行つた。車が止り大学生のお兄さんが優しく抱き上げてくれた。家に着くとお母さんも、もう一人のお兄さんもお父さんさえもニコニコと笑つた。尻尾はトラ、体は三毛、顔は片目パンダだ。少し大きくなるとお兄さん達は紙袋を被せたり、ほり投げたりメチャクチャだ。負けてはいられない。棚の上から突然肩に飛び乗つたり、蟬やかげや鳥を生きたままお

土産に持つて帰つて驚かせた。

お兄さん達は結婚して出て行き、私は外へ出る事もなく静かな老後を送つていた。

平成七年一月十七日早朝のことである。ドーン、グラグラと布団の中でお母さんに抱かれたままベッドごとずるずると滑つた。家はギーギーと軋み、難破船の船底で揺れているようだった。お兄さんに引き取られる事になつたけれど、すぐに懐かしいベッドに戻り昼も夜も動かなかった。餌と水を運んでくれたが若い猫が来て食べてしまうので、とうとうお兄さんの奥さんのベッドに移つた。

新しい家が出来、私は早速お母さんのベッドに戻つたので、奥さんは「あんなになつてくれていたのに」とホロリとした。

ある夜、胸に強烈な痛みを感じ声も出さず部屋中を走り回り、壁をよじ登つて駆け落ちた。お母さんがサツと掴まえてギュッと強く抱きしめてくれた。私は静かにオシッコをして落ち着いていつた。心筋梗塞とかが起つたらしい。その後も暫く長らえたが、いよいよ弱つてきたので、お母さんはベッドにそつと寝かせたまま下りて行つた。私は後を追つて布団から抜け出す形で力尽きてしまつた。

翌日の日曜日、お兄さん達の家族もまじえて総勢九名で山の霊園に行つた。

亀岡ミー号 享年二十四歳

お坊さんは長生きも珍しいが、こんなに大勢で来られるのも珍しいと言われた。

みんなは順番にお焼香をしてゴーンゴーンと鐘を撞いた。その音を聞きながら「本当に幸せだったなあ」と思い天国へ旅立つた。

錦花鳥



太田 扶美代

錦花鳥というあまり、知られていないが、名前の通り美しい鳥がいる。

まだ私が十代の頃だった。6歳下の弟と小遣いを出し合い一羽の小鳥を買つて来た。四国から上阪したばかりで母達とも離れ、友達もない状況の中できつと、二人共淋しかったのだろう。

弟は学校から帰るとすぐ鳥籠から出して、小鳥を肩に乗せたり、頭に乗せたり、腕渡りをさせたり飽きずに遊んでいた。

それをカメラに撮るのが私の役目だったらしく、弟と小鳥の写真は今も私のアルバムにたくさん残っている。とてもよくなつて、近くの商店街に連れて行く時もあった。

それが錦花鳥との出会いだった。

大阪に住む妹夫婦が「姉ちゃん、この子飼つてやってエー」とハイライトの箱に入れて小鳥を持って来たのは、もう三十年も昔の事で、オフイスの窓から飛び込んできたらしい。手を入れると、サツと乗ってきたし、元の家では手のりだったらしく、放し飼いをするのに一ヶ月もかからなかった。

人間の髪が好きで、私の髪を引っ張ったりついたり、もぐつたりしてよく遊んだ。家出も、何度かあったがすぐ戻ってくる。一日の大半はカーテンの中に隠れていた。

あの日から錦花鳥一筋で多分もう、七代目ぐらいではないかと思う。

人間の居ない所で、冬でもよく水浴びをしていたのはこのビー太郎だけだった。

特徴は何と言っても細い真つ赤な足だ。嘴も同じ色で、片手ですっぽり包めるほど小さく、胸には細かい白い水玉模様がある。夜、巣箱に入れると朝まで眠る。

二年目を迎えた頃、ビー太郎が淋しくはないかと、二羽の雌を買って来たのだが……。一羽はタイ産で気候などの差で、華奢で弱いけれど美しい。一方は国産で体も大きいし、頑丈そうだが、美しくはなかった。

ペット店で取り寄せてもらった事もあるし強さで選ぶか、美しさで選ぶか、私も決心がつきかねて二羽飼う羽目となり、実に様々のドラマを見せてくれたのである。

愛犬を抱いて



清川 玲子

子供達がまだ小学生の頃、迷い込んで来たポメラニアンの小犬を我が家で飼うことになった。預かっていることを警察で聞き、犬を受け取りに来た飼い主の好意ある申し出でだった。「飼つてやってくれますか。」

茶色のフサフサとした毛に丸い大きな黒い目。当時では珍しい高級犬に、生来大好きの子が子供達より一番喜んだ。

小鹿のパンピに似ていることから「パン」と名付け、日毎に可愛さを増していった。が獣医にもよく通った。その都度、幸いなことに大事には至らず、部屋の中、庭でも元気で走りまわり、パンのおかげで心なごむことも多かった。

春休み、一家で外出先から帰ってくると、迎えにとんでくるパンの姿がない。暗くなっ

た庭先で倒れている。裸足のまま庭にとび降り抱き起こしてみると息はしている。目もあいているが、もがいても自力で起き上がれない。不安で眠れぬ一夜を明かし、翌朝、子供と動物病院へ連れて行った。医師も首をかしげ、「頸椎に異常があるようでちょっと治療は無理なんや」と言われた。愕然とする私達に、みかねた医師が岡山の総社市に詳しい獣医師が居るそうで連絡を取ってくれるとの事。しかし私方の都合でやっとならなかつた。手頃なダンボール箱に空気穴をあけ、犬を入れ、国鉄で手荷物札を買い、水分補給にヤクルト瓶にスポイトも添え私一人で出かけた。エサは私の手で喉の奥に入れてやると食べていたのでまだ元気で、排泄物はおむつで取っていた。

連休で賑わう連絡線で宇野に渡り、総社駅に着く頃には雨が降りだした。やっとならなかつたが白髪の医師は「今まで生きて居るのは行き届いた世話があつてこそで、このまま静かに見て上げなさい」。もう少し早く連れて来ていればと私は自分を責めた。帰りの車窓からは、はげしくなった雨に木々の緑が一そ

ふと動きの止まつている箱が気になり開け

てみると、不安げに何かを訴える黒い目が見上げています。スポイトで与えるヤクルトをおいしそうに飲み干す。いとおしさがこみ上げてくる。生あるものはいつかは消えてゆく、落ち込む自身はげました。

秋風が立ちはじめたころバンは静かに私の腕の中で死んでいった。その後も、幾度か犬との出会いと別れがあったが、あのゴールデンウイークのバンとの辛い思い出が三十数年たった今も脳裏からはなれない。

メダカの

つぶやき



古久保 和子

ボクメダカのクロちゃん。住まいは由緒あがりな壺。どうやらボクたちの飼い主のお母さんが生前、梅干しを漬けていた常滑焼きの壺らしい。

生活環境はあまりよろしくはない。路地の一隅のたくさんの植木鉢の間に置かれ、見上げればビルの谷間の細長い空が見える。時々野良猫がボクたちを覗いて、その上ペロペロと水まで飲んで行く。食事は時々、上からバラバラと降ってくる。

かつては黒いや赤いの白いのなど、大家族で賑やかに楽しく暮らしていたんだ。飼い主がいれてくれたホテイアオイに、バートナーが卵を生み付けたこともあったけど、今はもう二匹となり暮らしてもマンネリ。メダカの世界にも少子化が忍び寄っているらしい。

そうそう今年の春に、小さな仲間が入ってきた時のこと。ピチピチ若い彼女に嬉しくて、追いかけてたりつついたりしているうちに、ついうっかりとバクリとやってしまった。主からこっぴどく叱られてしまった。

飼い主は「ペットとは愛玩動物とのことだけど、アンタたちは私と運命共同体の仲間だよ」って呟いていたのを、ボクは聞いてしまった。メダカ冥利につきるってもんさ。

うちのマリー嬢



森田 明子

芸のない犬で我が家に合っている。平成十八年度の川柳塔賞を戴いた時の一句である。姉に「身近なものを五七五で」と教えられ、これでも川柳かなあと半信半疑で作ったものだ。初めて投稿し、掲載された時は

本当に嬉しかった。

シエルティーの十一歳の雌、名前はマリーという。トイレと「待て」の躰だけで、正に無芸大食であるが、彼女にしてみれば、「こんな犬に誰が育てた」と文句のひとつも言いたいところだろう。

夫婦二人暮らしの私達の一日は、彼女との散歩で始まり散歩で終わる。少々風邪気味でも彼女の期待に満ちた目で起こされると、頑張って出掛けようと思えるし、仕事が終わりに疲れていても、留守番をしている彼女のために、少しでも早く帰ってやろうと、ペダルに力が入る。自営業で忙しい毎日だが、自分より弱いもの世話をするには、活力の源になっていると思う。私は生来の怠け者なので、この、ちよつと無理をするという状況がちょうどよいようだ。

先日、帰省していた子供たちが、私と犬とのやりとりを見ながら、「僕らがどんな風に育てられてきたか、よく分かっておもしろいなあ」と話していた。とんでもない、大きな誤解である。子育ては自立が目標なので、母としての迷いや葛藤が絶えずあった。こんなのにのんびり優しく育てた覚えはない。しかし、子供たちには、いづれ何らかの形で世話になる可能性もある。美しい誤解は大いに結構、ということ、黙って微笑んでいた。

愛染帖

新家 完司 選

河内長野市 針生 和代

自給率上げたいけれど土地は無し

(評) 食料自給率は先進国で最低水準の我が国。少しでも自助努力をしようと思うのだが残念ながら猫の額ほどの土地もない。

黒石市 相馬 一花

贅沢な人た雑穀食べている

(評) 昔は米の代用として食べられていた稗や粟や黍などの雑穀類。健康ブームに乗って「雑穀米」としてカムバックしてきた。

篠山市 円増 純子

惜しみなく伝えておこう褒め言葉

(評) 陰で悪口を言うのは簡単だが、面と向かって褒めるのは難しい。しかし、世辞ではない心底からの賛辞を惜しむことはない。

堺市 奥 時雄

死んだなら酒のせいだと言われそう

(評) 「よく飲んだからネー」「もう少し控えておれば…」と言われるのは当然。だからといって、控える気も止める気もない。

横浜市 金森 徳三

自分の句忘れて同じ句を作る

(評) 誰しも似たような経験をしている。「見たことがあると思えば…」と気がつくうちには良いが、次第に判断がつかなくなってくる。

鳥取県 竹信 昭彦

暑くてもカレーは熱いうちに食う

生きる意味など考えていた昔

大阪府 萩原 大朝

スビードを忘れ愉快な旅にする

職下りて路面電車に合うリズム

唐津市 市丸 晴翠

老眼鏡と辞書が肩寄せ待つ机

天引きの残りて暮らすお献立

岸和田市 井伊 東吉

その内に鳥賊まで時価の鮭となる

ああ暑い今年も何度言うのやら

豊中市 安藤寿美子

傘寿すぎ末期の水を持ちあるく

省エネを考えなさいコマロシヤル

紀の川市 辻内 次根

贖罪にインク再生品を買う

高齢者みな焼き尽す油照り

鳥取県 石谷美恵子

忠実に短所を継いだ蛙の子

キャリアガールの目にくたくたの男たち

吹田市 穴吹 尚士

老いたれどドナーカードを持ち歩く

東京都 岸野あやめ

メールなどせず眼を見て話すべし

例文が下手なねんきん特別使

藤井寺市 鈴木いさお

今日こそは飲まぬと思う朝もある

豊中市 吉田あずき

横着が考え出したワンタツツ

豊中市 吉田あずき

食いだんだ指輪ベンチでぶつちぎる

(評) リングが縮んでしまった、のではないと思うが…、いつの間にか指が痺れるほど。かくなるうちは「ぶつちぎる」しかない。

権原市 安土 理恵

妻臥せて朝からメシのことばかり

(評) ワイフ依存症もかなり重症。このようなことにならないように、飯の炊き方や料理の基本ぐらいは会得しておかなければ…。

浜松市 岡田 史郎

ぞうり虫どんな役目があるのだろう

(評) 生物すべて、何かの役に立っていると考えるのだが「何の役目？」と首を傾げるのもいつはい居る。我々になんげんも、であるが…。

西宮市 牧淵富喜子

まだ知らぬ日本語あまた広辞苑

(評) 辞書を丁寧に読むと、自分の知識がいかに浅薄なものか分かる。天狗になりそうなどときは百科辞典や広辞苑を捲ることだ。

豊中市 水野 黒兎

松原市 玉置 重人
禁酒禁煙長生きも楽でない

藤井寺市 高田美代子
食べたい物を並べわたしのパースデー

大阪市 岩崎 公誠
成り行きで生きているので苦勞ゼロ

藤井寺市 鴨合瑠美子
空っぽの頭を根気よく使う

吹田市 早泉 早人
むずかしい事は酒でも飲みながら

熊本県 高野 宵草
補聴器を外して思いきり読書

高槻市 乙倉 武史
傘借りて宿の宣伝して歩く

米子市 白根 ふみ
飼い主に似てきた猫ものんびり屋

欠点を言いあうほどこまで砂漠
階段はわたしの歳を知っている

弘前市 高瀬 霜石
雑草を抜くとどくだみ品ができる

岸和田市 土橋 房枝
香水は微かに香るほどが良い

京都市 都倉 求芽
ワインドーに映ったわたしから逃げる

狭い田で幸せつかむアメンボー
これだけの汗でも減らぬ皮下脂肪

西宮市 藤本 直
神仏俺には少しよそよそし

京都市 高島 啓子
少しだけ飲もうと決める最初だけ

枚方市 丹後屋 肇
雑巾へたまにプリーチかけてやる

本物と偽もの同じ舌ざわり
交番所電話一本置いてあり

後期高齢という生きものでうら悲し
一言が怒涛のように返される

札幌市 三浦 強一
コピーには見えぬとバッグ褒められる

大阪府 森田 明子
プライドが後発薬と言わせない

地下というのを忘れる人の波
メロンよりスイカが性に合っている

海南市 三宅 保州
高原の牛乳まずいはずがない

和歌山市 古久保和子
ふたりだけの秘密洩らしたの誰だ

玩具のラッパ少しミルクの匂いして
おたまじゃくしのシッポはどこへ反抗期

酒癖もだんだん僕に似る娘
大阪府 井丸 昌紀

シドニー 坂上のり子
鍋たたくような騒ぎで着いた孫

香芝市 大内 朝子
老いるとは初体験のことばかり

今治市 渡邊伊津志
小綬鶏に此処で暮らせと諭される

豊中市 荒巻 夢
百円の簾で夏を迎え撃つ

大阪市 西藤次男坊
貯金無し三途の川は泳ぎます

和歌山市 田中 みね
三隣亡まずは階段踏み外す

松江市 三島 浜丘
五欲みな達者で後期高齢者

京都市 三宅 満子
もみじマークつけたら避けてくれますか

三田市 阪本 藤朗
髪切った訳も聞かない人という

迷惑と言えずに犬が服を着る
病人のようにまどろむ無為の午後

羽曳野市 徳山みつこ
妻と一つ分けても足りる氷菓子

身の内に棲みつく虫はわからずや
嚙んでしゃべって認知症遠ざける

羽曳野市 永田 章司
派遣からロボットになる未来の図

和歌山市 根田よしこ
収入に見合う支出の難しさ

老母が言うこれ言うたかと二度三度
夫婦けんか口では勝つが黙つとく

堺市 荻野 俊山

先端技術競うビルにも稲荷さん

お布施見て笛だけ吹いて帰る獅子

松江市 松浦登志子

人間の知恵試される温暖化

絹がよい木綿がよいと平和なり

奈良市 矢野 良一

おでこでも赤チン塗った少年期

せせらぎと緑の風と露天風呂

吹田市 中村十八娘

憎さ増す叩き損じた蚊の元氣

鱧の様骨切りしたい頑固ジイ

大阪市 伏見 雅明

究極の決め手は日本銀行券

フアツションに敏で季節に疎くなり

神戸市 田中 章子

付け爪も楽しみで見える女子ゴルフ

出来すぎてもらい手のない茄子胡瓜

大阪市 古今堂蕉亭

長い足踏せず車内ではたため

香南市 桑名 孝雄

議定書がそれみたまえと言つ猛暑

松江市 川本 晔

トウモロコシ畑で蜘蛛の巣にかかる

弘前市 高橋 岳水

腹回りまでも申告させられる

寝屋川市 籠島 恵子

老犬がそろり横断歩道行く

鳥取県 山下 節子

ケータイが遊び道具になつている

お隣の犬に信用されてない

大阪府 澤田 和重

千の風聞いて命日忘れてる

米子市 青戸 田鶴

無事故無違反僕はペーパードライバー

大和郡山市 坊農 柳弘

まだ見たいものがあるから旅をする

東京都 清原 悦子

有り難く聞いた法話を直ぐ忘れ

三田市 福田 好文

鮎つりを橋から見てる暇な人

鳥取市 有沢せつ子

しわを描きバアバの顔が出来上がる

和泉市 横山 捷也

現実を見たくない日は散歩する

和歌山市 田中 すす

虚と実を書体に見せる墨の色

大阪市 小谷 集一

一つ屋根もくもく行き来さし向かい

東大阪市 北村 賢子

含羞という字も読めぬ子が増えた

藤井寺市 太田扶美代

太陽に背く少女のつけ睫毛

大阪市 津守 柳伸

渋滞は私プールのウォーキング

堺市 志田 千代

西宮市 緒方美津子

夫婦でも笑うところが違います

お祝の会だ嫉妬は捨てて出る

堺市 矢倉 五月

中程の位置でよく飲みよく眠る

鳥取市 武田 帆雀

バーゲン場一巡りしてパン一つ

倉敷市 撰 喜子

少し勘鈍い階段気をつける

八尾市 吉村 一風

マニキュアと線香花火がよく似合う

河内長野市 水谷 正子

なんとなく息が苦しくなる役所

宇都市 平田 実男

香水買う香よりも瓶に惹かされて

八尾市 中島 春江

日除け用ゴーヤ楽しや実が五つ

米子市 小塩智加恵

結論に僕の意見が消えている

和歌山市 喜田 准一

ジーパンも色褪せてから始めて

海南市 小谷 小雪

レトルトとこめんなさいを置いて留守

三田市 北野 哲男

往生際わるいがそれも私流

尼崎市 長浜 美籠

受付にある毛筆という関所

三田市 堀 正和

夏山に思い残して老いゆくか
尼崎市 春城 年代

冷奴どっさり薬味添えて欲し
尼崎市 春城武庫坊

誰よりも好きかも知れぬ冷奴
鳥取市 福田 登美

見舞わないこともわたしの思いやり
池田市 栗田 久子

病気まで似るほど仲の良い夫婦
西宮市 片山 忠

菓子折の中はお菓子和限らない
大阪府 米澤 俣子

食べることだけは忘れぬ物忘れ
唐津市 樋口 輝夫

正直な鏡にふつと目をそらす
芦屋市 黒田 能子

天の川下界は異常原油高
鳥取市 近藤 秋星

誉めすぎた拍手拒否する四歳児
海南市 堂上 泰女

廃校のプランコギイと語り出す
唐津市 坂本 蜂朗

いつも通り朝顔の種時きました
大阪市 谷口 義

女房の記憶悔つてはならぬ
堺市 村上 玄也

目を伏せて静脈注射してもらおう
倉吉市 松本よしえ

虫除けのスプレーかけて草を取る
鳥取県 岩崎 和子

お仲間が居るのが魅力医者詣で
河内長野市 坂上 淳司

小雨なら相合傘も乙なもの
寝屋川市 平松かずみ

腰痛が伴侶になって付き纏う
高槻市 富田 美義

大都会わたしを認知症にする
鳥取県 斉尾くにこ

言い訳が先でメタボは変らない
弘前市 相馬 銀波

幸せの尺度違ってきたふたり
和歌山市 玉置 当代

貧乏は気楽遺言なくてよい
鳥取市 岸本 宏章

靴脱いで血の温もりを吸い上げる
大阪市 大川 桃花

ポランテア折り紙ならと手を挙げる
日高市 根岸 方子

折り紙に時間の早いケアの午後
福岡県 林 さだき

怖いからトイレの中で歌う孫
八王子市 川名 洋子

夏祭り大皿小皿よくしゃべる
奈良県 渡辺 富子

欲張つてみても五本の指の中
鳥取県 大塚美代子

気が動く眠れない夜のテレシヨップ
堺市 和田つづや

納得にかかる時間が長くなる
尼崎市 小池 幸子

大原女朝露添えて売りにくる
茨城市 藤井 正雄

真夏日が来たのに蟬はまだ鳴かぬ
和歌山市 福本 英子

夏休み子が風呂洗い申し出る
箕面市 広島 巴子

ぼんやりと青葉若葉の色ちがい
唐津市 岩崎 實

職退いて次の船出へ充電中
阿波市 三浦千津子

馬鹿の壁とお金の壁が通せんぼ
四條畷市 吉岡 修

早起きも化粧も急かすツアーバス
三田市 上垣キヨミ

さそわれりや二つ返事の呑み仲間
寝屋川市 岡本 勲

針の穴すつと通つて今日は晴れ
堺市 近藤 治子

たしなむという盃が止まらない
高槻市 佐甲 昭二

どこもかしこも銭のきらいな人はない
鳥取県 佐伯 やえ

なんやかや言うても妻が一番や
奈良県 岩本 浩二

誹風柳多留一篇研究 37

小栗清吾・伊吹和男

山田昭夫・増田忠彦

山口由昭

清 博 美

266 袖の梅おもき枕をあげてのみ

小栗 袖の梅は、吉原の諸家で売った酔覚まし（江）の丸薬。「重き枕は、重い病気で横たわっている状態。重病で伏している床（日）」。

吉原で、飲み過ぎてダウンした客が、袖の梅を飲んでいる様子。「重き枕」という大病の表現を使ったところがヤマということだろう。

醉なんししたのと袖から梅を出し 四三四
袖の梅のんで上着のま、て寐る 四四〇
全員 賛。

267 花姫のついへをいとぶにくらしむ

小栗 費えは、無駄の出費。むだづかい（江）。

この句は、「厭う」の主語を誰と考えるかによって、二通りの読み方がありうるように思う。

①花嫁が無駄遣いをするのを「姑」が厭う。意地悪で憎らしいことだ。

②「花嫁」が、無駄遣いという行為を厭う。花嫁らしくない憎らしいことだ。

①の方は、説明の要もない姑の嫁いびりの句。②の方は、「花嫁」と言われる頃の女房は、まだ世帯じみていなくて切り盛りも下手なのが一般的のだが、この「花嫁」は、もう無駄遣いをびしびし指摘するしつかり者である。花嫁らしくなくちよつと小憎らしい感

じである、というような句意となる。
趣向としては、断然②の方が面白いが、やはり無難に①か。

のきなさい付木ばかりくべなさる 五三
いふなりに成ルのをいびるにくい事

安四義 6

増田 ①がしぜんかと思いますが、次のような解も可能か。

「ついえ云々」は、嫁をもらって幸せそうな男のテレ、「にくらしさ」は友達連中の言い分。「なんだこいつ、嬉しそうな顔をしやがって……」

山口 「厭う」にどうも女性的な語感があつて、①②どちらかと思えます。

268 はちつけの板はりちぎる御いたずら

小栗 鉢付の板は、兜の鉢にとりつける鍔（七）の第一枚目の板（日）。

「はりちぎる」ははつきりしないが、語感から見て「引きちぎる」と同じような意味かと思う。情景は、兜の鉢付の板を引きちぎるという戦場での勇ましい光景であるが、「御いたずら」とあるから、若殿がお祝いに献上された五月人形の兜を引きちぎるいたずらをしていているということであろう。

綴を引きちぎるとなれば、屋島における悪七兵衛景清と三保谷四郎のいわゆる「綴引き」が連想され、それがこの句の趣向であろう。少し語句は違いますが、謡曲「八島」の「互ひにえいやと引力に。鉢附の板より、引きちぎって、左右へくはつとぞ引きにける、」の文句取りとしてよいか。

増田 賛。人形だから「板貼り」だろうか。山口 賛。「板貼り」ちぎる、より「板」はりちぎるの方が勢いがあります。「はりちぎる」の変形という礎賛。

269 ひなをつかませぬで今朝ツからのたゝ

小栗 今一つ情景がはつきりしないが、雛祭りの男の子の句と解しておく。きれいに飾られた雛を、男の子が珍しがって触ろうとするが、親にきつく叱られてできない。それで朝から「触りたい」とだだをこねているという光景。

あれ雛をつかいやすよと姉の声 芭二二
ひなのたないちるとばちがあたるによ

安四智²

ひな棚へもくさを置くハ姉のちえ 一一三〇
増田 賛。まだ、ききわけのない女の子、でもよいか。

270 おとり子がこしをかけると牛をぶち

小栗 踊子は、②江戸の二天祭に、付祭として出た踊舞台の上の踊子。付祭は、山王祭、神田祭の時に、町々の山車の外に踊舞台で娘子共に手踊などをさせて余興としたもの（辞彙）。

「辞彙」の語釈からみて、主題句は山王祭・神田祭を詠んだ句と思ふ。付祭の踊舞台に踊子が腰を掛けると準備完了で、牛に一鞭入れて動き出すのである。

おとり子をよだれをたらし〜引

安七礼²

おとり子を車にて引いさましさ

明五亀¹

（参考）（「川柳年中行事」）

江戸祭に付属して錦上更に花を添ふるの一大量物は付祭と称する踊舞台である。（略）それ〴〵名ある唄方囃子連中が付属し、世話役、警護、鉄棒引など數十人が前後に従い、踊子は十四五才から十七八才位の美女にて絢爛目を驚かすばかりの美服を纏ひ、胡蝶の花に戯る、が如く、翩翻として舞ひ奏であるのである。多くは良家の子女なれども、場合によっては深川あたりから本職の舞妓を出す等の

こともあつたと聞く。
全員 賛。

271 はいつくと四五寸のけるまくわ瓜

小栗 赤子が真桑瓜を見つけて這って行く。ようやく這い付くと「こまで這ってご覧」とまた四五寸のけるという日常生活の「こま」を詠んだ句。

這ひ習ふ子の骨を折る瓜壱ツ 傍一八
全員 賛。

272 けつしてよくとて医者かへり

小栗 患者に対して「決してはいけませんよ」と、何かを禁止して医者が帰っていったという句だろうが、何がおもしろいかはつきりしない。

医者が禁止した内容が面白いとすれば、美しい女房を見ながら房事禁止というおなじみのパターンということか。

むだほねをいしやにおらせる美しさ

宝十三義²

女房をいたミ入らせていしやかへり

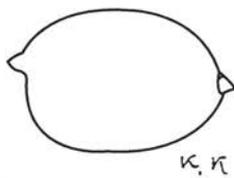
安六松⁵

全員 賛。

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)



「穴」 高瀬 霜石 選

抜け穴の先で悪魔が笑つてる
 家計簿の穴へ虎の子消えちやつた
 消費者の目を節穴と思うなよ
 一生をかけて自分の穴を掘る
 ドーナツの穴を抜けてゆく不況
 穴埋めに呼ばれ菓子箱さげていく
 タレントが来たからこはもう穴場
 秘書室のピアスの穴が知る秘密
 生きてゆく落とし穴にも落ちながら
 鍵穴に合わないスペアキーだった
 穴のあいた所にはばかり雨が降る
 とうさんが居るから穴もこわくない
 幸せは鍵の穴からでも見える
 掘ってますきみとこっそり入る穴
 穴だらけの道がつづいている歩道
 この穴はきつと地獄へつづいてる

- | | |
|-------|-------|
| 大阪府 | 井丸 昌紀 |
| 池田市 | 北出 北朗 |
| 堺市 | 羽田野洋介 |
| 東京都 | 清原 悦子 |
| 弘前市 | 高橋 岳水 |
| 大阪市 | 古今堂蕉子 |
| 河内長野市 | 村上 直樹 |
| 弘前市 | 斉藤 焔 |
| 寝屋川市 | 籠島 恵子 |
| 岐阜市 | 平野あずま |
| 島根県 | 伊藤 寿美 |
| 鳥取市 | 山宮 愛恵 |
| 大阪市 | 小泉ひさ乃 |
| 橿原市 | 安土 理恵 |
| 羽曳野市 | 三好 専平 |
| 豊中市 | 安藤寿美子 |

「穴」 木本 朱夏 選

向日葵のアップリケして隠す穴
 鍵穴の形は既にミステリー
 遠い日の大仏様の鼻の穴
 足もとの古い穴はこにしてやられ
 ケータイを抱いて都会の穴の中
 青い実がふざけて落ちる暗い穴
 落し穴何度もおちて蝶になる
 電気ドリルむやみに穴を開けたがる
 いい噂だけ聞き分ける耳の穴
 ドーナツの穴を抜けてゆく不況
 穴に手を入れる勇氣は持っている
 欲しいのはみんな虎穴においてある
 節約に穴居暮らしをして見るか
 清貧と上品に言う空っ穴
 節穴の向こうにかすむ昭和の灯
 節穴と言われてからの閻魔帳

- | | |
|-------|-------|
| 西宮市 | 木淵富喜子 |
| 西宮市 | 秋元 てる |
| 岸和田市 | 藤原 昭 |
| 寝屋川市 | 森 茜 |
| 大阪市 | 大川 桃花 |
| 河内長野市 | 坂上 淳司 |
| 和歌山市 | 坂部かずみ |
| 池田市 | 上山 堅坊 |
| 和歌山市 | 喜田 准一 |
| 弘前市 | 高橋 岳水 |
| 大阪市 | 小谷 集一 |
| 四條畷市 | 吉岡 修 |
| 岸和田市 | 井伊 東吉 |
| 吹田市 | 穴吹 尚士 |
| 豊中市 | 水野 黒兔 |
| 八王子市 | 播本 充子 |

空想が好きでやたらと穴開ける
蟻の穴は毎日日曜日

松江市 川本 晁
豊中市 谷川 勇治

おもしろいドラマを見せる壁の穴
ひたすらにあなたを思う針の穴

和歌山市 古久保和子
香芝市 大内 朝子

穴に手を入れる勇氣は持っている
ここ掘れワンワンそんな犬を探す

明石市 糍谷 和郎
大阪市 小谷 集一

電気ドリルむやみに穴を空けたがる
れんこんの穴にも意味があるのです

さいたま市 星野 育子
池田市 上山 堅芳

阿久悠を竹輪の穴が奏でたす
小さ目の穴でちんまり暮してる

鳥取県 斉尾くにこ
弘前市 宮崎ヒサ子

歩いたねクツ下の穴つぶやいた
五玉玉覗けば駄菓子屋が見える

鳥取市 大前 安子
美祿市 安平次弘道

靴下の穴から梅雨が来て笑う
穴埋めはいいからすぐに別れまひよ

松江市 津川 紫晃
横浜市 小野句多留

ガスレンジの穴から妻が噴火する
ぐち入れる穴をもってたお母ちゃん

京都市 都倉 求芽
大阪市 柴本ばつは

ブラックホールに税金アレレノレ
改札を抜けた切符に穴がある

羽曳野市 徳山みつこ
京都市 高島 啓子

胸の穴うずめるための応援歌
鍵穴の形は既にミステリー

川西市 西内 朋月
西宮市 秋元 てる

秀句

ドーナツもちくわの穴も譲れない
わたくしにしたい穴出たい穴

枚方市 寺川 弘一
橿原市 居谷真理子

節穴だけれどウインクならでできる

大阪市 森田 明子

学説も紙魚の穴から覆る

砂川市 大橋 政良

右派左派と騒いでみても一つ穴

出雲市 竹治ちかし

おもしろいドラマを見せる壁の穴

和歌山市 古久保和子

胸の穴うずめるための応援歌

川西市 西内 朋月

飯の宿穴を掘っては埋めている

河内長野市 山岡富美子

三尺も掘れば私も埋められる

海南市 三宅 保州

穴掘って叫んでいるよ偽装です

堺市 近藤 治子

罪まともブラックホールへ放り込め

宝塚市 丸山 孔一

蟻の穴は毎日日曜日

豊中市 谷川 勇治

数珠の穴潜り籠へ一歩二歩

高知県 いの 静草

針の穴女は沽券譲れない

松山市 宮尾みのり

女の胸を穴があくほど見ておった

尼崎市 春城武庫坊

耳に穴あけてB子のさみしがり

奈良市 米田 恭昌

貧富の差障子穴ではわからない

鳥取市 土橋はるお

ドーナツもちくわの穴も譲れない

枚方市 寺川 弘一

此の町の穴場へゆるい宿の下駄

松原市 玉置 重人

恥する穴は無口で深く掘る

茨木市 藤井 正雄

法律をちよつと齧っている墓穴

篠山市 遠山 可住

ガスレンジの穴から妻が噴火する

京都市 都倉 求芽

メンテナンスさぼった穴がデカくなる

寝屋川市 籠島 恵子

秀句

改札を抜けた切符に穴がある

京都市 高島 啓子

五玉玉覗けば駄菓子屋が見える

美祿市 安平次弘道

蟬の穴鳴き通したか陽を見たか

泉佐野市 稲葉 洋

短 い

両川 洋々選



私を十七文字の中に盛る
 苦しめてちよつと楽しい一行詩
 信念を通す眉です短気です
 松葉杖青信号が短かすぎ
 安近短いつかここから抜け出すぞ
 ショートステイか英語の恋に遠かった
 短命の政府世論を逆恨み
 身長は負けるが座高では負けぬ
 身長には来ないで髪が伸びるまで
 見舞いには来ないで髪が伸びるまで
 蓮の葉の上でコロコロするいのち
 帰って来い父の電話も泣いている
 メモ程度だから続いている日記
 くどくどと言わずに好きと言っておく
 流れ星相談できず消えました
 残照へ短編ドラマ練っている
 短所まで似てる息子が疎ましい
 一瞬という空間にある生死
 成田離婚神もそつばを向いている
 最短の出世もウツが付きまとい
 導火線短かくハートすぐ燃える
 カゲロウのたった一夜を舞いつづけ
 正義漢赤鉛筆がすぐちびる

みのり
 みつこ
 ぱっは
 裕子
 裕之
 あずま
 四郎
 玄也
 芳生
 慕情
 富子
 照彦
 政勝
 日の出
 好文
 洋
 穀
 かつ子
 隆盛
 善信
 重人

組板で刻む八十路の余命表
 長い針いつも短い針を追う
 バイバイと短い恋のEメール
 諭吉とはいつも短いお付合い
 駅弁を買う三分の離れ業
 夢ばかり食べて短い夏休み
 なぜ髪を切ったと男小うるさい
 メーデーに短かくなつた蟻の列
 貴方をしはる紐が少し短かすぎ
 スピーチの短かさ負けたなと思っ
 短夜のうつつの中に亡母と逢う
 もしもキリンの首が短かたら
 ぱつと咲く命短しつるあきら
 すぐ息が切れる短距離型の僕
 短所までひっくりくるでの私です
 住
 長針に訊けば短針針けもの
 たはこ千円短く切つて吸いますか
 ひと夏の恋に燃えたの別れたの
 短い余生一ミリずつの虹を織る
 公約の釘は三日で錆びてくる
 人
 導火線短かくなつてきたヒト科
 地
 蓮開くその瞬間に見る浄土
 天
 拉致という短い棘がまだ抜けぬ
 軸
 夏蟬へ俺も癌だと告げておく

幹子
 雅明
 美義
 北朗
 週行
 ゆめ
 幸雀
 くにこ
 寿美
 扶美代
 さだき
 ミツ子
 順風
 准一
 葉子
 高明
 次根
 朝子
 俊子
 霜石
 徑子
 子

東西南北視野は確かにみな緑
 心の目いつも青空眺めてる
 遠い日が何時でも見える目を閉じる
 真つすくものだけ見えるつばらな目
 勝利者の目だな静かな瞳だ
 直視する目が真実を物語る
 青い目に真の日本語教えられ
 涼しい目だから信じて付いて行く
 目に余る誤字をキカイのせいにする
 寂聴の法話で落ちた目のウロコ
 大仏の目に人生観を変えられる
 目の黒いうちはわたしの道をゆく
 夢を追う少年の目がきらり
 今の世へうしろにも目が欲しくなり
 レースにも馬はやさしい目で走る
 亡妻に逢いたい時は目を瞑る
 役人の遺憾眺上げて見る
 人よりも防犯カメラ確かです
 二つ目のだるま公約など忘れ
 家中で一番早く目が覚める
 スーパーの目玉が呼んだ万歩計
 二世帯は片目つぶつて平和です



高杉 千歩選

螢
 ゆめ
 可住
 千代
 扶美代
 武史
 五月
 玄也
 四郎
 いさお
 一風
 朝子
 愛論
 一壺
 典子
 高明
 道子
 日出子
 権悟
 欣子
 重人
 洋子

目を閉じて探しています忘れもの
おふくろの味は自信の目分量
年寄りの目に贅沢な食べ残り
コンタクト見つけてくれた他人の目
目立たない人がこつこつ溜めている
過ぎてから台風の目に居たと知る
目の高さ合わすと言葉出なくなり
誤字誤植目を血にして見逃した
目上でも目下でもない祖母の位置
浅知恵で目先の欲に走り出す
結び目がきれいだったと几帳面
優先席ときどき薄目あけている
時代の裂け目からヒーローが生まれ
目を閉じてゆつくり見たいものがある
じいちゃんは何時も笑顔で叱ってる

とし子
節子
週行
かっ子
まみ子
五月
正雄
公誠
倫子
昌鼓
歳子
正和
充子
明子
日の出

人事の目プライベートにまで光り (花)順子
父の目に適った人と住んでいる 雅枝
青い目が混じる先祖の墓参り 一知
サングラス取れば意外なやさしい目 幸子
寝たきりの友が笑った目がきれい 伊津志

慕情
美義

地 地
天 天

点滴の粒に命が目を覚ます
政治家と魚の鮮度は目で分かる
目も耳も助けを借りて老いの夢

高瀬霜石
軸

メニユー

上地登美代選



色々とメニユー気になる病み上り
メタボから抜ける献立表つくる
連作を避ける畑のメニユー表
一週間のメニユー決まっている患者
パソコンに美味しいメニユー保存者
糠漬けのメニユーが続く夏の朝
飯とパン朝のメニユーは賑やかで
冷蔵庫のぞけばメニユーできあがる
単身のメニユー肉ジャガ先ず覚え
家事万端メニユーこなして出る旅路
夕食メニユー肩にかかった釣り父子
ありがとう嫁のメニユーに馴らされる
エステメニユーちよっと手抜きBコース
妻のメニユーはチラシの裏に書いてある
こだわるとメニユーが重くなってくる
メニユーより一皿減った予算高
先客のメニユーのぞいて品を決め (編) 洋
健診でメタボメニユーを渡される
七日目でメニユー一巡する我が家
新メニユー苦心の汗が煮込まれる
洋風のメニユーに弱い台所
馴染み客だけに差し出す裏メニユー

泰女
蟹
晴翠
高明
輝夫
かずみ
銀波
明子
四郎
みね
一風
すず
茂代
武庫坊
みのり
英子
弘泰
修
千代子
週行

チラシ見て今日のメニユーを組み立てる
常連にあるおまかせというメニユー
目移りのメニユーへ迷うアラカルト
給食のメニユー腕白待ちこがれ
あじさいをイメージしたと梅雨メニユー
横文字のメニユーが喉にひつかかる
時価という季節メニユーを値踏みする
続編がメニユー通りに運ばない
血糖値下げるメニユーで不服の胃
満点のメニユーに鯛の目が光り
一応はメニユーを見るが決めている
血圧がやめろやめろというメニユー
自家製の野菜主流にしたメニユー
定番が並んでさわやかな朝だ
孫がきてメニユーもぐつと若返る

准一
満子
ばっは
朝子
充子

佳 佳
人 人

食材の値上げに苦勞するメニユー
メニユーから饅餃子を遠ざける
納得のメニユー温泉めぐりする
サミットの豪華なメニユーとは無縁
国産にこだわらるままことのメニユー

献立の悩み亭主が居ればこそ
メニユーから消えなうなぎと牛ミンチ
いつだって折りを込めているメニユー 太田扶美代
五色というポリシー持っているメニユー

遠野
岳水
権悟
樺杵
幹子
一粹
碧
伊津志
慕情
すみれ
椒子
霜石
みつこ

初歩教室

題 一 字

三宅 保州

川柳のとりこになつていますか

皆さんは川柳にどの程度取り組んでいますか。暇つぶしやボケ防止に川柳がよいからという程度の取り組みでは、文芸としての川柳さんに失礼で、上達も覚束ないと思います。願わくは、あたかも熱烈な恋愛をする如く、川柳のとりこになつていただきたいものです。寝ても覚めても川柳、川柳がなくては夜も日も明けぬとまでいなくても、川柳に熱心に取り組んで「生きがいは川柳です」と自信をもつて言えるように精進して下さい。しかし、二十四時間、三百六十五日あなた（川柳）のことはかりとはいきませんから、あなた（川柳）のことに熱中し没頭する時間を取つてほしいのです。その結果すばらしい愛（句）が生まれることでしょう。

川柳のとりこになつて満たされる

【ワープロ・メール等を詠んだ同想句】

悪筆も平気パソコン書いてくれ 亜希子

ワープロは苦手おまけに字は下手で 治子

惜しみなくパソコン奪う漢字力 實

文字離れパソコン世代携帯で 稔

パソコンが文字を書くのを忘れさせ こそえ

命名の字もパソコンに乗つ取られ 好文

ワープロを作つた人に感謝です 勇治

メール打つ手が鉛筆を遠ざける イセ

同想の発想と表現を超える工夫をしましょ

う。次の句は発想、表現共に秀でています。

字余りのおしゃべり続くメール便 かずみ

次の五句は暗合句に近い既句があります。

名前書き字が性格を表わして 弥生

書いてある文字が性格まで喋る 次根

達筆に友の返事を出し渋る 松風

達筆でお返事待つと言われても 乃りこ

達筆の手紙ためらつて返事 堅坊

【添削・批評句】

次の四句は中八音字です。中七にする努力を。

原句作りで字余り字足らず悩まされ ちづる

字余りと詠んだこの句自体が中八です。

原 達筆に触れると心が洗われる 利子

添 達筆に触れると心洗われる

原 年暮れて今年の一文字感無量 長一

添 年暮れて今年の一文字感無量

原 遺言はかつちり楷書で書いておく 浩二

添 遺言はきつちり書いておく楷書

原 便り書くかしこと結ぶ女文字 俊子

便り、かしこ、女文字と近い言葉が重なる。

添 水筆の跡に見とれておるかしこ

原 書作品泥縄仕上げ徹りもせず 冷子

添 徹りもせず泥縄式の書作展

原 大きな字書いていますが小さい手 美智代

添 お習字の大きな字書くもみじの手

原 代々の遺伝を超える字のうまさ 柳歩

添 達筆の遺伝私だけ別

原 老いたかな字が面白く躍りだす 正二

添 老いたかな文字が勝手に躍りだす

原 老いの身も達筆感じ習字する 孝明

添 老いたりといえども筆は衰えず

原 おおちゃんも字を習つたら孫が言う 綾乃

添 おおあちゃんも字を習おうと孫が言う

原 亡き母のはがきに残る文字のあと 周子

添 亡き母の葉書に母が御座します

原 カタカナや平仮名も入る祖母の文 弘子

添 カタカナもひらかなもあり祖母の文

原 下手な字で届く便りが温かい 絹子

添 からかわかるように詠んでほしい。

原 若者の絵文字丸文字市民権 靖博

添 そのうちに辞書に載りかねない絵文字

原 下手な字を個性と誉める他人様 (岡) 洋子

添 悪筆と言えずに個性的と誉め

原 忘れられた辞書を今でも手離せぬ

添 昔ながらの辞書を今でも手離せぬ

原 堂々とした字が下手で美しい

添 堂々と書けば下手でもたくましい

原 字は読めど書く事出来ぬ悩まし

添 読めるのにいざ書くことは難しい

原 上手下手はとにかく文字は正確に

添 上手下手はともかく文字は正確に

原 声でなく友との筆談これたのし

添 筆談の友と心が通じ合う

原 今月も赤字覚悟の冠婚費

添 また赤字の元は冠婚葬祭費

原 出し入れの数字いちいちチェックされ

添 ATM数字いちいちチェックされ

原 合併で町村内の字が消え

添 由緒ある字の名消えた合併後

原 招き上げ特殊な文字が客招く

添 独特の招きの文字で客を呼ぶ

原 字幕つき追いつけてます消えないで

添 追いつけていない間に消えていく字幕

原 横文字の表札ふえて迷う足

添 ローマ字の表札増えて読みづらい

【少し工夫すると佳くなる句】

原 我が辞書は不可能という字だらけ 道子

添 我が辞書は不可能という文字ばかり

原 ゴチックがこは大事と知らせてる 克博

添 大事さをゴシック体に教えられ

原 手紙書くハングル文字でヨン様に

添 ハングルのフアンレターをヨン様に

原 英語にも金釘流があるらしい

添 英語にも金釘流がありますか

原 やさしい文字で心伝わるように書く

添 一所懸命心伝わるように書く

原 名作の原稿の文字たどたとし

添 名作の原稿の文字味がある

原 大字が消えても消えぬ里の味

添 大字が消えてもふるさと消えぬ

原 詫びの文字よりごめんと云つて下されば

添 詫び状よりごめんと云つてはしかった

【佳句】

憂鬱を覚えた孫に書かされる

人文字が揺れてグラント燃え上がり

難解な日本語らしい診断書

ローマ字で駅名ちゃんと読めました

ローマ字の併記が進む観光地

字を書けば中国の旅意味通じ

友の字は名前見ずともすぐ分かり

誤字脱字この履歴書で働く気

広辞苑ひとり遊びが板につき

ほめ言葉考えながら書道展

大の字に寝てもやがては海老になる

字のつく村で出逢える日本人

似顔絵はへのへのもへじから始め

追伸で斬られてからの車間距離

名字すら憶えていない遠い恋

たくましく女笛字を三度換え

古日記あの日に戻る頭文字

かな文字を色紙に書いて夏を詠む

寄せ書きの色紙の文字に浮かぶ顔

病む友の三日がかりで書いた文

【今月の推せん句】

活断層まくらに大の字に眠る

地震への備えをした上での安眠だと思ふ。

「備えあれば患なし」から生まれた句。

老舗の看板は右から書いてます 岡本昇

句は見つけからの手本のような句です。

万年筆胸に大人の仲間入り 荒巻夢

万年筆を買ってもらった少年の喜びが溢れ

ている佳句。他になかった発想です。

【私の句】

一字だけ選ぶとすれば愛である

字余りも字足らずもあり人生譜

(登載浅れの方は役員が添削して返送します)

千代子

麗

宏造

たん吉

昭

幹子

すみ子

憲子

幸

光子

房江

芳子

木村徑子

秀句鑑賞

同人吟 中居善信

— 8月号から

藁屋根はいまも太郎を待っている

石谷 美恵子

今、農村は荒れ果てている。放置されてる田畑、村を棄てて都会へ行つてしまつた廢屋、二〇〇戸の村に一学級三、四名の生徒。

それらの子供たちもいつかは都会へ出てゆく。UターンもIターンも米作る技術は皆無。太郎が笑っている農村はいつ来るのだろうか。嘆いているのは僕一人じゃない。

一時の激しい雨に打たれてる

細田裕花

この句に、私が句評を書くのはやめたい。私がいろいろと書くと、この句は死んでしまふ。恐ろしいほどの深みにたじろぐ。

封筒にだいいな影が入れてある

高橋宏臣

単なる挨拶状のような手紙、その一字一語の間に潜んでいる愛。

それはその人の影であろう。若いころこの影を、どんなに探したことだろう。

きつかけはただお早うと言つただけ

大川 桃花

人とひととの結びつきなんて言うのは理屈じゃない。いやな人だと思ふ人には「おはよう」の一つも出ない、なんとなく虫がすいて、こころ許せる雰囲気。おはようと言う。

私の住んでいる愛媛県は正岡子規や高浜虚子など多くの俳人を輩出し夏目漱石が「坊ちゃん」を書いた土地として有名です。そして行乞放浪の俳人種田山頭火が死に場所として選んだのが松山市道後の一草庵であった。

そんな土地柄の中で川柳活動も結構盛んに行われている。柳祖を前田伍健と位置づけて多くの門下生を生んできた。

伍健さんと親しまれ、中興の祖とか六大家などと呼ばれている麻生路郎や岸本水府、前田雀郎との交流があったと斉藤大雄の『残像百句』の中に記されている。

私はそんな環境の中で多くの柳人に出会う。飽き足らなくなつて「川柳塔」のお世話になつている。句に対する姿勢は「平明である事」「川柳は叫びである」をモットーにしている。そんな基準で句を選ばせて頂いた。

八月の黙禱だけは欠かせない

井上 勝規

終戦のとき僕は小学校の二年生だった。校舎の上にある三嶋様の境内に集まらされて王

音を聞かされたのだが、僕たちには理解できる事ではなかった。だが僕にはこれをベースにして反戦反核にこだわる事になる。B29の数をどんなに数えて来たことか。教科書さえろくに無かつた少年期、十分でない食糧事情、戦争の酷さを私たちは叫ばなければ誰が叫ぶのか。

自給率ギョウザ教えてくれている

岩佐 ダン吉

自給率が40%を割つても政治は動かない。「食料は外国から買えばいい」とうそぶいて自動車を作っているどこかの社長さん。戦後の米を忘れたのだろうか。芋食つて育つた僕たちには理解できない。「米よこせ何時か都会が叫ぶだろう」と思っている。採算の合わない米を作るのに年金つき込んでトラクター買って、何時かは陽の目を見るだろうと待っている。

自給率40%が何かを中国のギョウザが教えてくれた。にも係わらず、風が止むのをじっと待つている商社、いいのかねえ?。

和解とは先にほほえむ事だろう

太田 扶美代

小さなこたわりなら、微笑んで済む。微笑んだくらいでは済まなくなつた。わだかまり、人とひととの結びつきはややこしい。

黙禱で始まる古希のクラス会

鈴木 木 いさお

僕たちも昨年、「七十歳になった記念にクラス会でもしたらどうか」との発案でクラス会を開いたのだが、一〇〇名のクラスメイトの内、十五名が亡くなつていた。「十六番にはなりたくない」と皆が言つて、四五名の者が夜の暮れるのも忘れて肩組んで一五歳になつていた。

年輪を見れば数えてみたくなり

中塚 礎 石

今、倒したばかりの杉の木を年輪 数えて見れば、八〇いくつ、逆算をすれば爺ちゃんが二十歳の頃に植えた事になる。三代かかつてやつと伐れる杉の木。植えたのは祖父、草刈りや枝打ちをしたのは父、ありがたく私が頂く。

だがね、今の時代、木を伐つて出して植林をししたら赤字になってしまう。一町分の山が一〇〇万円でも買ひ手がない、そんな時代に成り下がってしまった。

農家で産まれた者は、木を見ると年輪を数

える、節の数を数ええる。悲しく強い性かも。

パンの耳髯い合う日はきつと来る

風吹けばなびく程度主義主張

木本 朱夏

上五のパンを僕は何時も米と置き換えている。発想は同じなんです、戦後の食を知っている者は必ずこう叫ぶ。それがねこの頃、軟弱な思想しか持たないのが多すぎる。無党派なんていうのはきちつとした思想が無いのに、その数が多くて政治を左右するから困る。誰かの口に騙されて三〇〇議席、その数がだんだん右旋回をさせている。

大根が辛い初夏の味になる

白根 ふみ

これは、田舎で育つた者には実感出来るな。句。自宅の前にキュウリもナスもニガウリも、たわわに実つている。近所に配つても食べ切れない、大根も人参も二度蒔いている。夏大根は秋に比べて極端に辛い。

こんな暮らしをしている者には、都会の暮らしが性に合わない。

いい男でしたと妻に言われた

高瀬 霜石

うふふ、と笑つてしまった。誰だつてそう思っている。恥ずかしいから黙っているだけ。妻は必ず言うだろうと思つているから軽く軽く流して、へへへ。

再読の蟹工船と梅雨最中

伊藤 寿美

大江健三郎の出身地は私の住んでいる大洲市の隣町、内子町大瀬である。兄は歌人の大江昭太郎です。健三郎の妹婿になった、博ちゃん先生が私の町に赴任してから、友達と二人でよく遊びに行つた。すぐその川でカジカを取り、湯豆腐の出汁にして焼酎を飲みながら夜遅くまで遊んだ。そんな話の中で、博ちゃん先生は「蟹工船」は読んで見るといと勧めてくれたがどうとう読まなかつた。だが内容は大体理解出来ていた。虐げられた労働者が立ち上がる話。それが今、若者によく読まれている事は、新聞テレビで知つている。派遣社員だの、契約社員だの、パートだのと社員の分断化が進み貧富の差がますます進む。世の中の矛盾に疑問を持ったのは小林多喜二も鶴彬も同じだと思う。

見ませば木に囲まれて生きていく

西口 いわゑ

この句を一番後にしようと思つてた。私の周りは山ばかり、その中腹にぼつぼつと家がある。窪みには所謂千枚田に近い棚田がある。日本は適当に湿度が高く、お日様の恩恵でどこでも草や木が生える。こぼれ種でもキュウリやカボチャは生える。絶対に砂漠化をしない風土。木に囲まれて私は生きていく。

秀句鑑賞

—8月号から

早川 遡行

犯罪も世界レベルの秋葉原

小川 良吉

アメリカの銃乱射事件、こうした若者の無差別殺傷事件は遠い異国の出来事とはかり思っていました、ついに日本にも起こってしまいました。世界一治安のよかつた日本はどうなってしまったのでしょうか。

ほめられて足の裏まで熱くなり

古田 千華

思わず笑ってしまいます。

和を保つ陰に日向に母おわす

福井 菜摘

親の恩は海よりも深く、山よりも高いと申します。大事にしてやって下さい。

あの頃の若さに挑むフラフープ

吉村 幸

懐かしいですね。一九五八年に大流行しました。

波に乗り風に従い生きている

岡村 孝明

もう自分で生き方を変えようとする気力も失せて、波任せ、風任せ、歳はとりたくないですね。

ケンカしたあとも荷物は俺がもつ

福岡 博利

強がりと言っても、弱きもの男なり。

人間が恐くて閉める鍵の音

高山 清子

恐いのはやはり人間。顔見知りでも信用出来ない世の中になってしまいました。

輝いて人の集まるとが好き

花岡 順子

いつまでも輝いていて下さい。そして沢山の友達に囲まれてよき人生を。

主婦のわざ野菜の命使い切り

近藤 治子

丹精籠めて育てた野菜を良いとこだけ取って捨ててしまう主婦が多いなか、横ざまに工夫して料理に使い切るという優れた才能のあるあなた、尊敬してまいります。

針に糸通る介護はまだ要らぬ

赤木 妙子

子の世話にならぬつもりのウォーキング

二宮 栄子

皆どうして生きているのです。でも最後には子供の、あるいは福祉の世話にならなければ生きていけないんです。

目標の山がだんだん低くなる

田邊 浩三

人に依って高くなったたり低く見えたりするんですね。あなたは正に成功者と言えるでしょう。あと一息頑張ってください。

多弁より無口な人が温かい

矢野 良一

多弁で人懐っこい人には欺され易いが、無口な人は案外正直で心の温かい人が多いかも。

クラス会会うたび千の風が吹く

増井 ヨシ枝

あの人が亡くなった。あの人の旦那が亡くなったと寂しい話題ばかりです。

素人が裁く事など出来ません

巖田 かず枝

法務大臣のハンコ一つで死刑が執行されていく。そんな重大なことを素人の私に何んて出来ましょう。恐ろしいことです。

休肝日なんと時間の長いこと

坂 裕之

酒好きには困ったものです。週一の休肝日さえ苦痛なのです。

■句集紹介

『山びこの詩』

前 たもつ著

木 本 朱 夏

句集『山びこの詩』には序文も跋文もない。本来ならば序文を載く橋高薫風先生は残念ながら、すでにこの世の人ではない。

先生が亡くなられた時、たもつさんはどれだけ句集を出すようにお勧めしても、首を横に振るばかりであった。

先生が亡くなられて三年が経った。この七月は先生の誕生日であり麻生路郎師の生誕一二〇年の月。また、たもつさんの喜寿の年でもある。それらを記念して句集が誕生した。

山びこは幼い頃の僕を知る

ふるさとを泰治描けば棕櫚の里

ふるさとの水は両手で汲んで飲む

『山びこの詩』という句集名に、たもつさんの原点を見る。

たもつさんの生まれ育ったのは、桃や棕櫚の産地として有名な高野山に近い里である。

段々畑の上から山彦と遊び桑の葉を摘み、豊かな自然の懐に抱かれて育ったという。

句集は「荷を下ろして」「朝いちばん」「四月の廊下」「面影ゆれて」「桃の里」「道遠く」の六章からなる。

肩の荷が下りても靴は減ってゆく
菜園を回ると朝は動き出す

四月の廊下一年生が光ってる

三十で死んだ母さん美人なり

山が好きこ先祖さまの匂いする

お見舞いの師から氣力を貰い受け

『山びこの詩』は川柳の詩形で書かれた自伝史である。どのページにも誠実で謙虚な、たもつさんの息遣いが感じられる。

たもつさんは薫風先生のカルチャー講座を十年も受けられた。師系・橋高薫風と書ける幸せな川柳人である。

忠実に薫風先生の教えを血とし肉とし、どの作品にも破綻がない。

校長室覗いてみたいランドセル
宿題が出たとうれしい一年生
夜店の灯教え子みんな器量よし
いい町だ少年に声かけている

大変だ小学生が荒れている
教育者たもつさんの慈愛に満ちた目差し。

この歳で妻ちゃん付けて呼んでいる
唐津焼き記念に妻に買ってくる
半分こ いつでも妻に大きい方
妻の留守城代家老の気分なり
妻の掌の上で安心していてもたもつさん。

恥ずかしいものがなくなる怖い歳
フルムーン妻に教える蕎麦の花
早世の母思い出す吊し柿
産んでくれただけで母さんありがとう
秋風に父の形見の帽子出す

長男を代わってくれと兄が言う
父に似てきた弟と飲んでいる
葬式で会う弟も歳をとる
父の日に父は玄關掃いている

亡き父母、亡き師に捧げられた鎮魂の句集、それが『山びこの詩』である。

奇をてらわず、やさしい言葉で、お人柄そのまま、おにぎりとおみおつけと焙じ茶を頂いたような……暖かく、懐かしく、心和む句集である。しみじみと句集は人なりを実感。たもつさん、おめでとうございました。

本社八月旬会

八月八日(金) 午後五時半
アウイーナ大 阪

いつまで続くのだろうかと思わせるこの暑さの中、91名の出席により八月旬会開催。

お話は川柳塔理事、新家完司氏。

「カルチャーショック」川柳の話にもそろそろ飽きたのではないかという配慮で、御自身の体験談、異文化に触れた時の驚きをカルチャーショックと題して語られた。

37歳、十二指腸潰瘍を患い、大阪から鳥取の奥様の郷里へ移り文房具店を継ぐ事になった経緯から始まる。その当時の大阪と、鳥取の暮らしの違いは相当なもので、毎日が驚きの連続、ショックの連続であったようだ。

山絵事、交通違反番 等々、聞き慣れぬ言葉と地域、及び集落の団結ぶりにも戸惑いや、納得しかねる事も多々あったのではなからうかと推測はできる。

けれども十二指腸潰瘍も半年ぐらいで癒えた。という今、映画館一つなく、面倒なしきたりや、そして山陰独特といわれる悪天候の中で、その暮らしにしっかりと根をおろし、喜々として楽しんで暮らしておられる様子が、手に取るように伝わってくる。

あたたかく郷愁にも似た空気が会場中を包

んだようである。

(扶美代記)

初出席は八尾市の前田紀雄氏。

月間賞は堺市の奥時雄氏に輝く。

(司会 美龍・昭) (脇取り 扶美代・賢子・月子)

(受付 哲子・能子・扶美代) (清記 直樹)

席題「西瓜」

吉村 一風選

仏さまはくのかつくった西瓜です

大掃除の休憩車座の西瓜

さつぱりと西瓜を食べて仲間おり

父ちゃんのメタボに負けぬ西瓜買う

大西瓜下げて花火の客が来る

絵手紙の冷えた西瓜がこぼれそう

頂いて持て余します丸西瓜

西瓜割りした頃偲ぶホームレス

西瓜泥棒言えはおひとつあげるのに

割り算を教えて西瓜割ってみる

種なしの西瓜淋しく物足りぬ

ポンポンと西瓜叩かれ売れていく

四五軒に領けて西瓜が納まった

用のない人にも西瓜叩かれる

西瓜の種鳥が運んで芽ぶく庭

お父ちゃん西瓜買うからついて来て

熟れる前カラスに西瓜召し取られ

かぶり付きふつと周囲を見た西瓜

上品に小玉西瓜とおちよぼ口

面つけて西瓜割りする施設の子

ポンポンと西瓜叩かれ値ぶみされ

冷蔵庫西瓜に占拠されて夏

棚落ちの西瓜みたいな女が好き

冷蔵庫西瓜の席が空けてある

よく来たな冷えた西瓜がお持ちかね

西瓜好き青いとこまで食べている

一つの西瓜一緒に食べているご縁

種とばしに真剣でしたあの頃は

残暑なお西瓜をにらむ辻地蔵

種なしの西瓜にされた運不運

佳

西瓜の種とばして虹を追いかける

一切れの西瓜二人で食べた仲

素人がお尻たたいで買うている

西瓜切る母はマジシャン均等に

たたかれて食べ頃ですという西瓜

人

種なしの西瓜憐れむ子たくさん

地

不器量な西瓜も味で勝負する

天

西瓜たたくとお伽話が転げ出す

軸

西瓜の種とばし女は二の矢つぐ

兼題 「なんで」

志田 千代選

なんでやる大阪いっち好きでんねん

給料日隣の犬が尻尾振る

一風

大輪

郁夫

昌紀

希久子

加お里

時雄

勝弘

いさお

扶美代

義子

柳弘

幸雀

水昇

鐘造

一歩

ふりこ

富美子

昭

寿子

美籠

そうめんになんでびつくり水入れる
 意外にもとんと拍子なんでやろ
 急いでるけど何処行くんでしたっけ
 店じまいセールもう一年になる
 なんでだろう分らないけど好きは好き
 同じ物食べても嫁は太らない
 犬でなくなんで私は人なのか
 回転ドアいつも出られぬお父さん
 切腹を二度して飲んでいるなんて
 神様がなんでわたしにソッポ向く
 亡母の小言なんで今ごろ胸を打つ
 なんてとは言わず黙って母は出す
 美男美女の子供と誰も信じない
 なぜ夫もてるか後をつけてみる
 流し目になんで傾く男たち
 なんでかど聞かず大人は諦める
 いつだってさんど働さ叱られた
 なんでやと役所できて叱られた
 二言目になんでやねんと言う夫
 この指に止まってくれたのはなんで
 貴方には未だ話せない胸の内
 いい人はみなさんなんで早く逝く
 毒ギョウザなぜ中国の言い成りに
 むつかしい蟹工船が何故売れる
 書き出すとんで本音が消えるペン
 兄に絵本なんででんで寝つかない
 言いたいななんでこんなにもてるのか
 佳人薄命なのにわたしは生きている

岳人 美籠 天笑 紀乃 能子 柳弘 みつ子 保州 朋月 日の出 富美子 遠野 見清 靖鬼 歌子 靖鬼 歌子 見清 遠野 富美子 日の出 朋月 保州 みつ子 柳弘 能子 紀乃 天笑 美籠 岳人

なんでだろ金持ちは皆ケチンボだ
 阪神の優勝パレード自己負担
 あんなええ男をなんで捨てはったん
 住
 なんでなの皆が大事にしてくれる
 母さんになんで優しく言えなんだ
 汗を拭く妻がなんでか艶つばい
 ほとけ様なんで死んだと叩かれる
 なんでまたこんな男を選んだか
 人
 なんでこの人と添うたかもう忘れ
 地
 老人へなんで斜めに陽が当たる
 天
 蓮根の穴を覗いているなんて
 軸
 脱ぎ捨てた靴下拾うんでだろ

完司 紀雄 尚士 ルイ子 瑠美子 瑠美子 時雄 理恵 天笑 希久子 卓

兼題「山」 岩佐 ダン吉題

主治医すら祈る気になせやマ越える
 6Bで愚痴る程度が関の山
 山びこが答えてくれた努力賞
 八月は瓦礫の山が甦る
 ネジ山が減って夫婦の軋む音
 ふる里の山のこだまは母の声
 いのち救った下山の勇氣あたりがとう
 山に来て酸素の味を知りました
 現代も姥捨て山が在るのです

雅明 美義 美花 哲男 郁夫 一風 靖鬼 深雪

捨てるなの札を立てるとゴミの山
 許されて許して山は深くなる
 いつの日か枯山水になる地球
 山積み放つたらかしのマニフェスト
 信念で山を崩した蟻の穴
 断腸の思い地球は山を裂く
 山だった父がだんだん小さくなる
 富士山をゴミの捨て場にたした日本
 人間に追いつめられて山が泣く
 いくつ山越えても次の山が待つ
 引き返す勇氣を山に諭される
 差別せぬ無表情の山が好き
 山削り海埋めるのは犯罪だ
 ぼた山が残り無法松は消えた
 お金出し担がれ登るエベレスト
 やまびこが帰って来ない原爆忌
 八月の山から命こだまする
 恩ひとつ返して低くなった山
 山ほどの善意で咲いた杉の碑
 水山の崩れる音にある寒さ
 山が好き僕のこだまが聞けるから
 古里の山に生きてる千枚田
 越えてきた山の数だな顔の皺
 佳

りこ 千里 尚士 修 朝子 集一 大輪 昭 いわゑ 天笑 幸雀 東吉 時雄 和夫 孝一 柳弘 希久子 三喜夫 賢子 理恵 一步 美智子 直樹 玄也 孝一 たもつ 朝子

雪解けてちよつとまぬけになった富士 昌紀

人

朝焼ける山に向かつて生きてるぞ 義子

地

核廃絶叫んで山を動かそう

天

山降りてまたちよつげな人になり

軸

監獄跡彬の句碑は七合目

兼題「仕掛ける」

川上

大輪選

妻だけの知恵とは思えない仕掛け

ごみの日は目覚まし二個をセットする

黒幕の仕掛け通りに踊らされ

ウツツフジョーカーを手仕掛け待つ

緊急提案根回しはもう済んでいる

自分から仕掛けた異にひつかり

死にぞうたまには言つて手をかり

遺産ないことをほつぽつ書いて置く

思惑どおり引つ掛かったのがあなた

無洗米仕掛けたままで妻は留守

女房に仕掛けて勝てぬ口喧嘩

ちよつかいを出しては返り討ちに合う

子の仕掛けをままとのつたフルムーン

抜け穴も一緒につくる規制法

ふるりの倉で見つけたねずみ取り

石投げて波紋ひろがるのを見てる

昌紀

義子

楓

楽

見

清

庸

佑

雅

明

准

一

ふ

り

卓

三

喜

夫

恵

子

郁

夫

理

恵

富

美

子

富

美

子

幸

雀

哲

男

何食わぬ顔で掘つてる落し穴

たそがれの夢老眼鏡に仕掛けとく

仕掛けでも乗らねばならぬ時がある

子育てへ親が仕掛ける鮎と鞭

仕掛けるのは止そう星が見てるから

ここだけの話だなんて仕掛けられ

オブラートにそつと包んでおく仕掛け

特価品何か仕掛けが有りそう

万策が尽きて仕掛ける店じまい

美人不美人鏡に仕掛けなどないが

仕掛け火花やつとこちらを向いてくれ

かあさんの愛に仕掛けはありません

幾何学模様見事なまでの蜘蛛の糸

ひらがなのささやき骨を抜く仕掛け

仕掛けとは知らず伸ばした鼻の下

信長は女だったという仕掛け

肩籠に妻の仕掛けが捨ててある

物産展お国なまりの娘の前に

本番になって仕掛けを外される

片えくぼそこに仕掛けがありました

女房の仕掛けた穴で五十年

ピカピカの靴勤けという仕掛け

赤とんぼ秋を仕掛けにやってくる

一周目から飛び出して笑われる

遠野

希久子

たもつ

いさお

柳

弘

ばつは

理

恵

鐘

造

集

一

希

久

子

希

久

子

リ

イ

ン

カ

リ

イ

ン

カ

リ

イ

ン

カ

リ

イ

ン

兼題「リゾート」

奥田

みつ子選

リゾート地やつぱり暑い陽が当たる

只同然国が投げだすリゾート地

リゾート地言葉はいらぬ星の数

待望のリゾート地でも蚊に食われ

最高のリゾート家でゴロ寝する

リゾート開発小さな山がかき消され

貧乏性リゾートへ来て寝つかれず

リゾートに居ても母さんよく動く

年金でリゾートまではまわらない

リゾートにいずれ宇宙へ行くつもり

会者定離避暑地に秋の風わびし

リゾートの海にサンゴの悲鳴聞く

思い出をいっばい作る行楽地

リゾート地退屈な風舞つている

青写真ばかり見えますリゾート地

図書館を避暑地にしてる小宇宙

リゾートで開放されている素足

僕のリゾート居酒屋の奥の席

リゾートの絵日記青い夏帽

追憶へ避暑地で燃えた夏帽子

リゾート開発鳥よケモノよ許されよ

スイスからの絵手紙読めばなお暑い

リゾートをガソリン代が遠ざける

軽井沢銀座通りと化した夏

リゾート地セラブの尻尾落ちて

おばあさんの家が避暑地になつて

庸佑

准一

日の出

哲男

大輪

美智子

耕治

見清

いわゑ

楓

楽

希久子

いさお

加

お

里

靖

鬼

ばつは

富美子

瑠美子

弘一

能子

朝子

昭

和夫

遠野

玄也

希久子

義

ふる里と言うリゾートに母の海
 バブル期のリゾートお化け出てきそう
 リゾート地カレラライズが高すぎる
 一番のリゾート地です句会の場
 貧乏性リゾートに来てもてあます
 リゾート地みな余所行き顔をして

住 哲 男
 保養地の疲れを癒すのは我が家
 リゾートでゆつくり命洗ってる
 星ひとつ流れリゾートさまになり
 リゾートの空いっぱいに夢を描く
 ケイタイの電源を切るリゾート地

人 集 一
 リゾートへ位牌もつれて盆休み
 地 幸 雀
 保養地でやつぱり名刺出す戦士
 天 保 州
 リゾートができて古里消えました
 軸 身も心も癒すリゾート我が家だけ

兼題「挑戦」 河内 天笑蓮
 鳥の巣に金銀銅へ挑む願
 陣痛に挑むおしいもん食べて
 たたかいを自分に挑むダイエツト
 青魚しつかり食べて百めざす
 夏空へ挑戦してる蟬しぐれ
 おもしろい死ぬまで続く上り坂

哲 子
 朋 月
 美 花
 堅 坊
 修
 靖 博
 哲 男
 太 郎
 義 子
 集 一
 三 喜 夫
 志 千 代
 幸 雀
 保 州
 公 誠
 ばっは
 富 美 子
 好
 か り ん
 完 司

挑戦をやめた途端にほげ始め
 挑戦しよう母の寿命を越えるまで
 閉め切つて子供バイエル弾いてます
 産ませてと今頃妻に挑まれる
 挑戦が続く三億円の壁
 検査結果挑戦状をつきつける
 夏草に今年も負けてしまいたいそう
 おへそにはよほど自信があるらしい
 減量の二キロにお腹留めてる
 結果には触れずチャレンジほめてやり
 スピード社に真つ向勝負する水着
 挑戦の前にメガネを買い替える
 不惑へのチャレンジ虎の三人衆
 かまきりが猫に挑戦して喰われ
 減量に挑戦妻が頼りです
 赤らようちん挑戦的な人は避け
 生存へ神の手をもつ執刀医
 禁煙に挑戦これで十回目
 米作り有機肥料に挑む父
 叩かれてもおとこ踏ん張る剣が峰
 挑戦はしないさらりというけ流す
 パソコンに挑戦をした三日間
 挑戦へ助走ゆつくりゆつくりと
 呱呱の声早や挑戦の声上げる
 変わってる人に今日こそ声かける
 ボクがボクに痩せるぞという挑戦状
 挑戦は今だと影がそののかす
 一生の挑戦という趣味がある

雅 明
 ルイ子
 耕 治
 則 彦
 集 一
 朝 子
 靖 博
 卓
 ダン吉
 好
 修
 理 恵
 い さ お
 朋 月
 弘 風
 堅 坊
 賢 子
 昌 紀
 孝 一
 ばっは
 義 子
 瑠 美 子
 希 久 子
 鐘 造
 篤 子
 千 代
 扶 美 代
 あ や め

住 百歳も挑戦権を持つている
 カミさんにコールド負けの口喧嘩
 激辛カレー挑発剤を入れてある
 ジョギングに挑戦ピンクの靴を買う
 隣人を好きになるよう努力する

人 完 司
 はじめよう六十七の誕生日
 地 加 お り
 挑戦状のつもり祝電打っておく
 天 和 夫
 チャレンジのころ輝いていた日本
 軸 恋に挑戦妻のOKは取らず
 時 雄

川柳塔まつり(10月5日)
 懇親宴余興出演についてお願い
 まつり懇親宴では場を盛り上げるため
 に例年余興のご出演を願っておりますが、
 今回も実施したいと思えます。
 つきましては諸準備の都合上、演目・
 カラオケ曲名・所要時間・出演者名など
 につき事前に左記までお申出願います。

企画担当 井伊 東吉
 TEL FAX 072-444-3227

をこせぬ壇

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔なら

坊農 柳弘報

糟糠の妻がせがんだエメラルド
 ボランテア褒美に健康いただいて
 検診の結果でケーキ食べられる
 音のない世界で手話の恋進む
 青葉風褒美にくれた万歩計
 発信音夫婦げんかに水を差し
 高すぎる理想に挑む風の音
 注ぐ甲斐なかつた子等のDNA
 半音を上げてうきうき今日の靴
 真実を言えば乾いた音になる
 あたたい指が恋しい電子音
 枯れぬよう恋のテキイラ注いでる
 計算に涙を足している女
 書留に父に内緒の母の愛
 月末の手形へやっと滑り込む
 水の音火の音母に休みなし
 蓮の花極楽開く音で咲き
 水音がぼとり独りだなどと思

良一 和夫 一風 寿美 恭昌 成子 ふりこ 恵美子 孝子 洋子 勝弘 章久 弘風 千梢 茂雄 隆子 博一 萌子

万葉の恋歌注ぐ飛鳥川
 明日はもう訣れる決意湯がたぎる
 どう工面したやら昭和子育て期
 人形の吐息をきいた梅雨の入り
 どしゃ降りを取けた褒美へ虹の橋
 はたを織る音を覗いたのが別れ
 被災地へ無情の雨が降りそそぐ
 パチンコ玉時々褒美もろてくる
 悪人に徹し極楽への切符
 寄り添って心の音が聞こえない
 飲み干してらんワタシを注ぎましょ
 ありったけの金を集めて兎小屋

ローズ川柳会 山崎 君子報

今もなお地道にくらしわるぎなし
 地に足を着けたはずだが掬われる
 人生の終着駅に六地藏
 ふる里の駅にむかしの影がある
 しなやかに時代おくれを生きている
 駅一つちがうと空気でちがう
 ベランダの花とひととき話する
 我は海の子歌って波とたわむれたい
 常ならぬ日々人の情けが染み透る
 旅に出てまた帰る駅ある安堵
 同窓会上座で目立つ年齢になり

むらくも川柳会 毛利 幸報

紫陽花も梅雨の季節を待つて咲く

卓 國治 理恵 道子 富子 朝子 隆盛 秋雄 順啓 加お里 眞理子 恰衣子 哲子 トミエ 貴代子 いわゑ 武庫坊 年代 義子 君子

あじさいの花あざやかな梅雨晴れ間
 梅雨待てど長雨続くと嫌になり
 うつとしい梅雨空見上げ息を吐く
 梅雨晴れに田畑の早苗すくすくと
 梅雨なのに子宝新芽すくすくと
 恋は他人で平行線がまだ続く
 孫が来てついでに財布のひもゆるみ
 財布にも妻のやりくり見え隠れ
 一晚で財布の中身浮気する
 ズボン替え財布忘れてレジの前
 助手席に安全ナビの妻が乗り
 人は皆秘密を持って生き生きす
 明日の日は私好みの彩にする
 冬眠と言う桃源郷は幻に
 にわか雨所によりと惑わせる
 五月晴れどなたか翼下さいな
 寝顔みてうすら笑いについ和む

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

混沌のアジアが沈むスープ皿
 鹿鳴館の床にスープの跡がある
 口笛を吹いてる顔でスープ飲む
 じゃがいもスープで和解するつもり
 食器棚飾ったままのスープ皿
 車間距離たもちスープがジャーでくる
 すっぱいスープちょっとだけ跳ねる
 スープだけ飲んで作戦練っている

ます美 久子 幸 清子 喜美 瑞枝 美保 彰 定子 信夫 俊夫 蘭水 秀夫 かずこ 愛子 秀子 英男 朱夏 登美代 順一 美花 東吉 起世子 章子 かずみ

佳句地十選 (8月号から)

小谷 美ツ千

月欠ける激しいものを身のうちに座つてる岩は岩だと気付かない好きですよ君のジョークのずれ加減ブランコの風気まくれに気まぐれに(古)洋嘯み合わせはすだあいつが噛んでいたねじ花と螺旋階段から空へ春の台詞は春が過ぎるそ散り急ぐのぞきもせず心もつげず行つた風青い実の孤独を赤い実は知らぬカリカリもウキウキもせぬ人形だ

智恵子 裕美 美義 (古)洋 正博 よしみ 森子 克枝 盛桜 幸恵

そして夏夫婦の蜜になって飛ぶやわらかく蜜を包む二人の手よかつたな昭和ころに蜜住むゼロにしてわたし只今充電中残り火を御先祖様の火と生きている燃えつきて残つた炭にまだ力白鷺の物のあわれを語る青雨の午後絵文字にこにこメルル来るよく食べてよく寝る元氣十九月巻き戻してきたらあの日に帰りたい

比呂子 万年 厚子 規代 太虚 あゆみ 栄香 史子 千枝

東大阪市川柳同好会

森下 愛論報

したたかな女で逆に酔わされる

ダン吉

若い頃弾いたギターが部屋の隅三味線のリズムに合わせエッサッサあれこれと選びきれずにまた明日要らぬ物選んでみたが捨てられずこの一票私が選ぶ信じたい森となり林となつて山荒れる似合う服選ぶ笑顔で若返る選ばれて自慢の喉も顔も売れ風すこし入れて妥協の道選ぶ

昌子 興

花柄の便箋選び良い返事

久子 雄々

お誘いのメールハートの絵文字付き若葉風誘われました乳母車誘われた歌に元氣をもらつてる誘われて魂洗う経を聴く誘う気はないがついてきた天使

笑子 房恵 栄恵 淑子 千代美 汎美 一慶 慶生 慶子 笙舟 輝恵 蘭幸

四国からお誘い杖と般若経カーブ優勝まさかと言われても折る老舗にもまさかか起きる食いだおれ家族会議まさかの義母が手を上げる

弘幸 子

正夢を信じまさか賭けてみる

敬子

遺言書まさかの時の父の愛

幸子

まさかがあつてこの世は面白いのです

幸子

螢籠六十年の手の記憶

幸子

棚田の雨昭和の螢呼んでくる

幸子

ほーほー螢あれは少女の日の私

敬子

若い頃弾いたギターが部屋の隅三味線のリズムに合わせエッサッサあれこれと選びきれずにまた明日要らぬ物選んでみたが捨てられずこの一票私が選ぶ信じたい森となり林となつて山荒れる似合う服選ぶ笑顔で若返る選ばれて自慢の喉も顔も売れ風すこし入れて妥協の道選ぶ

久子 雄々

お誘いのメールハートの絵文字付き若葉風誘われました乳母車誘われた歌に元氣をもらつてる誘われて魂洗う経を聴く誘う気はないがついてきた天使

笑子 房恵 栄恵 淑子 千代美 汎美 一慶 慶生 慶子 笙舟 輝恵 蘭幸

四国からお誘い杖と般若経カーブ優勝まさかと言われても折る老舗にもまさかか起きる食いだおれ家族会議まさかの義母が手を上げる

弘幸 子

正夢を信じまさか賭けてみる

幸子

遺言書まさかの時の父の愛

幸子

まさかがあつてこの世は面白いのです

幸子

螢籠六十年の手の記憶

幸子

棚田の雨昭和の螢呼んでくる

幸子

ほーほー螢あれは少女の日の私

敬子

若い頃弾いたギターが部屋の隅三味線のリズムに合わせエッサッサあれこれと選びきれずにまた明日要らぬ物選んでみたが捨てられずこの一票私が選ぶ信じたい森となり林となつて山荒れる似合う服選ぶ笑顔で若返る選ばれて自慢の喉も顔も売れ風すこし入れて妥協の道選ぶ

久子 雄々

お誘いのメールハートの絵文字付き若葉風誘われました乳母車誘われた歌に元氣をもらつてる誘われて魂洗う経を聴く誘う気はないがついてきた天使

笑子 房恵 栄恵 淑子 千代美 汎美 一慶 慶生 慶子 笙舟 輝恵 蘭幸

四国からお誘い杖と般若経カーブ優勝まさかと言われても折る老舗にもまさかか起きる食いだおれ家族会議まさかの義母が手を上げる

弘幸 子

正夢を信じまさか賭けてみる

幸子

遺言書まさかの時の父の愛

幸子

まさかがあつてこの世は面白いのです

幸子

螢籠六十年の手の記憶

幸子

昇

柳昌

碧

菜摘

幹子

幸

イセ

信子

孝義

和子

保州

町子

みね

当代

次根

桂香

一步

一歩

瑛子

絹子

准一

孝子

俣子

松露川柳会

小西 雄々報

人生の幸運選び花開く

残響の消灯ラッパ胸を刺す

七五三かすかに響く笛太鼓

香音

美明

三三代

したたかマダム四川省壞す
 したたかに握る百への命綱
 婦省する子へ全開の母の胸
 思い切り命を明け蟬しぐれ
 六法を開き九条忘れまい
 独り住む母へ携帯ブレゼント
 夏休み田舎買うてと言う息子
 国訛りうまい会話になる田舎
 うっかりと赤札付けて町歩く
 美しい嘘にうっかり年忘れ
 うっかりの隙間に消えた青い鳥
 仁義信ふるい男の旗じるし
 ふところの広い男の回り道
 大切にされて長男瘦せている

岸和田川柳會

土橋

房枝報

すぐ和解親子げんかは血の絆
 一言えは十を察してくれる娘等
 親が子につかえ同居も波静か
 名演技演技をしない自然体
 長編のドラマ演じて共白髪
 迫真の演技思わず貴い泣き
 指揮棒の影で小指も演技する
 おかれてる言われながらもはや八十路
 救援が遅れ倍増する被害
 娘のお産予定日過ぎて気もめめる
 仲裁が入りおかれて元の鞘

柳弘
 シマ子
 三重子
 賢子
 秀夫
 克己
 敏子
 雅文
 風子
 太一
 美弥子
 湖風
 朝子
 愛論

おかれてもいつも一緒の僕と影
 微かでも精一杯の螢の火
 病氣癒え体重計が少し増え
 年金へ微かな望み立ち切られ
 美人顔微かな造り違っただけ
 砂時計寿命微かに減る掟
 満ち足りて微かな寝息立てている
 好きですと愛してますの微妙な差
 自分史に微かな記憶ふくらます
 周平のファン人情の機微に酔う
 微かだが夏のあの日は忘れない
 みどり児の微かな寝息聞く平和
 犯人をメタミドホスは知っている
 孫三人ギョウザ作りが板に付き
 ニンゲンのエゴに餃子も嘆いてる
 北京には日本ギョウザを持参する
 父の夏ビールギョウザがあればよい

川柳ふうもん吟社

夏目

一粹報

天に星地に愛涙拭くがよい
 おかしいぞネジが一本あまつてる
 おかしいぞ隠すあたりが並でない
 そう言えばあれが潮ときだったのか
 徘徊のマークも解けて老母も逝き
 のほせやま間臭いものを持ち
 ノーマーク監視カメラが許さない
 のほせやま乗せて会議がうまくゆく

泰弘
 泉滴
 呂万
 和美
 ふみよ
 ゆい
 酔粹
 俊昭
 昭
 義泰
 ダン吉
 東吉
 幸子
 仁緑
 房枝
 希久子

おかしいぞ財布の札が増えている
 イベントに呼び出されてるのほせやま
 ノーマークされて人生気楽だよ
 のほせやま祭り近いと落ちつかぬ
 ストレスを溜めない妻のノーマーク
 おかしいぞ都合悪けりゃ老いて見せ
 僕を見て女神くるりと引き返す
 安請合いすると動悸が早くなる
 潮ときを迷い喜劇にしてみました
 愛情いっぱい堅い蕾がはじけだす
 ノーマーク油断が招く落とし穴
 ノーマークの商品エゴで売れ始め
 うまいもん展しきりに褒めて試食だけ
 温暖化野菜のできがおかしいぞ
 おかしいぞ賽銭ドロが今も居る
 嫉ける教師をなじる親の群れ
 減反へ米の輸入はおかしいぞ
 ノーマークあれよあれよと勝ち進む
 おかしいぞ嫌天下が掃除する
 おかしいぞ女やんわり攻めてくる
 おかしいぞ隣が夜逃げしておった
 身のほどを知って潮とき考える

川柳ちくだの会

岸本

宏章報

永田町数でうっちゃりするところ
 ぴりぴりと社長の目玉よく光る
 君が代がまだ生きている国技館

金子
 節子
 稔
 善夫
 清帆
 行男
 無限
 かをる
 悦子
 妻子
 志げ緒
 由美子
 孝男
 菖子
 喜美子
 春名
 穀
 虎尾
 喜子
 諏訪男
 茂登子
 一粹
 孝子
 仁子
 邦昭

お茶漬けが一番うまい旅帰り
高が小石あなどりすくい投げ食らう
びりびりの警備聖火が浮かばれぬ
幕内のまだ六割が日本人
朝青龍負けて万歳してしまふ
晴れ舞台なのに新聞記事に出ぬ
大相撲終つて時間もてあまし

川柳塔鹿野みか月

福西 茶子報

うみ鳴りも潮騒も聞き杭になる
いつだつて笑顔忘れぬ脳でいる
海鳴りに漁師の心迷いだす
体温が三十七度越えている
北斗星仰ぎ父恋い母を恋い
単刀直入核心から責める
すき間風ばかりが脳を通りすぎ
消沈の日々を支えた家族愛
熱下がり雀の声を聞く日暮れ
貝の口が開いたあけたともめている
青い美で散つた特攻策舞う
中国のギョーザ政治も動き出す
うみなりだこれから夫と大仕事
うみ鳴りの崩れる音で足すくむ
シヨートした脳が落ち着き取り戻す
ライバルに負けないように光らせる
父のうみなり猫も杓子も正座する
転居する度にうみ鳴り北の故郷

清帆 玲子 宏章 せつ子 紀子 大鯨 富貴子
宣子 孔姜子 久枝 くに子 和子 照彦 弘子 忠良 蟹郎 彩子 幸枝 ひろこ あづま 実満 睦子 菊乃 和子

やけどしそうな熱い川柳作るかな
北斗星浄土へ母を頼みます
元氣だが欲張る脳でないらしい
頭脳まだ撓むちからの森であり
うみなりを近くに軒かく漁婦
うみ鳴りに遠く被災の呻き声
熱入れて育てた胡瓜逆上がり
身に合つた杖を一本伴侶とす
ササユリに熱中をして呆け防止
海鳴りに地下指定席亡夫が待つ
私の脳までもです生きてます
十字星未だ帰れぬ母の胸

川柳クラブわたの花

西川 義明報

老年期人生の秋愉しもう
母の腕あつさり味が自慢です
疑うと周りにひとがいなくなる
肩書きが裏にも書いてある名刺
母の日に青年走る宅急便
口喧嘩あつさり敗けて妻に詫ひ
振りむけばほほえむ君がいたあの日
胸の中あつさり言えない事もある
聞こえない振りが私の答えです
鬼退治したいと願う拉致家族
空き缶も資源に変わるリサイクル
孫の泣く声を聞いてるうちが花
小さい石蹴つて一人で切る啖呵

はるお きみ子 満 諷人 汲香 永子 和枝 節子 重忠 惣子 稔 茶子 博子 愛子 ミツ子 宏至 幸枝 莊司 美はる 克美 いつぶみ 義明 宏 正春 欣子

横文字が溢れて迷う町のウツ
笑い皺ストレス飛ばす処方箋
答えはないが迷いを亡母に聞いている
初めての名刺を送る故郷の母
裏切りをまだ信じたい秋の月
フランスで食べた弁当幕の内
ワッテンポ反応ずれる老い二人
几帳面いつも四角を突いている
横綱に外国人がなる時代
日の丸を個室で見ると星条旗
今年は違ふ野村監督上機嫌
恙なく普通に暮らす日に感謝
梅雨の合間のほつかり開いた空が好き
肩書の消えた名刺で里ぐらし
追憶へ今宵ひとりのわらべ唄
節約へ流れをかえた物価高
気にかかる追伸読んで電話する

川柳塔おつばこ吟社

川崎ひかり報

荒波にもまれた強さ伊達じゃない
筋交いも入れて耐震強化する
外見で判断出来ぬ強い人
赤チャンの泣き声強い意志表示
本当の強さは胸に隠し持つ
強者にも泣き処あり鶴の声
職退いた途端妻の座強くなり
強がりと言つた留守居の子を案じ

妙子 俊美 晴美 浩三 孝子 和子 八寿子 ふりこ ますみ はじむ たえ子 美代子 耀一 知佐子 民 江 一風 はつ恵 あきら よしみ くに子 賢 弘 八重子 放任

喜寿迎え強く生きよと指図する
強がりを言つても膝が許してる
いさむ
ひかり

高知川柳社

小川てるみ報

春風が旅のプランを連れてくる
勇み足世間の風は甘くない
和江

トンネルを抜け新鮮な風にふれ
駅舎出て故郷の風とハイタッチ
憲一

春風がそつと背を押す入社式
一言が思わぬ風を巻き起こす
美々

薫風と仲良く走る過疎のバス
逆風がほどよく吹いているチャンス
幸子

優柔不断四つ角でまた迷う風
本当の自分にもどるノーメイク
和広

心にも化粧してますいい笑顔
もてなしはほんとの化粧して笑顔
典雄

世間体気にして生きる厚化粧
お化粧をすれば鏡もよく笑う
谷忠

上品に着こなし喜寿の薄化粧
横顔も写し化粧の総仕上げ
紀美子

素つぴんをみられたくない自尊心
悲しみを化粧でかくすのもおんな
京子

川柳塔のぞみ

播本

充子報

房惠

徳子

みどり

房子

初江

千里

清

悦子

もう一つ夢が足りない万華鏡
坪庭の花の歳時記まとめ上げ
生き抜いてきた足跡にある快拳

万歩計地球一周成りました
登頂の古希すぎ二度もエベレスト
赤門へ孫が合格とのメール
激戦の末に彼女をゲットする
朋上げに国境は無い星出さん
初めての電車で行けたばあちゃんち
ワンコインランチで造反は出来ぬ
ランチでも食べに行こうか年金日
お弁当ふたつ作っていく娘
新婚のランチボックス覗かれる
これでいいんだ賑やかな三回忌
差別化が民族騒ぐ元となり
もう一つ名前があつて忙しい
もう一つ親孝行を忘れてた
もう一つ足りないから人間です
方子

方子

順風

光久

桃葉

あやめ

洋子

啓子

孝子

俣子

宣子

充子

由一

妻一

雅城

黒兎

宇乃子

黒兎

長一

禮子

昭子

幹治

雪子

見清

信男

契子

ケータイが真ん中にある君と僕
年金をもらう年まで生きて逝き
知らぬふりするもどかしさむずかしさ
歌よりもよそおい競うコンクール
真ん中に祭すしあり母元氣
究極の偽装先進国日本
病院に行くしかないのに服装う
春代

柳童

久子

祥風

勇治

勝

いさむ

四郎報

高明

四郎

蜂朗

勝視

晴翠

實

輝夫

求芽報

ふりこ

萬的

啓子

知栄

ますお

則彦

美義

かずお

葉子

取つ払う蒸し蒸しスイカ真つ二つ
肥後守 器用にけずる竹とんぼ
鞘出ると急に殺意を持つナイフ
ウェディングナイフふたりでつむあたたかさ
友が逝きまた友が逝き雨静か
顔見ては私ですよと迫る妻
足音に初心の幸福感しきり
足繁く通つたけれど袖にさり
頻繁なメール心の隙覗く

京都塔の会

都倉

京都塔の会

都倉

求芽報

ふりこ

萬的

啓子

知栄

ますお

則彦

美義

かずお

アハハの仲間聞いてもらえろ愚痴の雨
 湿っぽいお方に人が寄りつかず
 無沙汰詫び酒で墓石を湿らせる
 映画館へ湿った心手しに行く
 しとしとの雨に深つめしてしまふ
 迷惑と言われてからの恋心
 企みがあると知らぬ包装紙
 親切が重荷になった恩返し
 迷惑でしょうがまだまだ生きてやる
 はた迷惑善人ぶった話し好き
 カタカナ語ボクを侵しに来て困る
 迷惑と言えぬ頼みは覚悟する
 迷惑を連れて災害地の視察

川柳塔きやらぼく

大塚 恵子報

雪の下我ぞわれどと咲き誇る
 適齢期の孫のことまで口出せぬ
 ビアノ弾く流れる音に癒される
 七十路もアツと言つ間に駆け抜ける
 砂をかみ夏大根がギリ辛に
 お花見の約束空し友逝きぬ
 パン屑に雀の遊び見る平和
 どんでん返し予期せぬ時にやってくる
 葛蒲湯で体を癒す宵節句
 梅雨入りと聞いた途端につく眩暈
 スピード社に負けるな五輪締めつける
 衣替え季節の風に合つて着る

文代 綾子 庸佑 満子 昌乃 福子 典子 とし子 石舟 宏子 孝一 輝美 求芽

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

親族で結ぶ受け隙間なし
 受けの筆薄墨に通夜の席
 受話器から楽しさくれる友がいる
 受けが済んで神の手動き出す
 口笛に試されている紙風船
 裏切られた風船ぶつんと自爆する
 振り込め詐欺受話器で獲物釣りあげる
 受話器から故郷の町が匂い出す
 三時間受話器離さぬ妻と居る
 喜んで孫誕生と取る受話器
 受け嬢終日笑顔絶やさない
 受話器から合格の声母安堵
 じゃーまたね受話器置かずまた話す
 おいでよと受話器に唾子入れてくる

天雀 なみ 寿々子 てい子 すみえ 雨 ゆき 恵子 章江 瑞枝 雪江 一路 きよし 初枝 芳生 柳子 ヒサ子 美鈴 成柳 一呑 順風 ふさゑ 花匠 愁女 井蛙

手を放れた風船ためらわず蝶に
 風船を平和の使徒として飛ばす
 ふる里の海で涙を受けける
 巧妙に詐欺師心を突く受話器
 受けの美女に使えぬ津軽弁
 受けは月見草です無人島
 肩までは酔って月夜の道をいく

長柳会

村上

直樹報

十万億土しみじみ染まる夕茜
 草むしり頼めば花芽摘み取られ
 悪友に染まった子等の道案じ
 新園児だぶだぶ服で可愛いね
 大阪の色に染まって半まだら
 食べるときサイズの話止めとこう
 弁解の余地無い食の安全は
 日傘からこぼれる笑みに誘われる
 白髪を銀髪に染め老いの恋
 僕の色染まりにくいか白のまま
 頬染めて会釈の彼女誰やった
 紫陽花が色とりどりの自己主張
 夕映えの川面に揺れる遠火花
 藍染の浴衣着て行く夏祭り
 金髪に染めておまけに針ねずみ
 天国へ行きたいけれど地図がない
 くるくると日傘も嬉し恋予感
 五十年妻の好みに染められる

黙人 岳水 花峯 慕情 一花 五楽庵 直樹 直樹 武男 明信 正一 正博 登美子 輝子 明子 マサ もこ 靖博 敬二 たけし 正子 たかし 和代

打ち上げて開かぬ花火胸にある
木漏れ日に日傘が似合う京貴船
藍染師目指し女を捨てました

遠花火もうあの距離に戻れない
せちがらい世相吹つ飛べ大花火
弁解と誤解はするな父の言

喜寿もふと心ピンクに染まる刻
大筒に尻つ放り腰で火を付ける
ひと花を咲かす明るい髪にする

ひまわりが聞いた日傘の立ち話
染まらない自負が孤独を深くする

川柳若葉の会
宮崎シマ子報

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

弱いところも見せ合つて暮して
程の良い弱者の位置にいるニート

青空に吸いとつてはしこの弱氣
流れくる桃は移り氣向う岸

本棚に開かずの本がたんとある
座持ちする主役は酒に弱い妻

国会に籍おく叔父は役たらず
国会のアナタの昼寝見つつけた

国会なし居酒屋タクシーマごまごす
国会のボケとつっこみ笑わせる

川柳ささやま

遠山 可住報

現役を退いてやさしいただの人
人心が下がり犬猫様が付き

純子
美緒子

現役の頃はやっぱり金あつた
現役の入学願う絵馬の数
政治家の敬語に凄じ刺がある
好きやねんどの花よりも孫が好き
現役という響きあり頑張れる
敬語には敬語で接し距離を持つ
新聞の皇室敬語変つて来
現役の妻の座去つて女なり
無理してららしい敬語が嗜せている
百歳の現役感謝を忘れない
きつちりとけじめのつかぬ血の絆
日本語に占める敬語の美しさ

二英
美紗子
靖子
多美子
開子
照代
かほる
幸子
富美
美智子
哲男
可住

南大阪川柳会

吉川

寿美報

臍帯血人を助ける命の灯
臍曲りそれなり根性持つ男
ブレイよりへそを見に行く女子ゴルフ
へそが茶を沸す構えの繁昌亭
どんな風吹こうと弱音吐かぬへそ
信用のおけぬ男だへそがない
とんぼりのへそがなくなるくだおれ
黒字でもボチボチでんな低い腰
努力した甲斐あり黒字少し増え
家計簿の黒字は妻の努力賞
そこそこの黒字そこそけちつてる
荒れ肌に願いを込めてコラーゲン
ささくれた指に絡まる蝶糸

なぎさ
萬的
清

恋したら荒れた言葉も取れて来る
隠し児がでてきて荒れる遺産分け
地球儀が肌荒れ起こす温暖化
竿竹屋ひるねの頃になると来る
うるさく言ふその内みんな後期だよ
阪神が勝つた負けたで騒いでる
惚れたかななるささい軒気にならぬ
二代目にするさく言える社の彦左
うるさいが熱血教師みな慕う
手作りの梅酒が決め手プロポーズ
メイドイン妻の料理に飽きが来た
ピリケンさんアメリカ生れだったとは
美人だが訛りで分かる河内産
宇宙にも日本の家が出来ました
メイドイン俺の自慢の娘が嫁ぐ
お互いに認め合つてるへそ曲り

洋
勝弘
尚士
栄吉
東吉
克己
郁夫
更紗
あや子
修

川柳茶はしら

板山まみ子報

俺だけは違うと言つてみたけれど
カーナビの労い受けて無事帰宅
答弁にノータイ余計軽く見え
手作りがふんぞりかえる棚の上
喜んで頂戴します灘の酒
良い方を貰いたいけど言い出せぬ

秀水
美千代
かつ子
幸子
週行
まみ子

西宮北口川柳会

黒田 能子報

飛行船ゆらり吉野は花の雲

正和

老母ひとり棲む故郷へ雲奔る
 青雲の夢を詰め込む塾靴
 雲つかむような話で乗せてみる
 家中の祈り届かず野辺の雲
 全身で笑ってくれるから可愛い
 老母元氣笑い袋を何時も持つ
 何時まで笑い絶やさぬこの絆
 知らず知らず笑みがこぼれる嬉しい日
 背を向けて無口で論ず親の愛
 お若いと言われ背中がむず痒い
 幸せにちっとも気付かない猫背
 背中掻く母の手やさし懐かしい
 腰痛をなだめこつこつ草むしり
 こつこつがドンドンとなる朝トイレ
 靴音をききわけ犬は軽く吠え
 変り身の早さ背中隙がいない
 向けた背がはつきりノーと言っている
 こつこつがすぎて小さくまとまった
 豊満な魔女で呪いがかからない
 竹林に迷いゆらりと風の影
 前以て約束はせぬ余命表
 にこり酒注いでおもしろい話する
 二番手にいると前後がよく見える
 のんのと母がひろげた羽の下
 二人書いた絵馬の愛の字薄くなる
 溺れても助かるところで溺れない
 三日月が我が家を覗き動かない

嘉代子 折杭 基輔 キヨミ 哲男 江美 五月 光子 わこ 松煙 萬的 弘子 見清 いたる 静子 千代 てる 直 朋月 哲子 美籠 奮水 光久 求芽 孝一 忠 歳子

一人じめするにはもったいない虫
 少しずつ積んだ歳月が光る
 紀乃

川柳花の輪

妻谷 重風報

自分流強く叱つて抱き締める

ミヨノ

蛙の子は蛙と叱るたび思う

克衛

叱られも叱りもしない老いの日々

善栄

叱れない我が振り真似る子の仕草

泰子

充電は次のチャンスのためもの

隆子

あのチャンス今の僕なら逃がさない

重風

大物とけんかもしたね幼少期

やすの

大物記者ベン先一つで人を切る

一幸

大物とやつとわかつたお葬式

音成

大物と言われつづけて平のまま

薫

わかあゆ川柳会 (前月分) 松本はるみ報

わが余生斜めに見ている天の邪鬼
 初物でまた長生きが出来そうな
 毎日がはらはらするよな国となり
 服新調鏡へ右むき左むき
 余生とや夕陽のなかの石仏
 やさしくて寂しくなった春の宵
 一つずつ忘れて余生面白い
 反論もせず椿の花は落ち
 反論も三分の二が蓋をする

好栄
 ちよえ
 聖子
 伸子
 はるみ
 恵美子
 かつ子
 博利
 清泉

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

百歳を生きて猫背のやさしさよ

かつ子

やさしさと頑固さ持った速い父
 まだ若い気分が抜けぬフアツシヨ
 用心の下をくぐった隙間風
 お食初め可愛い茶碗揃え待ち
 花の日もあつたわたしの方華鏡
 動くからあらぬ疑いかけられる
 綱渡りハラハラハラの八十年
 長生きも自己責任と諦める

好栄

ちよえ

聖子

伸子

はるみ

恵美子

博利

清泉

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

領いているのはさくらかも知れぬ
 うなずいてあなたのつばにおちてゆく
 天ぶらが揚がり召集かけている
 人生の実話私が紡いでる
 多数決不足あつても領いた
 ゴチャゴチャと仲々整理出来ぬ城
 ゴチャゴチャが続く国会まだ続く
 週刊誌尾鰭がついている実話
 一品ごとうなずいて食う迷い箸
 噂とは実話以上に面白い
 電話から領く返事良く見える
 領くと納得したと勘違い
 領いて相づちを打つ母の背な
 語り続く実話も子等に響かない
 はやほかと抱えた業は知らされず
 実話には小説になる種がある
 ひな芥子の領きあつて陽を透す

美ツ千

尚子

ひろこ

信

和子

京子

かつみ

龍枝

天人

幸恵

芳江

あづま

雄人

睦子

孔美子

和枝

ササユリが頷きあつて咲いている
偽じやない賞味期限も大丈夫
会席膳たらいまわしや揚げなおし
かこめかこめいつも頷くのはわたし
宣子

城北川柳会 伊達 郁夫報

最初だけ鬼も程よい温さ持つ
タイガース負けても勝つても旗を振る
演歌まで外国人に乗つ取られ
ポリシーを貫き味方減つていく
夏帽子ちよつと気どつて歩を進め
美智子
子はピアス親は借金穴だらけ
千の風妻のあこがれ秋サマに
賽銭箱音聞き分ける神仏
雨模様やつと気がつく忘れ傘
知らぬ人にも勇気を出して声かける
遺言書上手に書いてから達者
子の無理は何としてでも叶えたい
吉兆が汚したなにわの食文化
大気汚染通天閣が泣いている
アジアとの絆やつぱり大阪だ
世話焼の大阪弁にある温み
使わぬと役に立たないピアス穴
七十五になれば抗議のピアスする
うまかつた使い回しと知らなんだ
げんこつの痛さ覚えて子は育つ
好物を黙つて出した仲直り

重忠 螢
石花菜
求芽 高栄 昭子 ひさ乃
美智子
勝弘 桂作 章久 麗
ルイ子 昭子 賢子 倫子
柳弘 東吉 萬的 和夫
正修 弘風 とし子

割り勘で長く続いている絆
奥の手を出さずに済んで物足りぬ
舵取りが兎に角うまい妻の船
無理をした時代があつて今日の幸
絵に描いた幸せならばたんとある
脳天にピアス涼風入れてやる
うまいこと言うて夫に家事させる
繁昌亭どっこい浪速生きている
病人が無理を言わないのも辛い
翠洋会 安土 理恵報

翠洋会 安土 理恵報

とんぼりの老舗の灯ひとつ消え
期待して買物に出る午後六時
祭り果て夜店の金魚ほつとする
光源氏も坊ちゃんも居る古本屋
マニユアルに使いまわしは書いてない
志魂商才のれんを守る八十路坂
コンビニにまた化けていた街の角
とび込んだ店に昔の彼と会う
主婦業の店じまいする風邪もよい
愛嬌も度胸もあつていい女房
あの時に度胸あればと悔やまれる
優しさが男の度胸だと思ふ
子が三人生き抜く度胸くれました
度胸据え内部告発するパート
我が家ではパパは愛嬌ママ度胸
ほつとくか切るかと度胸ためす医者

一步 典子 志華子 集一 千里 朝子 明子 たもつ 順三
満作 春 水昇 昭子 げんえい 久峰 尚士 舞夢 楓楽 浩二 茶々 集一 さと美 富子 恭昌 蕉子
お隣のソプラノ聞くとじんましん
左耳が痒いぞきつと何かある
福耳が痒い良い事あるのかも
そのうちに何とかなるさこの痒み
背の痒み介護の母に手話で聞く
曾孫みて歳しみじみとかえりみる
心にも贅肉ついてきたみたい
音がするしない蓮の池の傍
楽しい日雨がリズムにのつて降る
地球儀を回し息子の赴任先
正確に暑中見舞を書いてる
実力も水着次第となる五輪
黙祷へひときわ高い蟬しぐれ

尼崎尾浜川柳会 田原 宏一報

この願いどこまで届く笹まかせ
ゆつくりとセミが生まれた暑い夜
テレビから台風予報無事願ひ
泳ぎ疲れ眠る子に肩を貸す電車
遠吠えと思ふと愚痴る物価高
一人旅バスの中から波の花
告白に類染めた日よ純な日よ
誰に似た親も手こずるへそまがり
最近波長が朝をうたつてる
味噌汁の波紋が朝をうたつてる
お願いと立つたついでを頼まれる
凹凸のコラポで波長ひびきあう

宏一 政江 雪菜 里江 正治 よし子 美代子 亀与子 五月 孝一 耕治 美義

立ち泳ぎして様子見がまだ続く
 ゆったりと世間泳ぐも面白い
 ほほどでええやないかと天の声
 波の音地球があやす子守唄
 七夕の笹に願いが踊ってる
 真ん中の父が重くなっている
 茶柱が立つてるお茶をぐいと飲み
 人波の中を孤独も歩いてる
 立つ位置で変わる風向き風の彩

川柳さんだ

北野

哲男報

水しぶきあげて北京へ夢は飛ぶ
 健康な子供が上げる水しぶき
 泥水をかけ合い仲がよくなる子
 起きがけの冷水コップ今日も無事
 雷に待ったをかけた血圧計
 血圧や昇り極めて南無阿弥陀
 血圧が高そうだから測らない
 ゼロ四つもう血圧が上り出す
 青葉から枯れ葉マークもすべてエコ
 身体にもエコにも良いと箒持つ
 お魚がほとと息原油高
 やんわりと論すが聞かぬ反抗期
 まだ残るケシツブほどのころろざし
 あでやかに誇る紫陽花つゆに挿す
 闇魔様偽装の舌を抜き飽きる
 熟考の結果がなんだこれしきか

紀乃 江見 かずお 靖鬼 野薫 比ろ志 朋月 鹿太 美籠 婦美子 忠 歳子 美紗子 茂山 見 正和 章子 雅司 一泉 哲夫 好文 開子 ちあき キヨミ 二英

物価高赤字続きで困ります
 あすと言う続きがあつて生きられる
 昭和一桁使い回しをして育ち

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

初めての手作り覚悟して食べる
 手作りのセーター貰い気が重い
 手作りの平和誰にも奪えない
 年金はオレの人生の通信簿
 煙草の輪よつほど自信あるらしい
 ぶかぶかと浮かんで消える恋心
 ライバルに浮輪を借りた恩があり
 矢印の反対側へしゃばん玉
 金櫃もぶかぶか浮ける水着です
 艦をはずし風にまかせる定年後
 後期高齢ぶかぶか浮いて群れの中
 リモコンに操られない竹トンボ
 ティンプルにリモコン並べて独りじめ
 マザコンが仲々切れぬ母の糸
 リモコンに頼り切つてる落とし穴
 リモコンで宇宙をさばく人間よ
 強力な妻のリモコン幅さかす
 翔んだ子へ母のリモコン届かない
 ふるりの空気が急かす腹時計
 止まつてる時計あの日を忘れない
 まだ白紙時計は容赦なく進む

順子 千代子 哲男 光男 ちづる いさお 美喜 重人 喜久子 りつえ 猿杏 六点 章司 久仁子 一屯 正子 恵子 一壺 敏

砂時計ちびちび記憶やせていく
 ちくはくな時計合わせてきた夫婦
 せつかな人の時計がよく進む

サークル檸檬

吉田あずき報

幸せの形に愛らしく太る
 断つてパチが当たった飲む誘い
 誘い水意外なことを話しだす
 赤ちゃんの大きな欠伸笑み誘う
 渡らねば大人になれぬ橋がある
 ところどころ風という字の句読点
 人間のルールも知らずゲーム狂
 誘われてすこし期待のコンバクト
 同じ事思いつつも曲り角
 後悔はモラルでなくて稼ぎ方
 行間に思いあふれるお人柄
 句会への誘い文句は酒がいい
 屑籠にときどき花をさしてやる
 後期など言わせてなるか万歩計
 チャンネルを変えても追つてくるニュース
 一日一争活力源になつてゐる

扶美代 みつこ 美代子 扶美代 昌紀 美籠 みつ子 光久 義子 あずき いわゑ 希久子 清生 たもつ 哲夫 遠野 楓楽 房子 蕉子

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

くよくよも夢も明日も風まかせ
 しょうもない事に悩んだ胃の痛み
 くよくよを切り捨て秘めている野心
 悦子 庸佑 一知 泰子 フジ 敏 智三 真里子 寿子

くよくよを元気にさせた誉め言葉
 前向きに生きるくよくよなどしない
 くるくると剥がれる悪の積み重ね
 反抗期くるくるばあと口答え
 巻きついて離さぬ豆の蔓の意地
 回り舞台はいまどのあたり蟬の声
 縄電車くるくる私に駅がない
 妻の笑顔我が家くるくる照らしてる
 心くるくる僕も私も風に舞う
 大雑把に敵も味方も包み込む
 二度とない今日を手抜きはしたくない
 晩学へ手抜ききの道を引き返す
 人づくり手抜きできずに鬼となる
 愛情も水割りにして飲ませよう
 残り物盛り付け替えて手抜きする
 手抜きしたつげが尻尻の皺になる
 年の功手抜ききの壺を心得る
 正直に言えぬ哀しみ切りきざむ
 正直な時計に人は動かされ
 正直なお茶だ素直になつてくる
 内部告発悲しい決心した味方
 正直が取り柄の翔はぬ男です
 味方から欺く心見抜けない
 正直に生き一本になる紫雲
 正直な月日に脈が乱れ出す
 敵味方流れるものはみな同じ
 誰も知らない汗に正直なグラフ

紀子 三喜夫 英子 よしこ 俣子 輝子 裕美 怡 大輪 克子 保州 富美子 泰女 夕胡 謙 めぐみ 准一 徑子 美子 小雪 紀久子 三男 豊太 和香 和子 順子 緑良

川柳塔まつえ吟社

三島 沁丘報

楽しみを奪い年金記録ミス
 自分発楽しい明日にしなければ
 常備楽楽しい旅のお供する
 苦しさも明日の楽しい夢を持ち
 苦も楽へ笑つて送る母の知恵
 ひと坪に楽しみという花が咲く
 アナログの時が流れる渡し舟
 おとめ座の舟でしし座を掴まえる
 舟人の沖の小舟は波高し
 屋形船旅の思い出一つ添え
 幸せの舟だスピードあげていく
 リストラに舟は本籍地へ向かう
 大騒ぎ蠅一匹を母が追う
 無くなった傘に未練を残してる
 温暖化人間だけが騒いでる
 酒に罪させて馬鹿云々ついでる
 注射針白衣に子等の目が騒ぐ
 喧騒の中で子供の背が伸びる
 極楽の庭には星が降つてくる
 明日もあるいのち夜空に手を合わす
 独り居に夜空の星と対話する
 月光の中を梯子がおりてくる
 望郷の夜空煙く北斗星
 戦場で夜空見上げた過去しのぶ
 背を曲げて曲げてまだまだ欲がある

叮紅 静恵 政子 ちえこ 幸子 ちかし 柳歩 小生 多喜 蘭水 桂子 和歌子 禮子 たけし 茂美 房子 治代 螢 きみえ 多賀子 薩 スズコ 長吉 玲子

曲がつてもすぐ正そうね影法師
 知恵袋重すぎ腰が曲がり出す
 聞かせてもウンと言わない臍曲がり
 世の乱れ性悪説に曲がつたか
 臍少し曲げた二人の無言劇

倉吉川柳会

竹信 照彦報

サミットはドンが握手で腹さぐる
 サミットで堂々綱引きして帰る
 サミットはどうあれ花の苗植える
 サミットの洞爺私の故郷よ
 我が家でもサミット開け節約の
 神様は減多に姿あらわさぬ
 願ひ事減多に聞いてくれぬ神
 祝言は減多に言わぬ高齢者
 須磨明石減多に読まぬ源氏読む
 泣き事は減多に言わぬ高齢者
 独り居に減多に笑うことが無い
 バイク事故死出の旅から生還し
 ガンコ爺減多なことて妥協せず
 ふぐ刺身減多に口に入らない
 世の中が悪いと人を殺すのか
 問題は境界線にいるメタボ
 問題はきつと水着が悪いから
 問題はお前自身と追い込まれ
 問題にならぬ愚痴だと笑われる

日出子 紫見 注湖 知恵子 沁丘 賀寿恵 節子 和子 風露 完司 和枝 石花菜 瑞子 美津恵 よしえ みちる 泰輔 京子 螢 祐子 日出子 萩江 鬼一 睦子

ああ無情拉致問題の先見えず
嫁して十年まだ難問を解いている
重たくてとっても軽い夫を見る
天地をも動かす裏のアブク銭
青空がとっても好きな車椅子
そんな事とても私に出来ないわ
中国のうなぎとっても怒ってる
寝ぬながらとても手がぬめ着物展
とってもきれいな波に写ったあの夕日
漁火が消えて真つ暗闇の海

岩美川柳会

石谷美恵子報

ペンネーム売れて本名忘れられ
本名は存じあげないペンネーム
師の一字貰ってつけたペンネーム
画数もゴロも程好いペンネーム
イメージがペンネームとは違う人
根ぐさをしたか芽の出ぬペンネーム
別荘の表札に書くペンネーム
海草の名前をつけたペンネーム
ペンネーム素敵で面を浮かべ見る
停電は電気が疲れたのであろう
サミットが制度疲労かままならず
気疲れも二人になれば欲も出る
疲れたらぐっすり眠るのが良薬
疲れたと言うけど口はまた達者
人間に青い地球が疲れたす

悠子 茶子 康子 次男 重忠 由紀子 けいこ 喜美子 龍枝 照彦
稔 公乃 きみ子 茶子 一京 一瑠 節子 かつみ 和子 はお 圭一郎 睦子 孝男 よしえ 葛子

疲れてるだらう軒がいと嬉しい
蔭口のあいづち打つ疲れます
癒し糸といわれる夫に疲れます
キーホルダーの紐がちぎれてからの乱
商品券あぶない紐がついている
喝采をあびくス玉の紐をひく
遣伝子の紐でいのちを紡いでる
喋り過ぎマスクの紐がずれてくる
急ぐときいつも靴紐解けてくる
どの子にもつながっている母の紐
二人三脚紐に無器用喧われる

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

汗出して出して五体の毒を吐く
よろしくと生きがい見つけ仲間入り
意味深なあの一言が眠らせぬ
出来たての命を抱いた日の記憶
こころから許す手と手があつたかい
鈴虫が生まれる文月の間に
両手を息で温め今朝も夢描く
勇退へ日は燦燦と夢をくれ
この汗はきつと私を裏切らぬ
若者よ一汗かこう蟹工船
ポランテアいい汗流す今日もまた
どろどろになって遊んでいる無邪気
再会の握手は両手対両手
十指みなキラキラさせて夢掴む

幸枝 清帆 幸安 蟹 完司 重忠 忠良 蟹郎 たぬ 雅女 美恵子 加央里 榮子 浩三 朝子 賢子 秋雄 耀一 一風 いさお 紀雄 幸男 寿鶴 欣之 あかり

その時のために鍛える両手足
赤んぼが泣いてるばあさん笑ってる
老母の背にいつもわたしという重荷
弥生 柳伸 アキラ 生

米子住吉川柳会

渡辺多美子報

それぞれの楽器なだめる指揮の棒
朝夕に祈る心が身を守る
オリンピック水着が競う金メダル
木漏れ日を切りつつヘアピンを帰る
ときどきと予報が言った雨が降る
七五黄泉行きの発車です
セレブ猫油断をしても餌を狙わず
日章旗北京の空を待っている
すみえ

岬川柳会

八十田洞庵報

百点の答に見えた落し穴
解答は白紙でもよい合格す
お茶誘う友と語りいりフレッシュ
誘い出来る取りの輪に光る汗
お断り出来ずにお酒もバスも酔い
甘い水こちらと詐欺が来て誘う
幽玄の世界へ誘うはたるの灯
小雨降る心配よそに友つどい
素描する目が活き活きの我が師なり
問わずとも答がわかる老いのしわ
高齢者乗るも乗せるも安全運転
傷口の噂を好きな壁の耳
令子 圭子 櫻琴 茂平 富美 東吉 蛙城 貞夫 洋子 富美子 洞庵 和香

疎遠でも友情つなく電話口
空っぽかも知れず頭を振つてみる
気の毒に蛙追い出す土おこし
腰痛にリハビリ誘う老い仲間
許したらしい父は黙って座をはずす
悦子 俶子

あかつき川柳会 山本 柳昌報

建立を見せたい一人正坊氏
大阪維新赤字のもとはそのまんま
鶴杉半世紀経て陽の目見る
若者よ蟹工船をもっと読め
有明海水門あけてムツゴロウ
ケロイドがじくじく痛みだす夏よ
G8豪華な食事だけしたの
G8見事に描く抽象画
テレビに出知事に成つても顔をうり
故郷のうなぎ中味は他国籍
しがらみが黙々疼く白い闇
もくもくと歩く足許笑い出す
煙吐く汽車で出征したまんま
碁盤からあの手この手が駆け巡る
もくもくと闇の雷が日の目見る
まだ青い主張ですねと妻が言う
その昔フランスデモでした主張
顕彰碑建立明日は吃度晴れ
北極熊の死を見て明日を読む
医者休み明日は降ってもかまわない

年子 和美 覚治郎 悦子 俶子 房男 鈍甲 明水 紀雄 美世子 朝子 柳昌 廣子 美智子 シマ子 柳弘 富美 哲男 君代 賢子 東吉 一步 ルイ子 正 和雄

頑張れば生命線が伸びてくる
手配書の顔がどうして僕に似る
目を見つめやさしく語る手話の指
温暖化を涼しい場所で論じ合う
働いていますと蟻は列を組む
改善の余地リーダーが吊るされる
いやなことあるのか川が蛇行する
偶数が好きで決断力に欠ける
少数派に落ちて主張が冴える
集一 克己 美花 昭 理恵 歌子 喜八郎 桂子 ダン吉

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

絶好のチャンスだ闇が深くなる
程ほどの雨に誘われかたつむり
誘われたように妻には言っておく
受話機さえ持てば元気なおばあちゃん
親の意に背き旅立つ無人駅
ころころと笑つて母はやわらげる
節約も勿体ないが先にたち
誇るもの一つだけあり母となる
善人の仮面を脱げばでる疲れ
故郷の訛りかすかに聞きわける
さそわれて蝉もからぬぐ祭りばやし
また電気ついてると妻小うるさい
水道代節約できる無洗米
威圧感が軸が微妙にぶれていく
デパ地下へ缶ビール手に暑氣払い
疼く度歩幅だんだん合う夫婦

重人 高栄 石舟 郁子 庸佑 美智代 タミ 夢 満寿巳 尚士 都代子 萬的 勇治 佳恵 寅次郎 玲子

夏バテの犬と散歩を誘い合う
節約と思つていない麦御飯
雑踏にまだサヨナラが見えかくれ
度の過ぎたケチが孤独の風に合う
コンパスで夢を描いた少年期
梅雨明けるマナーモードを解き放つ
小さな嘘笑つています青い天
泣きたいムードふいに笑えてくる不思議
渡る瀬も浮かぶ瀬もあり生きてます
つましさを卓袱台に見る小津シネマ
口角泡の場をコーヒীর香で鎮め
梅雨空を抜けると発芽する頭脳
挨拶がすめば便箋よく喋る
無我夢中のときはどなたも美女になる
子が崩す積木を今日も親が積む

六甲川柳会 伊勢田 毅報

遠き人ひそひそひそとテレパシー
片恋を七夕さんに結びつけ
火も水も足りてふつから飯が炊け
水臭い仲をお酒がカバーする
低きへと流れて居場所探る水
百葉の長に負けじと朝の水
水割りで心を癒す至福どき
かたくなを流せる水はどんな彩
一滴の水に世界が癒される
水と油でよい関係の二人です

巴子 宇乃子 見清 美義 遠野 幸雀 孝一 葉子 美籠 十八娘 肋骨 早人 求芽 則彦 千代 毅報 みつ子 いわゑ 無限 茂 和郎 政一 美恵子 寛子 嘉代子 美穂

迷つてゐる私をおいて風が行く
人生は行こか帰るか迷うのみ
行く道を今日の気持が色付ける
行く道を自分で決めて今がある
行く先は浄土というのが神まかせ
どうします行くか戻るか行者道
バラソルを閉じて二人の夏が行く
願ひごと多くて悩む天の川
陰ながら事故のないよう子を守る
白内障手術も終わり日本晴
デパートで値札見てもすぐ回れ右
古希過ぎてまだ迷路から抜け出せぬ
大粒の涙は明日のエネルギー
セールの電話からかう午後独り

川柳塔打吹

野口

節子報

能子 孝子 淳子 忠貞 基輔 武彦 千賀子 史郎 繁義 春香 穀久 楓楽

床の間に飾つておいた妻一人
アフリカの大地を飾る大相撲
しあわせを飾る雑巾がけをして
もう飲もか五年飾つた銘ワイン
隠し金あつてぼつくりなど死ぬぬ
浮気ぐせ隠し通せぬ妻の勘
へそくりがよく隠れんぼして困る
石一つ投けても海はかくすだけ
隠したはずのウナギやあきあきざだず
親指を内に隠して立向う
尻出して頭隠しているうなぎ
コビーとは逆も書きたい人生譜
逆風に乱れた髪をまかせてる
逆指名されてつれ添い五十年
逆立ちしても鼻血も出ない素寒貧
奥さんに逆らつて得何もない
逆風の中でも笑う高齢者
ファッションで上着の上に下着着る
逆転の女胡座をかいている

川柳塔なら

坊農

柳弘報

幸子 小生 蛭 美知恵 孝恵 美美子 龍枝 美代子 やえ 滋 石花葉 きみ子 和子 善江 みちる 義人 完司 芳光 節子

エレキ吼え乱舞で幕を引くライブ
イベントが済んで赤字に泣いている
ピーヒヤララ聞くとお尻が痒くなる
イベントへ救急車が来て止まり
きずな絶ち青天井という孤独
口紅へハッピが似合うギャル神輿
パーゲンのイベント熟女ひしめいて
滝の汗動き者の父でした
滝壺に魅入る祈りの手を合わす
国境線で命を揺するナイヤガラ
神様の傑作だらうナイヤガラ
天井の邪気を許さぬ仁王の目
マドンナの誘いへ老いの血が騒ぐ
騒がれた時もあったよ総入れ歯
ルネサンスの栄華を語る天井画
あの世への旅のイベント企画中
車椅子も踊る阿房になった夏
満天の星天井に寝る大地
はばまれた想いが滝となる逢う瀬
暁の女神オーロラ舞い給う
天皇は騒いだことはないだろう
無になつて滝壺に立つ罪の数
ホスピスの天井天使が笛を吹く
山鉦に夫婦喧嘩がからみつく

堺川柳会

河内

月子報

完次 萌子 弘風 茂雄 成子 孝子 洋子 一風 恵美子 國治 秋雄 和夫 千梢 良一 富子 真理子 朝子 寿美 隆盛 憲子 弥生 理恵 道子

飛び込んだ店に地酒と美人ママ

和夫

まぐれとは思いたくない美女の妻
裁判官どうかまぐれがないように
喋ったら噴火しそうな胸の内

古時計まぐれのように時刻む
ホールインワンは確かにまぐれです
地球から竹の子宇宙めざして

優勝へまぐれじゃないと走る虎
見て聞いて書いて読んだら忘れへん
まぐれだと承知で通うパチンコ屋

住まわせて貰う地球だ大事にしよう
よく喋りますが演説できません
オーロラや虹よ地球は演出家

お喋りが静かになつた急な坂
まぐれだなわたしが生きていることも
地球から星の王子へラブレター

私にはまぐれ当りの主人です
寝そべって地球の裏のニュース見る
宇宙から見れば地球はゴミの星

地球人宇宙たがやす基地つくる
地球ごとあの世へ行くのまだ早い
九条の袋で地球つつみたい

地球儀で行き先探すハネムーン
六法より重い地球が病んでいる
温暖化地球まるごと蒸し上がる

宇宙から眺めた地球まだ青い
喋るなど言われる前に喋ってた
蜜柑山輝くばかりわんさ穫れ

鐘造

りつえ

玄也

篤子

五月

千代

公誠

扶美代

朋月

俣子

みつこ

つづや

梓

かりん

見られてから仲のよい私達
共存は出来んと地球おこり出し

川柳塔すみよし

岩崎

公誠報

うれしいね新発足の仲間入り
真心のキャッチボールで生んだ愛
金という魔物が偽装生み続け

今度こそ男子を生むとむむ嫁
もうひとり生んで欲しいと国が言う
着メロが生む友情の大きな輪

北京への切符努力が生みわける
八月の怒りを生んだきこ雲
気休めに万能薬をのんでいる

新記録を生んだのは汗念を押す
七人も生んだと母は笑つてる
真っ白い紙が時には火花生む

始発駅なんど万歳したことか
お部屋から一歩も出ない万歩計
万も笑えるように保険金

住めばみやこ無味乾燥な都会でも
住み慣れてきたんだ風も温かい
四世代同居が今の僕の夢

わたくしの恵方あなただの住むところ
警官の欠伸している町が好き
酸欠の街に住み慣れ詩ができぬ

吉相と言われお金に縁がない
地球とや人科居るから住みにくい

天笑

月子

東吉

朝子

和夫

明江

尚士

希久子

柳伸

朱夏

美籠

ダン吉

太郎

いわゑ

長電話速く住む娘を近くする
離婚せずまだ暮らせてる内は吉
号令がうまい我が家の吉祥天

前向きに生きて毎日吉にする
一日を吉にゆつくり朝ごはん
人間に生まれたことが大吉だ

吉日の雨もつと降れすみよしに

川柳塔すみよし (前月分) 岩崎

公誠報

迷うてます楽しんでます試着室
もう少し迷っていた花の道
迷わない言つた後から迷つてる

記憶力たどりながら迷い道
原点にかえつて迷路から抜ける
迷いすぎどこを向いても千の風

順調に来たのにいつしか迷う道
いけずしてカーナビでも迷わせる
迷いつつ入れた一票無駄になり

いつも来る駅でひととき迷子なり
カーナビで後期高齢地獄行き
不惑から二十も過ぎてまだ迷う

迷い子札つけられそうに物忘れ
迷つたが選んだ人と五十年
性格の悪い美人に決めようか

不器用に生きてまだまだ迷つてる
逢いましよう決めたら迷い消えました
迷いからさめると人間強くなり

見清

舞夢

蕉子

たもつ

月子

(矢)五月

天笑

桃花

ヒロ

定子

美籠

正太郎

幸子

(奥)五月

あるがまま生きて心に迷わない
迷ったら元に戻ってやり直す
相植を打たぬ迷いが顔に出る

川柳ねやがわ

籠島

恵子報

才能はないが笑顔が自慢です
九十六回誕生日の夜が明ける
ポーナ스에孫を運んだコウノトリ
節約がやつと芽を出す物価高
割り箸の音にふたりの目が笑う
程ほどに空気を抜いて長らえる
休刊日今朝の私を持って余す
ポーナスのふり分け妻が握ってる
目が覚めて今朝のメニューを考へる
嬉しいなあ妻のテンション高い今朝
生きていくしかないんだこの暑さ
ほしい芽が伸びず雑草だけ元気
例外かユニークなのか落花生
南極の資源を探す世界の目
はんなりと岡部伊都子がいと昭和
体操して今日の老化を遅らせる
幸せか否か昨日と同じ朝
目玉焼き今朝もふくらつつがなし
例外へ蟻一匹の自己主張
今朝になって夕べの僕が見当らぬ
ペンギンが拉致されて来た旭山
幸せに目覚めた今朝の陽に感謝

篤子 裕之 公誠 集一 一笑 弘風 とし子 郁夫 仁清 博泉 さち子 じゅんこ 銀杏 かすみ 茜 ルイ子 純甲 一風 賢子 朝子 たもつ 弘一 麗

今朝起きて顔があつたと撫でてみる
例外をつくる失敗からつくる

ローズ川柳会

山崎 君子報

氷解と言うがしこりを残す声
洗面所うぬぼれ鏡笑つてる
薄水を踏んで渡った川もある
枝豆の緑がうまい夏の膳
我利我利と地球をかじる人類よ
氷まくら母のやさしい手があつた
かくれんぼ鏡のなかに遠い姉
おもてなし水茶喜ぶ不意の客

てゐる
みつ子
哲子
トミエ
貴代子
いわゑ
義子
君子

第50回記念

和歌山市文芸まつり作品募集

応募内容と資格

一般の部

川柳2句・俳句2句・短歌2首
必ずハガキにて応募のこと
住所・氏名・電話・部門を明記
〒六四〇一八二五八

送り先

和歌山市広道一〇第2田中ビル
和歌山文化協会内「文芸まつり」係

応募料

無料

締切

9月5日(金) 必着

表彰式

10月26日(日)

会場

和歌山市発明館6階 多目的ホール

第39回奈良県芸術祭参加

川柳塔なら創立10周年記念川柳大会

日時 11月6日(木) 12時開場

会場 締切13時30分 ハンドベル演奏

王寺町「やわらぎ会館」4階ホール

電話 0745-315555

参加費 1500円 懇親会4000円当日受付

兼題と選者 各題2句(欠席投句拝辞)

(青) 土田 欣之(平城の会)

(似) 木本 朱夏(川柳塔)

(良) 新家 完司(川柳塔)

(志) 松田 俊彦(奈良青傘)

(なら) 河内 天笑(川柳塔)

※:なら・ならぬ・ならず・並ぶ

ならう 等「なら」を詠み込む。

兼題とは別に自由吟1句出して下さい。

昼食はすませてお越し下さい。食堂・

ファミレスあり 記念誌・記念品呈

「川柳塔なら」創立10周年記念川柳大会

実行委員会 米田恭昌他十名

連絡先

坊農 柳弘 090-7751-3864

中原比呂志 080-6116-3655

後援 奈良県・川柳塔社

第58回岸和田市民川柳大会

日時 10月19日(日) 12時 開場
会場 岸和田市立 福祉総合センター
(072-438-2321)

お話 「柳人と俳人」
山本蛙城氏(岸和田川柳会)

兼題 各題2句 出句締切13時、披露14時30分

「地球」 村上 直樹 選
「奇跡」 小林すみえ 選
「理想」 川上 大輪 選
「のんびり」 中田たつお 選
「思案」 西出 楓楽 選
「ろまんす」 土橋 房枝 選

会費 2000円(参加賞、大会誌呈、軽食あり)
賞 文化祭賞・文化祭奨励賞・文化協会賞・操子賞・きしせん賞

懇親会 別会場(17時～19時) 定員30名
会費 4000円(当日いただきます)

申込み先 井伊 東吉 072-444-3227
岩佐ダン吉 072-428-0325

主催 岸和田市・岸和田教育委員会

共催 岸和田市文化祭 実行委員会

連絡先 岸和田川柳会
井伊東吉 TEL・072-444-3227

第42回 東大阪市文化祭参加 第36回 市民川柳大会

日時 10月19日(日)
会場 東大阪市社会教育センター 3階
☎06-6789-4100

近鉄布施駅下車 北口から5分

ビデオ放映 「日本の城」

宿題(各題2句・出席者のみ) 出句締切り 1時

「遊ぶ」 松井 秀夫 選
「もがく」 有田 一央 選
「食べ物全般」 井上 一筒 選
「愛」 大内 朝子 選
「遙か」 川端 一歩 選
「閉じる」 久保田 半蔵門 選
「街」 松本 あや子 選

各題秀句に市長賞・佳作賞・軽食・茶・発表誌呈
会費 1,500円 懇親会 4,000円

お問い合わせ 片岡 湖風 072-965-1341

主催 東大阪市文化連盟・東大阪市川柳同好会・わかば川柳会

後援 東大阪市教育委員会

第29回 栃木市文化祭・川柳大会

とき 10月12日(日) 10時開場
ところ アプロニー 5階
栃木市河合町3の26 TEL0282-22-8743
(東武・JR栃木駅北口1分)

宿題

「やかましい」 東京 播本 充子 選
「巢」 埼玉 佐藤美枝子 選
「ラーメン」 栃木 中西 隆雄 選
「疑問」 埼玉 岡部 美雄 選
「のんき」 栃木 荒井 宗明 選
「時計」 東京 伊藤 正紀 選

特別課題

「血筋」(1句吐) 渡辺 裕司 謝選

席題2句当日発表 各題共2句吐 11時50分締

会費 2000円(昼食、大会誌呈)

呈賞 合点20位まで 参加吟1句(旧作可)

主催 不二見川柳社 栃木市教育委員会 他

問合せ 事務局 0282-23-2298 福田一二三

井原市文化祭川柳大会 第6回おかやま県民文化祭協賛

日時 11月8日(土)
開場 10時 出句締切り 11時半

ところ 井笠地域地場産業センター
事前投句 各2句 投句料 千円(郵便小為替)
締切り 10月3日 専用紙又は便箋に6句
兼題と選者

〔一番〕 野村 賢悟 選(三原)
〔星〕 田中 道博 選(矢掛)
〔雲〕 山本 美枝 選(岡山)

当日投句 各2句

兼題と選者

〔野球〕 生駒 聖天 選(久米南)
〔興す〕 西川けんじ 選(岡山)
〔彫る〕 小島 蘭幸 選(竹原)
〔席題〕 高木 勇三 選(笠岡)

当日会費 1500円(軽食・発表誌呈)

賞 優秀作品に賞品を贈る

投句先 〒715-8601 井原市井原町311-1
井原市教育委員会内 川柳大会係 宛
TEL・0866-62-9541

主催 井原市文化協会 後援 岡山県文化連名他

柳界展望

○7月8日、東京台東区生涯学習センターに於て、朝顔川柳大会開催。出席170名 同人の天位。

日記 播本 充子

○7月13日、第11回鳥取県川柳文芸大会は、新日本海新聞社ホールにて24名の参加により開催。同人の天位。

あの世でのランクこの世を弄ぶ 鈴木 公弘
いま跳ねておかねばすくに消える泡 鈴木 公弘
総合成績の優勝鈴木公弘、入賞両川洋々、両川無限、倉益一瑤、池森子、武田帆雀

○7月13日、第12回川柳展望全国大会はホテルアウイナにて開催。同人の秀句。

しじみ汁男に何を期待する 谷口 義
ばら園のばらばかりのばら畑 西内 朋月
○7月27日第三回松江川柳大会、出席140名。同人秀句

蛇もあなたも乾いたあとがおもしろい 原 章峰
転がってみて青空を掴まえた 白根ふみ

こつそりと八十歳が近くなる 土橋 螢
蝉しぐれ返事をしない蝉がいる 原 章峰

○7月31日第26回夜市川柳大会、出席130名。同人天位

鯛も鯛もそれぞれにいるファン 西口いわゑ
甲賀くの一あけすけの術を持つ 高島 啓子
旧姓でわたしを呼びに来た蛍 太田扶美代
わたくしの赤を引っ張る風の乱 池 森子
子がみんな食べてしまった僕の夢 両川 無限
閃いたところへ墜ちてき

たりんご 木本 朱夏
びっくり箱の中にスビー 下社の水着 谷口 義
敵は一枚上手で美味い薯を煮る 木本 朱夏

○前たもつ氏(相談役・大阪市)から、句集発刊を記念して金一封拝受。

▽出 版△
○穴吹尚士氏(常任理事・吹田市)は朝日なわ柳壇入選百一句を記念して句集『定年からの川柳』を発刊(B6版66頁)

▼計 報▲
●西尾美與子さん(前々主幹西尾葉夫人、理事古今堂蕉子さんの母堂・八尾市)8月3日逝去。96歳。葬儀は8月5日行われた。

▽柳界動向△
○番傘川柳本社8月句会(水府忌)は8月6日、ホテル大阪ベイタワーに於て開催。出席者123名。川柳塔社から10名が参加。7月路

○8月号97頁上段30行目、ひそひそと二千円札……の句の作者美智子・美和子101頁下段5行目涼風・凜風117頁4段9行目八坂・矢阪114頁下段19行目と25行目大隈克博・大隅克博

新同人紹介(前月承認)

坂 さか
— 楓楽・遠野・蕉子推薦
裕 ひろ
— 之 ゆき

森 もり
田 た
— 天笑・修・集一推薦
麗 れい

奈良県 中村 勝弘

紹介者 渡辺 富子

岸和田市 林 司

紹介者 井伊 東吉

福岡市 三宅 須美

紹介者 田中 章子

西宮市 足立 茂

紹介者 山口 光久

伊丹市 青木 基輔

紹介者 山口 光久

常任理事会 8月8日(金)出席18名①川柳塔まつり詳細決定②高野山合祀の件③新年度役員④定例確認事項⑤各部報告事項⑥その他

次回9月8日(金)1時30分

▽新誌友紹介△

○作者申し出による訂正
8月号94頁エッセー7行14字目から次の文と挿入する。「子規の文章にも同様の話があったかと思うが」

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳さんだ	16日(火)午後1時より 疲れ・寿司・こぼれる・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
岸和田川柳会	20日(土)午後2時締切 延長・おさめる・がたがた クラブ	岸和田市立福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
富柳会	20日(土)午後1時半締切 第58回 富田林川柳大会 安・直・間・続・効・ゆとり	富田林中央公民館 (詳細8月号95頁参照) (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
岬川柳会	21日(日)午後1時半締切 下・思い出・回転	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳ねやがわ	21日(日)午後1時半締切 条件・パート・生きがい 自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳藤井寺	21日(日)午後2時締切 順番・ナース・席題	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
南大阪川柳会	22日(月)午後6時から 家族・達する・難しい・雑詠	住まい情報センター (大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露川柳会	22日(月)午後7時半から 実る・迷う・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブわたの花	26日(金)午前9時半から 透明・グロッキー・葉・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川柳塔すみよし	27日(土)午後1時半から 対話・留守・麦	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
東大阪市川柳同好会	27日(土)午後7時締切 仲間・沈む・メモ・壁	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
和歌山三川柳会	27日(土)午後1時から 奪う・坂・ファッション	和歌山市勤労者総合センター4F 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
はびきの市川柳会	28日(日)午後2時締切 弱い・わくわく・マラソン・瓦	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	28日(日)午後1時から ギブアップ・ちくしょう・番人	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
京都塔の会	29日(月)午後2時締切 ずれる・砕く・波長	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	4日(木)午後1時から 外す・茶・マニア	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口徒歩5分) 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北会 川柳会	6日(土)午後1時開場 大物・とぶ・ゼロ・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉会 川柳会	6日(土)午後2時締切 三角・柿・それから	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時開場 いのち・調べる・フリー 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
川柳塔 唐津	8日(月)午後1時半から 舌・ざわざわ・クイズ	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほたる 川柳会 同好会	9日(火)午後1時半締切 宝・配る・くねくね	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
尼崎 尾浜 川柳会	9日(火)午後2時締切 月・重なる・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
堺川柳会	12日(金)午後1時から 辛抱・笑う・「えちご(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 わかやま 吟社	県大会のため例会は ありません	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳塔 みちのく	13日(土)午後5時半締切 癖・岬・箸	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳塔 打吹	13日(土)午後2時締切 泊・野・転ぶ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 まつえ	13日(土)午後2時締切 嘘・移す・奇跡・カード	松江市西津田 松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳大阪	13日(土)午後1時から 突然・異・マンネリ	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
八尾市民 川柳会	14日(日)午後1時から 午後・遊ぶ・きらきら・雑詠	山本コミュニティセンター3F (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
もくせい 川柳会	15日(月)午後1時50分締切 助ける・反省・長い・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清

編集後記

★9月号から水煙抄、檉抄の選者が交代しました。昨年度の選者には一年間御苦勞さまでした。バトンを受けられた今年度選者の方よろしく願ひ致します。

檉抄では限られた紙面に少しでも入選句を多くするため、選者吟を省かせていただきました。たくさんのご応募お待ちしています。

★9月14日、鶴彬の没後70年を記念して顕彰碑の除幕式並びに川柳大会が開催されます。二月に植樹された三本の百日紅はしっかりと根付き、見事な花を咲かせていることでしょう。

★8月1日付朝日新聞「天声人語欄に鶴彬について、反戦思想、時代の批判、非人間性への怒り等川柳を交えて紹介されました。鶴彬の名前、川柳も広く知れわたっていくことでしょう。

★特集ペットものがたりに多数の原稿を寄せていただき感謝しています。

常に人に寄り添い暮らすペット、人間に命を守られながら大きな癒しとなつて、恩返しをしてくれるペットの話には感動をしました。中には同居の孫のペットに怖れおののいている等バラエティに富んだ楽しい特集となりました。

★川柳塔すみよし発足記念句会では、大会初参加の新誌友が天位に入選、ペテラも新人も、川柳の土俵はひとつとということが、あらためて実証されました。

★地域によって川柳塔誌の運配があるようです。郵便局側の事情なのでしようが、土日ははさむと発送日から五日くらいかかっている現状です。発送日は厳守していただきますのでしばらくお待ちくださいようお願いいたします。(希)

ひとつこと

「川柳脳タコ」を作っちゃおう

最近の脳医学はすばらしい進歩を示している。テレビはその高度で専門的な内容を、シリーズなどで解りやすく説明してくれる。情報は脳の機能や病態、心の問題、能力トレーニングなどである。

いつかの朝日新聞で、将棋の米長永世棋聖が「右の頭の上から2割くらい下った辺りには、ピンポン球の半分ぐらいのものが埋め込ま

れたような感触があった」と言っている。これが「脳タコ」である。頭脳を懸命に使ったら、脳の一部が普通の人より大きくなることがあるらしい。子どもの頃から訓練を続けてきたプロ棋士などが、高度に頭を使ったとき、常人と違つた経験をするようだ。

職人技や芸能を学ぶ人たちの、きびしい修業ぶりを聞くことがある。もうかなり手遅れだが、私も「川柳脳タコ」のカケラを作りたいと思う。(早川 清生)

○国会が捻じられて、大連立が民主党議員や国民の反対で潰れて、もう一年近くが過ぎました。幾つかの法案は強行採決か、是々非々の与野党協議で成立しました

造をしたのみで緊急の経済対策もないまま夏を越しそうです。年金も医療も軋んだま目に見える解決策がなく、いつ国民の納得できる答が出るのか、お先真つ暗です。

えなければならぬのでしよう。一方、国民も選挙権を必ず行使する強い決意を持つべきです。棄権して愚痴ばかりこぼしていても、この国は良くなりません。

○原油の高騰の影響で、物の値上りが止まらず、多くの産業がマイナス景況となり、株価も大幅下落しています

○敗戦後六十年余を過ぎ、日本の多くの部分で制度疲労が起きています。この国が住み良い国であるために、政・官・財それに官公労も既得権を手放し、初心に返って国の有り方を考

などの形で、制度疲労は我々柳社にも起きています。先人の遺産を生かしながら、川柳塔を逞しく育てるシステムはないものか、考え込むこの頃です。(尚)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(11月号)

地名

都道府
市

姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「許す」 (9月15日締切)

11月号発表

木本 朱夏 選 — 共選 — 高瀬 霜石 選

B A

--	--

地名
市都 道府
姓雅号

B A

--	--

地名
市都 道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

○ ○		紹介者	電話	住所	氏名
年	年		—	〒 —	
月 から 一年	月 から 半年		—		
9 8 0 0 円	5 0 0 0 円				
該当の方に○をつけて下さい					

〒543
-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 009804298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

川柳塔 (8句) 河内天笑選
 水煙抄 (8句) 小島蘭幸選
 愛染帖 (3句) 新家完司選
 檸檬抄「許す」 (2句) 高瀬霜石共選
 木本朱夏選
 一路集 (3句) 「舌」 岩本笑選
 「さわさわ」 野口節子選
 「クイズ」 坂本蜂朗選
 黒「(3句) 三宅保州担当

11月号発表 (9月15日締切)

12月号
 檸檬抄「去る」
 一路集「冬」「終る」
 「イベント」
 初歩教室「終る」

本社9月句会

とき 9月8日(月) 午後5時半開場・6時半締切り
 開催時間、締切時間に注意下さい。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし 「芭蕉川柳愛好会」
 席題 「 井上桂作選
 「 山本義子選
 「 坪井孝一選
 「 大さき」 宮本かりん選
 「 幅」 龍島恵子選
 「 浴びる」 村上玄也選
 「 コーナー」 河内天笑選
 「 演 技」 (各題2句以内)

会費 1000円 投句料 500円(切手可)

本社10月句会は第14回川柳塔まつりとして、10月5日開催します。
 (表紙裏を参照して下さい。)

第27年度 夜市川柳募集

選司 完家新 「鼻」 第4回
 締切日 9月末日
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌友半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇八年(平成二十年)九月一日発行

発行人 河内 權治

編集人 山本 希久子

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(06)六七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

鳥取県総合芸術文化祭

第32回 鳥取県川柳大会

とき 11月16日(日) 10時開場 開会13時20分
ところ 米子コンベンションセンター 小ホール(二階)

米子市末広町74 JR山陰線「米子駅」下車三分

駐車場完備 TEL0859-3518111

兼題と選者(各題2句・席題なし・出句締切12時)

- 「励ます」 小西 雄々 選(鳥取県)
- 「選ぶ」 谷口 次男 選(鳥取県)
- 「好き」 小谷美ツ千 選(鳥取県)
- 「身」 竹治ちかし 選(島根県)
- 「油断」 大家 風太 選(岡山県)
- 「楽器」 赤松ますみ 選(大阪府)
- 「らしい」 川上 大輪 選(和歌山県)

表彰 鳥取県知事賞ほか(計7賞)

会費 2,000円(作品集・昼食呈)

欠席投句 1,000円(小為替) 10月25日必着 用紙自由

ジュニア部門(事前投句)

「先生」(2句・無料) 小林由多香 選

投句先(問い合わせ先)

〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-13 小西雄々方

第32回鳥取県川柳大会実行委員会 宛

TEL0859-6211520

主催 鳥取県川柳作家協会・文化団体連合会 後援 米子市ほか

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十年九月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年(通巻九七六号)

柳塔 九月号

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 020 0120-30-5050